

6 7 8 9 18  
60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18

始



56  
86

醫學三士輪信太郎慕著  
小兒科學 卷上

增訂第七版

新嘉坡華南書局行

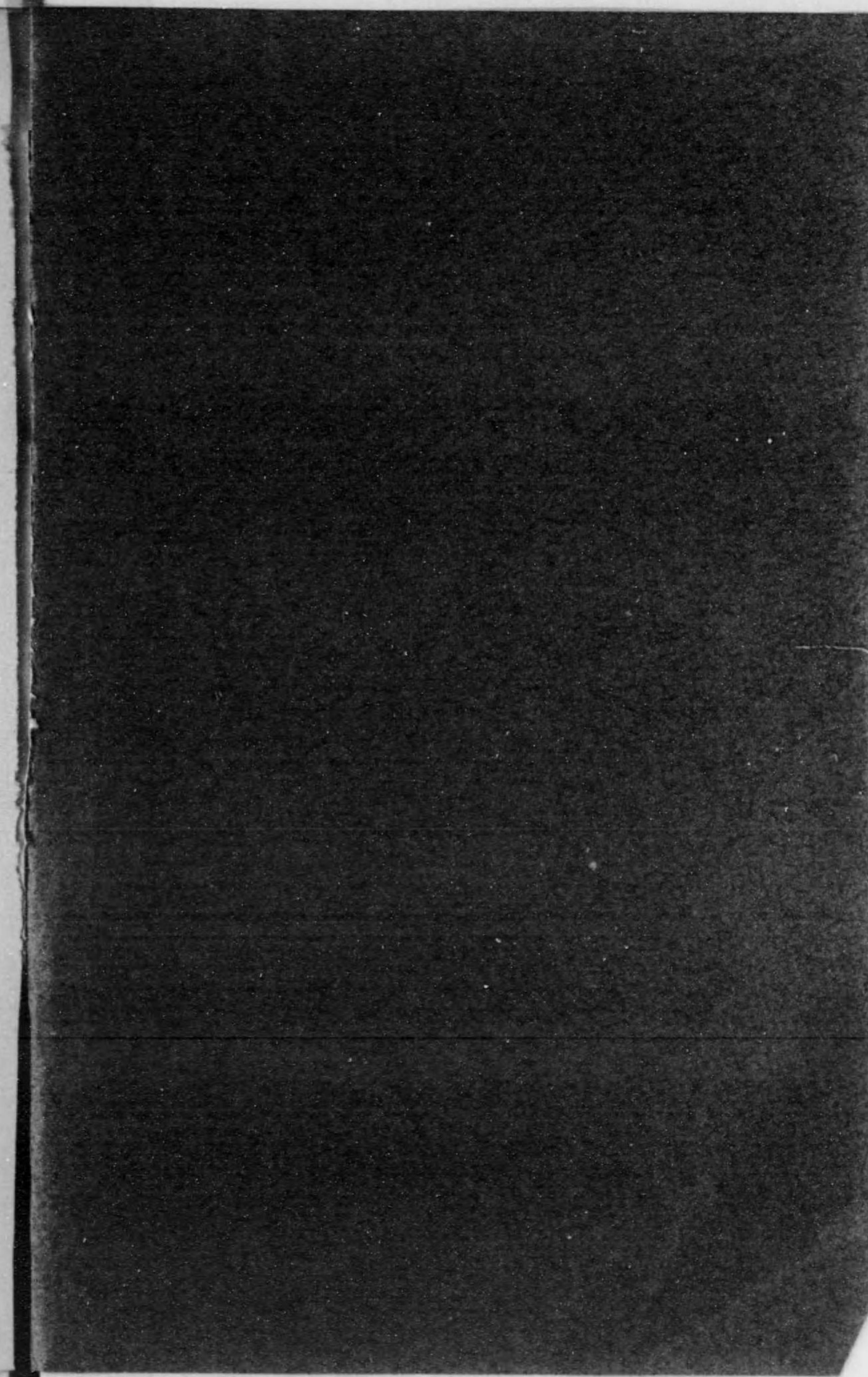
東京 南山堂書店發行

兒科學 上卷

14. 11. 17  
内交



醫學博士三輪信太郎纂著



小兒科學第七版叙

大正十二年九月一日ノ事變ハ余儕ノ衣食住ヲ奪ヘリ、凡百ノ財物ヲ焼ケリ、震災前完成ニ殆キ小兒科學第七版ノ草稿モ灰ニ化シタリ、茲ニ我小兒科學ハ延壽堂ノ寂滅ニ殉シ、全ク天我ヲ亡セリノ情勢ナリキ、然ルニ余ハ此危急ノ秋ニ當リテ人情ノ機微ヲ覺ル所アリ、而シテ五個月ノ蟄伏ハ延壽堂ヲ興シ、災後二年ヲ閱シテ此版ヲ出シ得ルハ、蓋シ不可思議ノ僥倖ナリトス、而カモ今回ハ總論、榮養編等ニ訂正ヲ爲シタリ矣、災時約百五十人ノ同胞ヲ安全地帶ニ導キ、職責ヲ完ウシタルハ天籠餘財ヲ收拾シテ延壽堂事業ヲ復活シタルモ亦天籠、尙ホ此版ヲ出シ得ルニ徵シテモ天ノ寵兒タルコト明白ナル微軀ハ、特別ノ使命アルコトヲ自覺シ、自重セザル可カラズ。

茲ニ總テノ所有物ハ必ラズ喪失スルノ機アルヲ體驗、觀念セルノ余ハ、聊カ感想ヲ陳ネテ小兒科學第七版ノ叙トナシ以テ比較的滅亡セザル記錄テフモノノ力ニ依賴ス。

大正十四年九月廿一日

鳥歌舞花舞樓上ニテ  
稟 龍

第六版 叙

延壽堂ヲ開設シテヨリ殆ンド満七箇年。

同人ノ熱心ナル援助ト、我不屈不撓ノ奮勵ト相俟チテ、漸ク其樹立ヲ得タル耶、治療ヲ需ムル者四方ヨリ來集シ、余僻其應接ニ忙殺セラル、之レ欣喜スペキコトナリ。延壽堂創業ノ吉凶ヲトスルタメ、是ニ先チ發程セシメタル本書ハ、約七年九箇月ニ第六版ヲ出スニ至レリ、之レ又一面ニハ欣喜スペキコトナリ、然レド他ノ一面ニハ憂惱スペキコト伏在セリ、何トナレバ一身ノ多忙ハ久シク本書ニ就テノ注意ヲ怠ラシメ、茲ニ前版ニ比シテ何等ノ進化ナクシテ世ニ出スハ、之レ憂惱スペキ事ニアラズヤ。

語ニ曰ハズヤ「禍福ハ絢エル繩ノ如シト、欣喜又憂惱ノ交錯スルハ天ノ攝理ニシテ、吾人ノ發奮ヲ促サシムル所以ニ非ルナキ歟。」

大正九年八月七日

正

國

記

第五版 叙

小兒神ニ事ツル爲メ建立セル一小神殿、即チ我延壽堂ハ本日ヲ以テ創設後五年

## ノ星霜ヲ閱セリ。

昔時武家ニ往々傳來ノ妙藥アリキ、我家ニモ赤玉ナルモノヲ傳ヘリ、丸藥ニシテ丹衣スルヲ以テ其名ヲ得、祖父政溫ハ延壽軒ノ名ヲ用ヒ、之ヲ所望者ニ頒布セリト云フ、此說ヲ叔父癡童ヨリ聞き、因テ我病院ヲ延壽堂ト命名シ、祖父ノ遺志ヲ繼承シ、且ツ之ヲ廓大セントヲ欲ス。

又茲ニ大正二年一月十日發行ノ小兒科學モ將サニ第五版ヲ上梓セントスルニ至ル、前版ニ比シテ八頁、二表四圖ヲ增加セリ、然レドモ之ヲ世ニ公ニスルニ當リ誤謬ノ多キヲ思ヒ、衷心不安ノ念アルハ、癡鈍ノ愛兒ヲシテ孤獨征途ニ上ラシムルノ婆心ニ似タリ。

人事往クモノ來ルモノ總テ夢ノ如シ、彼レヲ思ヒ、之レヲ思ヘバ感慨無量、唯ダ天稟ノ賦與ニ應ジテ努力スルアル而已、成敗興亡舉ゲテ天ニ在リ。

白熱シタル情意ヲ轉ジテ、頃日余ガ獲得セル一書幅ヲ紹介セん、其文ニ曰ク  
雖貧勿求無緣之產、雖窮勿諳貧窮素非私唯所致不幸之也、悠々如龍猛々如虎抱德隱名潛身以當待一陽來復之時、若不逢時則了生未來之境涯樂彼天命更無疑

楠公語一則 壬戌如月風居士源子節錄

以テ第五版ノ序トナス。

大正七年九月六日

輝龍 三輪信太郎識

## 第四版叙

缺本三ヶ月ニ亘リ需要急促、漸ク此版ヲ出スニ到レルハ、我光榮ニシテ欣喜スル所ナリ。

前版ニ比シテ約十頁ヲ減ジ、一圖ヲ増セリ、是レ冗長散漫ナル字句ニ斧鉢ヲ下シタルヲ以テナリ、然レドモ紙面ヲ減少スレバ、隨ツテ内容ヲ増補シ、四百四十八頁マデハ葉數ヲ縮メザリキ、其頁以下ニ於テハ、自己ノ好ンデ爲セル省略ト、植字工ノ甚シキ紙數儉約ト相俟チテ、如上ノ結果ヲ生ゼリ。

但シ大體ヨリシテハ内容ノ増加セルコト勿論ナリトス。

大正五年十二月十二日

著者識

## 第三版叙

日夜延壽堂ニ蜡集スル數多ノ急務、重複シタル人生ノ不幸(岳父ノ長逝ヲ先導セ

小兒科學 自叙

ル稚兒ノ死去、其ニ之レ小兒神ノ其行者ヲ鍛練セラル、攝理ト畏ミツ、渾身ノ精力ヲ發揮シテ小心翼々事ニ當ルノ秋第三版ノ發行ヲ促シ來ル、是レ亦神ニ事ツルノ業、固ヨリ忽ニスベカラザルナリ。

然レド僅ニ字句ノ訂正、若干ノ内容補足、二圖ノ添加、破傷風、恐水病ヲ本卷ニ上セ、隨ツテ十四頁ヲ膨脹シタル等ニ過ギズ、實ニ慚愧ニ值ルナリ。

大正四年六月十日

嘯月樓ニテ  
著　　者　　識

## 第二版　叙

小兒神ノ奴僕タリ、一行者タルヲ誇リトナス微軀ハ、小兒科學上卷テフ小履ノ片足ヲ神前ニ舉示シテ、彼ノ仁王尊前ニ巨鞋ヲ陳列スルノ因習ヲ襲ヘリ、賽神ノ衆ノ願ル所トナリ、初版須叟ニシテ盡キス。

此粗惡ノ物ニシテ此歡迎ヲ獲ムトハ、神恩ノ洪大ナル山海ノ如ク、渴仰ノ念ニ堪ヘズ。

茲ニ聊カ字句ヲ訂シ、誤謬ヲ遠ケ、四圖ヲ刪リ三圖ヲ添ヘ、別表二葉ヲ増シ、種痘様式ヲ加ヘ、榮養障礙篇ノ順序ヲ更メタル等、洵ニ親善ナル同僚ノ補佐ニ益ヲ得タ。

ルコト夥シク、是亦感謝スペキナリ。

大正二年五月十七日

東京醫科大學  
小兒科助教授室ニテ  
著　　者　　識

## 自　叙

境遇ハ微軀ナシテ已ニ青年期ニ於テ怪異ノ念ヲ懷カシメ了  
レリ。

形ヲ宇内ニ寓スルコト復タ幾時ゾ。

曷ゾ心ノ之クニ任せテ行動セザル。

胡爲レゾ毀譽褒貶ニ囚ハレントス。

醉生夢死亦妙ナラズ乎。

更ニ信念ノ生ジ來レルアリ、涓々トシテ泉ノ流ル、ニ似タリ。

刹那ノ人生、醉生夢死モ亦快ナラズ、愉ナリトセズ矣。

奚ゾ汝ノ愚鈍ヲ舉ゲテ之ヲ獻ズルノ明主ヲ求メザル。

翻然遍ク探討シテ遂ニ小兒神ニ奉事スルニ決セリ、神託ニ宣

ハク

小兒ノ伴侶タラント欲セバ、須ラク該時代大家ノ高説ノ  
要領ヲ解シ得ル程度マデ學習スペシト。  
故ニ我邦ニ於テハ弘田博士ニ教ヲ請ヒ、獨逸國ニ往ヒテハホ  
イブネル氏ニ師事セリ。

願望此ノ如ク牢乎タルアルモ、愚鈍ハ神前ニ何等ノ犠牲ヲ供  
ヘズ、萬斛ノ信念ハ讀書スルニモ、試驗管ヲ把持スルニモ、聽診  
器ヲ手ニスルニモ、行住座臥之ト偕ニセリ。

最近十數年小兒科學ノ勃興ニ隨ヒ、新説ノ出ヅル應接ニ違ア  
ラズ、微軀ナシテ後ニ瞠若タラシメ、將ニ昔日ノ誓ヲ破リテ、  
登東臯以舒嘯

雲無心以出岫

邊ニ遊觀ノ意ヲ慾ニセントスルノ念切ナラントセル比ヒ、斯  
クテハ師ニ背キ、神ニ反キ、亡キ母ニ逆フノ罪アリト囁クノ聲

アリテ肝ニ徹セリ。

奮然トシテ憤ヲ發シ、自ラ修養スルヲ主トシ、傍ラ同感ノ士ノ参考ニ資セント欲シ、先づ小兒科學一巻ヲ綴リテ菲薄ナル供物トナス、此ノ舉ニ使役セラル、コト十月ヨリ十二月、約三箇月ニ亘リテ功將サニ成ラントス、愚鈍ノ所行固ヨリ粗漏杜撰ラ免レズ、小兒科學界ニ寸毫ノ貢獻ナク、士君子ノ嗤笑ヲ甘受スルアルノミ。

父病ミ、子病ミ、躬ラ病ムノ裡ニ在リテ、短日月ニ一氣呵成ノ勢ヲ以テ成リシハ、未ダ微軀頑健ノ天賜ヲ失ハザルモノ歟、且此ノ舉神慮ニ適ヘルニ由ル歟、期セズシテ精銳ナル二士ノ來リ援クルアリ、書中ノ善美ハ彼ニ因リ、醜惡ハ我ニ在リトス。

大正元年十二月十七日

著　者　識

訂正版 小兒科學 上巻目次

總論

第一章 生理及解剖概論	一一七
一、化學的構成	一
二、脈搏	二
三、血液	三
四、呼吸器系統	四
五、皮膚	五
六、體溫	六
七、消化器系統	七
八、泌尿器系統	八
九、神經系統	九
十、精神作用	一〇

**第二章 小兒發育論**

一七一—二八

一、身長	一七
二、體重	二〇
三、頭圍	二五
四、胸圍	二五
五大顎門	二七
六、生齒	二八

**第三章 乳汁ニ就テ**

二九一—四一

一、初乳	二九
二、永久乳	三一
<b>乳汁ノ成分</b>	
(イ) 蛋白質	三一
(ロ) 含水炭素	三四
(ハ) 脂肪	三四
(シ) 鹽類及礦質成分	三六

**第四章 小兒ノ栄養法**

四二一—七二

第一 人乳栄養法(天然栄養法)	四四
廢孔ニ就テ	四六
授乳婦ノ攝生	四九
母乳栄養ノ方法	五二
乳母ノ選擇	五七
離乳又ハ断乳	五九
第二 人工栄養	六〇
人工栄養ノ方法	六一
一牛乳ノ稀釋法	六一
二牛乳ノ量	六三
三授乳ノ度數	六四

小兒科學上 目次

四

四、牛乳製品及ビ加工牛乳.....六四

五、牛乳ニ加入スル含水炭素.....六八

第三 混合栄養法

七二

第五章 小兒ノ診察法及ビ小兒病ノ診斷

七三—九一

一、一般ノ疾病徵候.....七四

二、營養狀態及ビ體格.....七五

三、皮膚.....七七

四、顔貌.....八〇

五、啼泣、咳嗽.....八一

六、眼、耳、鼻.....八一

七、口唇.....八一

八、口腔.....八二

九、咽頭.....八二

十、淋巴腺系統.....八三

十一、胸部ノ検査.....八三

心臟.....八四

肺臟.....八五

十二、腹部ノ検査.....八五

十三、尿.....八六

十四、神經系統.....八七

十五、レントゲン撮照法.....八九

第六章 一般豫防法及ビ療法總則

九二—一六

第一 一般豫防法

九二

第二 療法總則

九五

一、發熱ニ對スル療法.....九七

二、體溫下降ニ對スル療法.....九九

三、虛脱ニ對スル療法.....九九

四、呼吸興奮法.....一〇一

五、水分脫却ニ對スル療法.....一〇二

六、排便法.....一〇五

七、胃洗滌.....一〇七

八、收斂劑.....一〇八

九、麻醉劑	一一〇
十、催眠藥	一一〇
十一、強壯劑	一一〇
十二、藥剤ノ用量及之用法	一一三

## 各論

### 第一編 初生兒疾患

第一 早產兒	一一七—一六三
第二 假死	一一三
一、先天性假死	一一三
二、後天性假死	一二五
第三 初生兒(メレーナ)	一二六
第四 初生兒黃疸	一二九
第五 初生兒紅斑	一三一
第六 初生兒鞏膜硬病	一三一
第七 分娩時外傷	一三三

一、壓迫印象	一三三
二、骨外傷	一三四
三、產瘤	一三四
四、頭血腫	一三五
頭內血腫	一三七
五、腦出血	一三八
六、胸鎖乳頭筋血腫	一三九
七、神經麻痺	一三九
(1)、上脣神經叢麻痺	一三九
(2)、顏面神經麻痺	一四一
第八 膀胱部疾患	一四一
一、先天異常	一四二
(1)、皮膚	一四二
(2)、羊膜腔	一四二
(3)、臍帶ヘルニヤ	一四二
(4)、臍帶	一四四
(5)、臍帶管膜管ノ遺存	一四四
(本)胎生尿管瘻	一四四

## 二、臍部傳染性疾患

(1) 臍帶壞死 ..... 一四四

(2) 臍壞疽 ..... 一四五

(3) 臍膿漏 ..... 一四五

(4) 臍部潰瘍 ..... 一四六

(5) 臍息肉 ..... 一四六

(6) 臍血管炎 ..... 一四七

(7) 初生兒(テタヌス)(破傷風) ..... 一四九

## 三、臍出血

(8) 初生兒敗血症 ..... 一五二

(9) 初生兒丹毒 ..... 一五三

(10) 初生兒急性膿漏眼 ..... 一五七

(11) 初生兒乳腺腫脹及ビ乳腺炎 ..... 一五九

(12) 初生兒蛋白尿 ..... 一六〇

(13) 初生兒尿酸梗塞 ..... 一六一

(14) 初生兒大水疱疹 ..... 一六二

(15) 剝脫性皮膚炎 ..... 一六三

## 第二編 小兒榮養障礙 ..... 一六四—二四六

## 第一章 哺乳兒榮養障礙 ..... 一六四—二三九

(1) 榻養障礙ノ意義 ..... 一六四

(2) 人工榮養兒ノ榮養障礙 ..... 一六四—二三九

(3) 一般原因及ビ病理 ..... 一六六

(4) 榻養障礙ト異種乳汁 ..... 一六六

(5) 榻養障礙ト榮養物質過剩或ハ耐力超過 ..... 一六七

(6) 榻養障礙ト榮養物質不足 ..... 一六八

(7) 分類法 ..... 一六八

(8) 甲 非毒性榮養障礙 ..... 一七〇

(9) 第一 榻養不良(舊名平衡失調症) ..... 一七八

(10) 二、乳汁偏養ニ依リテノ榮養不良即チツエルニー及ビケルレル氏乳汁 ..... 一七八

(11) 榻粉偏養ニ依リテノ榮養不良即チツエルニー及ビケルレル氏ノ穀粉 ..... 一七八

(12) 穀粉榮養障礙ニシテ腎臟炎ニ酷似セル外觀ヲ呈シタル一例 ..... 一八四

小兒科學上卷 目次

蛋白乳

一〇

- 三、不充分ナル栄養ニ依リテノ栄養不良 ..... 一九三  
單純性定量的饥饿 ..... 一九三

- 四、消化不良ヲ伴ヘル栄養不良慢性消化不良症 ..... 一九四  
第二 消耗症(小兒削瘦症) ..... 二〇五

- 乙 中毒性栄養障礙  
第一 急性消化不良症 ..... 二一五  
第二 食餌性中毒症 ..... 二一六

- 第二 人乳栄養兒ノ栄養障礙 ..... 二一六  
榮養不給(饥饿) ..... 二一七  
吐乳及ビ溢乳 ..... 二一八

- 一、人乳栄養兒ノ消化不良症 ..... 二一九  
外因的障礙ニ依ル消化不良症 ..... 二二〇  
内因的障礙ニ依ル消化不良症 ..... 二二一

- 二、乳兒脚氣 ..... 二二二  
二、乳兒脚氣 ..... 二二三

第二章 兒童期ニ於ケル栄養障礙 ..... 二四〇—二四六

第三章 異常體質(ヂアテーゼ) ..... 二四六—二七七

- 第一 滲出質 ..... 二五二  
第二 神經痛風質或ハ痛風質 ..... 二五九

- 第三 胸腺淋巴性體質 ..... 二六六  
第四 ホイブル氏淋巴質 ..... 二七六

第三編 急性傳染病 ..... 二七八—四四六

- 第一 猩紅熱 ..... 二七八  
猩紅熱水痘及麻疹ノ併合例 ..... 二九四  
第二 麻疹 ..... 二九七  
第三 風疹 ..... 三一三  
第四 傳染性紅斑 ..... 三一五  
第五 チューリク、フィラトウ氏病、第四病 ..... 三一六  
第六 水痘 ..... 三一六

## 第七 痘瘡

附 種痘

種痘法

種痘法施行規則

種痘術心得

## 第八 實扶的里

腸窒扶斯

「バラチフス」

## 第九 腸窒扶斯

「バラチフス」

## 第十 腸窒扶斯

「バラチフス」

## 第十一 赤痢附 疫病

「アカシラヒツウツクシ」

## 第十二 亞細亞虎列刺

「アシアヒューリッセ」

## 第十三 疫喉百日咳

「エイコウヒヤクジケイ」

## 第十四 「インフルエンザ」流行性感冒

「インフルエンザ」

## 第十五 流行性耳下腺炎

「インフルエンザ」

## 第十六 丹毒

「ダントウ」

## 第十七 「ベスト」又黑死病

「ベスト」

## 第十八 麻拉利亞、間歇熱

「マラリヤ」

## 第十九 流行性腦脊髓膜炎 一種ノ流行性腦疾患ニ就テ

「インフルエンザ」

## 第四編 消化器系統疾患

## 第一章 口腔疾患

四四七—四五六

## 第一 加答兒性口腔炎

四五七—四五八

## 第二 膽毒性口腔炎

四五八—四五九

## 第三 亞布答性口腔炎

四五九—四五〇

## 第四 齒口瘡

四五〇—四五一

## 第五 糜爛性口腔炎

四五一—四五二

## 第六 水瘤(壞疽性)口腔炎

四五二—四五三

第七 生齒困難.....

四五五

第八 唾液腺疾患.....

四五五

## 第一章 食道疾患.....

四五六—四七〇

第一 先天性異常.....

四五六

一、先天性食道閉鎖.....

四五六

二、先天性食道狹窄.....

四五六

三、先天性食道憩室.....

四五七

第二 後天性疾患.....

四五七

一、食道腐蝕.....

四五七

二、食道鶴口瘡.....

四五九

珍奇ナル食道鶴口瘡ノ一新例.....

四六〇

## 第二章 胃疾患.....

四七〇—四八〇

第一 哺乳兒幽門狹窄.....

四七一

一、肥厚性幽門狹窄.....

四七一

二、幽門痙攣.....

四七六

## 第四章 腸疾患.....

四八〇—五三四

第一 先天性腸管閉鎖.....

四八一

第二 ヒルシユスブルング氏病(先天性巨大結腸).....

四八二

臨床ト剖検トニ證明セラレタルヒルシユスブルング氏病ノ一例.....

四八五

第三 腸疊積、腸鉗頓.....

四九六

一、急性疊積.....

四九九

二、慢性疊積.....

五〇一

第四 直腸脱肛.....

五〇四

第五 肛門裂傷.....

五〇五

第六 腸管腫瘍.....

五〇六

一、良性腫瘍.....

五〇六

二、惡性腫瘍.....

五〇六

小兒ノ廻腸ニ發生シタル淋巴肉腫.....

五〇六

第七 「ヘルニア」.....

五一四

一、鼠蹊「ヘルニア」.....

五一五

二、臍「ヘルニア」.....

五一六

第八 蟲様突起炎.....

五二六

第九 便秘.....

五二八

第十 児童ノ腸加答兒.....

五三四

一、小腸加答兒.....

五三八

二、大腸加答兒(大腸菌性大腸加答兒).....

五三〇

三、濾胞性腸加答兒.....

五三二

四、義膜様腸炎・粘膜症痛.....

五三四

## 第五章 腹膜疾患.....

### 第一 化膿性腹膜炎.....

五三四—五四六

一、初生兒化膿性腹膜炎.....

五三四

二、蟲様突起炎性腹膜炎.....

五三四

三、肺炎菌性腹膜炎.....

五三五

四、連鎖狀菌性腹膜炎.....

五三六

五、淋菌性腹膜炎.....

五三八

### 第二 結核性腹膜疾患.....

五三八

一、腸間膜腺結核及ビ後腹膜腺結核.....

五三九

二、結核性腹膜炎.....

五四一

### 第三 腹膜腫瘍.....

五四六

## 第六章 肝臟疾患.....

五四六—五七二

### 第一 加答兒性黃疸.....

五四六

### 第二 急性黃色肝萎縮.....

五四九

### 第三 肝臟脂肪變性.....

五四九

### 第四 濘粉樣肝.....

五四九

### 第五 肝臟腫瘍.....

五五〇

### 第六 肝硬化症.....

五五〇

一、萎縮性肝硬化症(エントク氏肝硬化症).....

五五〇

二、肥大性肝硬化症(ハノー氏肝硬化症).....

五五一

三、鬱血性肝硬化症.....

五五二

小兒科學上卷 目次

一八

四、先天性膽道閉塞ニ因ル肝硬化症.....

五五二

膽道疾患.....

五五三

先天性膽道閉塞.....

五六四

第七 肝臓腫瘍.....

五六三

乳兒ノ原發性肝臓癌.....

五六四

小兒ノ原發性實質性肝臓癌.....

五六四

第七版正 小兒科學 上卷目次 終

第七版正 小兒科學 上卷

三輪信太郎 編著

總論

第一章 生理及ビ解剖概論

初生兒及ビ哺乳兒ハ單ニ成人ヲ縮小シタルモノト認定シ得ザルナリ、形態ニ於テモ頭蓋比較的大ニ顏面ハ之ニ反シテ小サク四肢割合ニ短クシテ胸廓突出シ、生殖器ノ發達不完全ナル等ノ特徴ヲ有シ、又解剖及ビ組織的構造ニ於テモ多數ノ臓器並ニ臓器系統ニ就テ著シキ差別アルニ微シテ明ラカナリトス、故ニ哺乳兒或ハ初生兒ヲ觀察シ、治療スルニ當リテ、大人ノ縮小體ナリテフ見解ヲ懷クハ甚ダ不穩當トス、吾人ニシテ此ノ如キ見解ニ誘惑セラルレバ、大ナル錯誤ニ陥ルコトアルヲ覺悟セザルベカラズ。

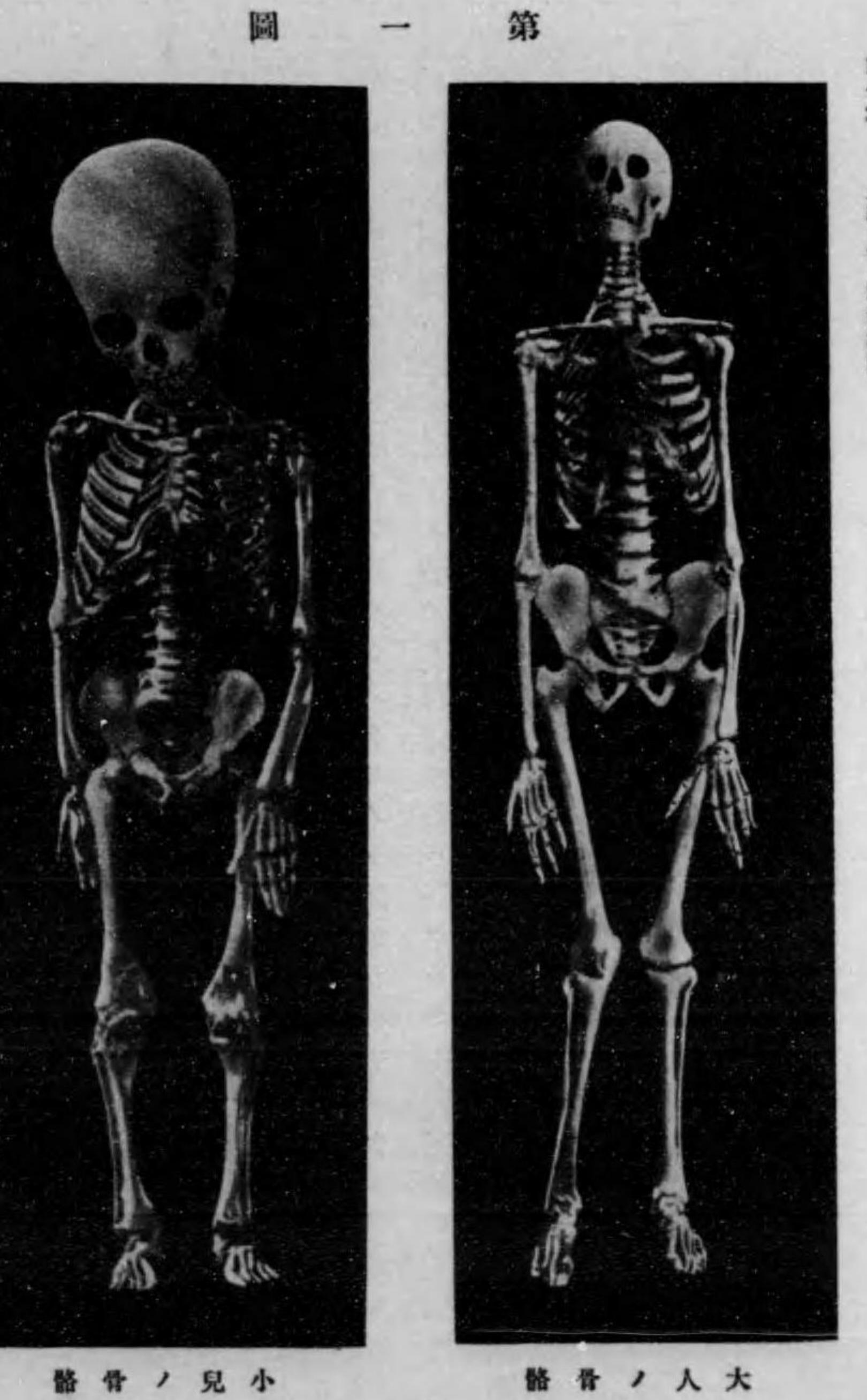
實際上ノ見地ヨリ小兒期ヲ區分スルコト左ノ如シ。

(一) 初生兒期(生後一二週間) Alter der Neugeborenen

第一章

生理及ビ解剖概論

一



圖

第一



(二) 哺乳兒期(生後一年以内) Säuglingsalter

(三) 幼年期(六、七年以内) Junges Kindesalter

(四) 兒童期(十四年まで) Knabenalter

## (一) 化學的構成 Chemische Zusammensetzung

小兒ノ身體ハ成人ヨリモ甚ダ水分ニ富ム、其程度ハ胎兒及ビ初生兒ニ於テ最モ著シク、春機發動期ニ至ルニ從ツテ漸々減少ス、乾燥成分ハ初生兒ニ於テ約二、五%ニシテ、成人ニハ約三、三%ナリ、哺乳兒ノ皮膚及ビ皮下組織ノ膨張 Turgor ハ主トシテ此水分含量ノ多キニ由來ス。

其他ノ特徴ハ胎兒ニ於テ其肝臓ニ鐵分ハ含有量夥シク、殊ニ胎生期ノ末ニ當リテ然ルガ如シ、是レ初生兒トナルニ當リテ比較的鐵分ニ乏シキ人乳或ハ獸乳ヲ攝取シ、而カモ血液成生ニ要スル材料ニ缺如スルコトナキ自然準備ニ外ナラズ。

## (二) 脈搏 Puls

小兒ノ脈數ハ大人ヨリモ多ク、且不定ニシテ、哺乳、叫喚及ビ精神感動ト雖モ直チニ其ノ數ニ影響ヲ及ボス正確ナル脈數ハ唯睡眠時ニ於テノミ測定シ能フ、脈數百二十、百五十、有熱ノ小兒ニ就テハ二百ニ達スルコトスラ稀有ナラズ、一分時ノ數ハ概シテ次ノ如シ。

初生兒

一三六

一一七—一二四

一一〇—一一一〇

九〇

三

血壓ハ大人ヨリモ低ク、動脈ニ於ケル心臓收縮期ノ血壓ハ、一年ノ小兒ニテハ水銀柱八〇一九〇密迷、春機發動期以後ニテハ一一〇一一二〇密迷ヲ算ス、之レ哺乳兒ニ於テハ左心房壁ノ厚サ大人ノ如ク右心室ニ比シテ厚カラズ、而シテ其靜動脈口及ビ動脈横徑ハ比較的廣キニ因ル。

## (三) 血液 Blut

血液循環ハ速サ フィルオルト Vierordt 氏ニ據レバ、初生兒ニ於テ十二秒三年ノ兒ニ於テ十五秒十四年ノ兒ニ於テ十八秒、大人ニ於テ二十二秒ヲ要ス。

血液ハ色 初生兒ニ於テハ暗紅色ヲ帶ブ。

血液ハ量 速ニ截臍シタル小兒ニテハ體量ノ $\frac{1}{14}$ — $\frac{1}{19}$ ニシテ、遲ク截臍シタル者ニテハ $\frac{1}{10}$ — $\frac{1}{11}$ ナリ(大人ハ $\frac{1}{12}$ )。

血液ハ比重 初生兒ニ於テハ一〇六〇—一〇八〇、一年ヲ經過スレバ一〇五〇ニ降リ、二年乃至十年ハ平均一〇五〇ヲ保ツ。

血液色素含量 初生兒ニ於テハ豐富ナリ(大人ニ比シテ一二〇—一四〇%)。

赤血球ノ量モ生後二十四時間以内ハ著シク增加シ、一立方密迷中ニ五百八十萬—七百五十萬ニ達シ、約二週日ヲ經レバ、減ジテ大人ノ數ニ等シク、哺乳ノ期間ハ反ツテ大人ヨリモ少ナシ、而シテ血色素ノ含有量大ナルコト及ビ赤血球數ノ多キコトハ、遲ク截臍セル兒ニ就テ速ニ截臍セル兒ヨリ一層高度ナリトス、生下若干日ハ生理的トシテ尙ホ有核赤血球 Kernhaltige rote Blutzellen ノ出現ヲ認ムルコトアリ。

白血球ハ常ニ多ク、初ハ一立方密迷中ニ三六〇〇〇、一二ヶ月ノ後ニハ一二〇〇〇—一三〇〇〇ヲ示ス、此ノ如ク白血球數ハ七年ノ頃マデ持続シ十五年頃ニ大人ノ平均數ヲ得ルニ至ル、而シテ生下幾何週間ハ尙ホ骨髓細胞 Myelozysten ヲ見ルコトアリ、淋巴細胞 Lymphozyten ハ最モ哺乳兒期ニ多シ。

## (四) 呼吸器系統 Respirationsapparat

鼻竇、鼻咽腔及ビ喉頭ハ比較的狹隘ナルヲ以テ、粘膜ニ僅微ノ腫脹アルモ、忽チ呼吸障礙ヲ來ス。

副鼻腔ハ初生兒ニ於テ僅ニ發達ス、後年ニ至ラザレバ完全ナル發育ヲ遂ゲ難シ。

歐氏管ハ稍水平ニ位シテ短ク、又比較的廣闊ナルヲ以テ、哺乳兒及ビ幼少ナル小兒ハ中耳炎ニ侵サレ易シ。

初生兒ノ胸廓ハ彎曲ノ度強ク、又縱徑ニ於テ短ク、而シテ肋骨ハ脊柱ト殆ンド直角ヲナシ、恰モ最大ノ吸氣狀態ニアルガ如シ、故ニ幼兒ノ呼吸式ハ腹式(橫隔膜式ナリ、然レド年齡長ズルニ從ツテ胸腹式トナル(第三年乃至第七年)。

心臟疾患ヲ有スル小兒ニ就テハ、胸廓ノ左側前面ニ於テ隆起部ヲ見ルコトアリ。

呼吸數ハ年齡ニ依リテ甚ダ不同ナレドモ、大略次ノ如シ。

一年以下

二年

五年

七年以後

三一〇—一六〇(一分時)

二五—三〇

二〇—一二五

二〇 以下。

健全ナル小兒ニ就テモ、呼吸不正ニシテ往々上腹部ノ陷没スルコトアレド、必ズシモ病的ナラズ。

初生兒ノ呼吸音ハ甚ダ微弱ナレドモ、約六ヶ月ノ頃ヨリ數年間ハ呼吸音頗ル高調、所謂小兒呼吸音 Pueriles Atmen ヲ呈ス。

## (五) 皮膚 Haut

初生兒ニアリテハ滑澤ニシテ彈力ニ富ミ、良ク潤湿シ、手掌及ビ足蹠ヲ除キテ悉ク毳毛 Lanugo ヲ以テ被ハル、哺乳兒ノ皮膚ハ薔薇紅色ヲ帶ビ、柔軟ニシテ上皮細胞層薄ク、乳嘴體甚ダ血管ニ富ム、皮、脂腺、ハ己ニ生下若干週ニ於テ發達シ、汗腺ハ其頃未ダ發育ヲ遂ゲザルガ如シ。

哺乳兒ハ概ネ生下第二日或ハ第四日ノ頃ヨリ初生兒黃疸ヲ發シ、約一週ヲ經テ消失スルモ、偶ニ三週頃マデ持続スルコトアリ。

乳腺ハ初生兒ニアリテ男女トモニ約一仙迷ノ直徑ヲ有スルニ過ギズ、然レドモ生下第三日或ハ第四日ニ至リテ其ノ容積稍膨大シ、初乳球及ビ乳球ヲ有スル所謂初乳 Hexen-

milch ヲ分泌スルコトアリ、此乳汁ハ次週ニ至レバ分泌ヲ止ムルモノナリ。兒、班、ハ小兒ノ皮膚、殊ニ脣部、腰部、背部、肩胛部ニ存在シ、大小不同ナル不正形ノ青色斑ナリ、組織學的ニハ真皮層中ニ在ル紡錘形ノ色素細胞ニ原ク、年齢ノ增加ニ伴フテ漸次消滅ス。

ベルツ氏ハ之ヲ以テ蒙古人種ノ小兒ニ於ケル特徵トナセシモ、足立氏ニ據レバ歐洲小兒ニモ稀ニ之ヲ見ルコトアリト云フ。

## (六) 體溫 Körpertemperatur

初生兒及ビ幼少ナル哺乳兒ニアリテハ其動搖著シク、大人ヨリモ外界ノ影響ヲ受クルコト大ナリ、殊ニ早產兒及ビ假死狀態ニ於テ生レタル小兒ニ就テ然リ、吾人ハ之ヲ多形熱型 Poikilothermie ト稱ス、此多形熱型ハ成熟シテ生レタル小兒ニモ發現スルコトアリ、其理由トシテ、一ハ皮膚ノ上皮細胞層薄ク又血管ニ豐富ナルト、一ハ初生兒ノ身體ハ體重ニ比シテ其表面ノ大ナルトニ因ス、即チ一基瓦體重ニ對シテ體表面積、初生兒ニ於テハ八一〇平方仙迷、六ヶ月ノ小兒ハ六二〇平方仙迷、滿一ヶ年ノ者ハ五三〇平方仙迷四年ノ者ハ五〇〇平方仙迷、大人ニ於テハ僅ニ三〇〇平方仙迷ナリ、健全ナル哺乳兒ハ體溫ノ動搖少ナク、所謂單調熱型 Monothermie ヲ示ス。

## (七) 消化器系統 Digestionsapparat

口腔 哺乳時期ニ於テハ大ニ成人ト差異アリ、初一二年ノ間ハ食物ヲ攝取スル機能ハ、

哺乳及ビ嚥下作用ニ依リテ營マレ(其中樞ハ延髓ニ在リト云フ)二年ノ終末ニ至ル頃ヨリシテ咀嚼運動ヲ營ム、乳汁ハ吸收、ハ甚ダ複雜ニシテ、單ニ口腔内ノ陰壓ニ因ルノミニ非ズ、小兒ガ顎骨ヲ閉合シテ乳房括約筋ニ反射的ニ及ボス弛緩ト、母氏ノ精神作用ニヨリ自動的ニ乳腺分泌ヲ促進スル力ト之ニ與ルナラム。

初生兒ノ未ダ乳汁ヲ攝取セシコトナキ者ハ、其ノ口腔内ノ反應ハ全然中性ナレドモ、乳汁ヲ攝取スルニ至レバ、乳汁殘渣ノ分解等ニ因リテ必ズ酸性反應ヲ呈ス。哺乳兒ノ口腔内容積ハ甚ダ狹小ニシテ、乳汁ハ暫時ニ之ヲ通過ス、且唾液ハ分泌モ亦僅少ナルガ故ニ、口腔内消化作用ハ甚ダ價值少シトブラー。Tobler 氏ノ觀察ニ據レバ、四年ノ男兒ニアリテハ、一〇〇瓦ノ乳汁ニ三乃至五立方仙迷ノ唾液ヲ混ズル割合ナレドモ、幼少ノ哺乳兒ニアリテハ、口腔内ハ比較的乾燥シ、唾液分泌モ恐らく僅少ナラムト云フ、四ヶ月乃至六ヶ月以後ニ至リテハ、唾液分泌モ亦稍多量トナリ、自ラ嚥下スルコトヲ知ルニ至ル、而シテ屢々生理的ニ垂涎ス(„Physologisches Geifern“)。

含水炭素ヲ溶解スル酸酵素、即チ「ブチアリン」 Ptyalin ノ初生兒唾液中ニ於ケル少量存在ハ確實ナレドモ、乳汁中ニハ其影響ヲ受クベキ物質少ナク、粘滑汁穀粒煎汁又ハ穀粉ヲ與フルヤ、初メテ其作用ヲ現ハシ得ルナリ。

胃 幼少ナル哺乳兒ニアリテハ、胃底ノ發達充分ナラズ、胃ハ膨大セル腸ノ爲メニ上方ニ壓セラレ、小弯ハ稍水平ニ位置シテ、其四部ヲ脊柱ノ方位ニ向ハシメ、大弯ハ其凸面ヲ

前腹壁ニ向ハシム、然レドモ小兒ノ直立及ビ步行可能ナル頃ニ至レバ、寧ロ垂直ノ位置ヲ取ルニ至ル。

胃ノ容積ニ關シテハ、精確ナル事實ヲ知ルヲ得ザレドモ、バウンドレル氏ニ據レバ、大略次ノ如シ。

初生兒	五〇立方仙迷
一ヶ月	九〇
二ヶ月	一〇〇
三个月	一一〇
四ヶ月	一二五
五ヶ月	一四〇
六个月	一六〇
七ヶ月	一八〇立方仙迷
八ヶ月	二〇〇
九ヶ月	二二五
十月	二五〇
十一ヶ月	二七五
十二ヶ月	二九〇

前記ノ數字ハ略ボ一回ノ哺乳量ヲ定ムルニ標準ヲ與フルナリ。

鹽酸、及ビ消化酸酵素(Lab und Pepsin)ハ已ニ初生兒ニ於テモ存在シ、乳汁ノ胃中ニ入ルヤ、其乾酪素ハ先づラブ凝固ヲ起ス、此際牛乳ハ速ナレドモ、其ノ凝絮粗大ニ、人乳ハ徐々ニシテ、其ノ凝絮ハ牛乳ノモノヨリモ細小ナリ、カゼインノ凝固スルヤ、其ノ剩餘タル乳漿 Molke (鹽類、含水炭素及ビ可溶性乳汁蛋白質ヲ含ム)ハ「エブシン」、鹽酸ノ爲ニ速ニ消化セラン、更ニ「エレブシン」 Erepsein 及ビ「トリブシン」 Trypsin = 賴リ分解ヲ受ケムガ爲ニ、漸次

第一章 生理及ビ解剖概論

一〇

ニ腸内ニ輸送セラル、是ニ於テ乾酪凝塊 Kaseingerinnsel ハ其表面ヨリ漸次ニ消化セラレムトス、此凝塊ノ溶解ヲ終ラザルニ先チテ、更ニ新鮮ナル乳汁ガ胃中ニ輸送セラル、トキハ、胃壁ト凝塊トノ間ニ介積シ、酵酇素ガ乾酪凝塊ニ及ボス作用ヲ阻害スルコト大ナリトス。

胃内容物ハ總酸度ハ一〇〇立方仙迷内容ニ對シテ二〇乃至六〇立方仙迷 $\frac{n}{10}$ 酸ナリ、而シテ之ニハ遊離鹽酸、有機酸、酸性鹽類殊ニ磷酸鹽ノ存在モ亦與リテ力アリ、有機酸ハリバーゼ Lipase ノ如キ酸酇素及ビ微菌作用ノ爲ニ乳汁中ノ脂肪分解セラル、ニ由ルモノナリ、又乳汁ニ穀粉汁及ビ粘滑汁ノ加入セラル、トキハ、胃中ニ輸送セラル、唾液ノ爲ニ分解シ、又微菌ノ酸酇素ノ爲メ下級脂肪酸ヲ含有スルコトアリ。

胃消化ノ持續時間ハ食餌ノ性質ニヨリテ異ナレドモ、人乳ニアリテハ二時間後、牛乳ニアリテハ三時間後ニ胃ハ空虚トナリ得ルモノナリ、胃排出ノ速度ハ幽門之ヲ調節ストラーリ氏ニ據レバ、脂肪ニ富ム食餌ハ胃ヨリ排出セラル、コト遲シト云フ。

腸内ニ於ケル消化作用 大人ニ於ケルト殆ンド差違ナク、附屬腺ナル脾臓及ビ肝臓ヨリ分泌セラル、酸酇素「ホルモン」Hormon トシテ作用スル前分泌素 Prosekretin 及ビ分泌素 Sekretin ノ如キモ、初生兒ニ於テ已ニ存在シ、ラングスタン氏ハ五ヶ月ノ胎兒ニ於テ已ニ之ヲ認メタリト云フ、而シテ食餌ノ腸内ヲ通過スル時間ハ十二時間乃至三十六時間ナリ、殊ニ吾人ノ注意スペキ點ハ、乳汁中ニ含マル、含水炭素ノ主成分ナル乳糖ノ運

表一 第  
本標色染沫塗

I.



便胎

II.



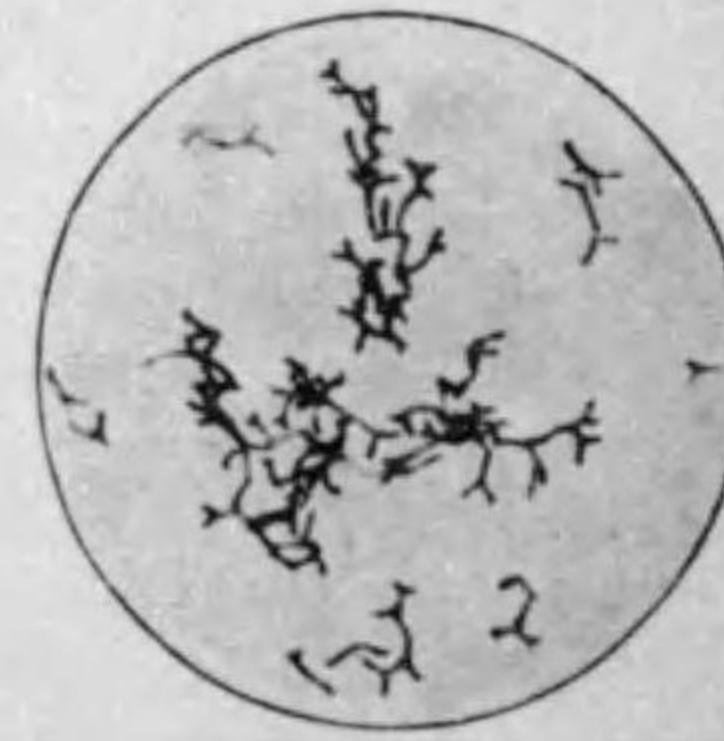
便乳人

III.



便乳牛

IV.



普通重尾菌

(Nach Pfaundler)

命ニアリトス、乳糖ハ同化作用ヲ超過セザル範囲ニ於テ供給セラル、トキハ「ラクターゼ」Laktase ナル醣酵素ニヨリテ、グルコーズ、Glukose ト「ガラクトーゼ」Galaktose トニ分解ス、若シ腸内ニ病變アリテ此作用行ハレズ、且未分解ノ物質ガ微菌ノ作用ニヨリテ醣酵セザルトキハ、乳糖ハ其儘吸收セラレテ尿中ニ排出ス、彼食餌性中毒症ノ際ニ起ル乳糖尿 Lactosurie ノ如キモ此理ニ外ナラズ。

糞便 食餌ノ不消化殘剩、腸及ビ其附屬腺ノ分泌物、細菌ノ多數ヨリ成リ、其硬度、色、臭氣、容積、モ毎ニ一定セルモノニ非ズシテ、専ラ食餌ノ分量又種類、分泌作用ノ程度及ビ腸蠕動運動ノ遲速ニ因リテ變化ス。

初生兒ノ最初ノ糞便ハ胎便、Meconium s. Kindspach ト稱シ、弱酸性、帶綠黑色、粘稠ニシテ一見ベンキノ如ク、其成分ハ胎兒ノ腸及ビ其附屬腺ノ上皮細胞又分泌物、其他嚥下シタル羊水、毳毛、上皮細胞ヨリ成リ、其全量ハ凡ソ七〇乃至九〇瓦ニシテ、概ネ生下第二日及ビ第五日ノ間ニ排出シ終ルモノトス、哺乳兒ノ大便ハ其ノ栄養物ニ依リテ太甚シキ相違アリ。

天然栄養兒ノ大便ハ黃金色或ハ卵黃色、俗ニ所謂山吹色ヲ呈シテ軟膏様硬度ヲ有シ、酸性反應ヲ呈シ、芳香臭アリ、外見同質ニシテ其ノ排泄度モ一日一回乃至二回ナリトス、然レドモ此ノ如キ理想的大便ヲ排出スル小兒ハ多カラズ、普通ハ外見同質ナラズ nicht homogen、破碎セラレ、或ハ散亂セルガ如キ gehackt od. zerfahren 狀ヲ呈シ、綠色ノ粘液ヲ混

ズルコト多シ、又排出時ハ全然黃色ナルモ、時ヲ經レバ綠色ニ化スルコトアリ、之レ必ズシモ病的ニ非ズシテ、空氣ニ依リテ「ビリルビン」ガ「ビリグルヂン」ニ酸化セラル、カ、或ハ酸化ヲ營ム酸酵素ノ作用ニ基クモノナラムカ、然シ其中ニ顆粒(石灰及ビ「マグネシウム」石鹼)ヲ混ズルコトアラバ、之レ則チ消化作用ノ不完全ニ因ル證ナリ、又初ヨリ綠色便ヲ出スニ拘ハラズ發育極メテ完全ナル者アリ。

人工榮養兒ノ大便ハ、天然榮養兒ノモノヨリモ其硬度固クシテ淡黃色ナリ、其反應ハ「ラクムス紙ニテアルカリ性ヲ呈ス、若シ人工榮養兒ノ大便中ニ非定型的分子アラバ、其意義タルヤ、天然榮養兒ニ於ケルヨリモ重大ニシテ、即チ病變ハ存在ヲ證スルモノナリ、哺乳兒ニシテ漸々混合的食物及ビ乳汁ニ乏シキ食餌ニ移ルトキハ、其大便ハ成人ノモノ、如キ性質ヲ帶ブルニ至ル。

**腸内細菌集團** Darmflora 細菌ハ胎兒ノ腸内ニ全然存在セザルモ、胎兒ノ外界ニ出デテ食餌ヲ攝取シ始マルヤ、諸種ノ細菌ハ腸内ニ定住スルニ至ル、斯ノ如キ細菌ハ吾人ノ生活上ニ缺クベカラザル重要ノモノニシテ、已ニ Schottelius, Metchnikoff, Moro 氏等ノ實驗セルガ如ク、動物ノ初生兒ニ純然無菌ノ食餌ヲ與フルトキハ、其ノ生命ヲ保ツコト能ハザルナリ。

細菌中通常多ク見ルモノハ

普通大腸菌 Bac. coli comm. (Escherich)

乳酸菌	Bact. lactis aerogenes (Escherich)
普通重尾菌	Bac. bifidus commun. (Tissier)
抗酸菌	Bac. acidophilus
腸球菌	Enterokokken
等ニシテ次ニ多キハ	
連鎖狀球菌	Streptokokken
不動性牛酪酸菌	Bac. butyricus immobili s. Bac. perfringens
動性牛酪酸菌	Bac. butyric. obilis
大腸腐敗桿菌	Bac. putrific. coli (Blenstock)

等ナリ、此等細菌ハ酸酵及ビ腐敗作用ヲ起シテ互ニ拮抗シ、以テ吾人ノ消化ヲ扶ケ、生活維持ニ貢獻スルコト偉大ナリ、細菌ノ種類モ亦食餌ノ種類ニヨリ差違アリテ、天然榮養兒ニテハ、普通重尾菌ハ大腸菌及ビ乳酸菌ヨリモ多ク、人工榮養兒ニテハ大腸菌及ビ腸球菌多シ。

#### (八) 泌尿器系統 Uropoetisches Apparat

腎臟 初生兒及ビ哺乳兒ニ於テハ、比較的大ニシテ分葉像ヲ呈ス(胎生腎)。

女性哺乳兒ノ陰部 大陰唇及ビ小陰唇ノ發達弱キガ爲ニ哆開シ、而シテ生理的陰部、以、出、ヲ形成ス、隨ヒテ糞便ハ尿道ニ浸入シ易シ、是レ膀胱炎ノ殊ニ女性哺乳兒ニ多キ所、以、突

ナリトス。

尿量 個人ニヨリテ異ナルモ、生下第一日ヨリ兩三日間ハ大抵一日量二〇乃至五〇立方仙迷ナリ、第四日ヨリ第八日ニ至レバ急ニ二〇〇立方仙迷ニ増加ス、栄養正當ニ行ハル、哺乳兒ノ尿量ハ供給セラレタル水分ノ量ニ比例シ、小兒ニ於テモ大人ニ於ケルガ如ク水分ノ六〇乃至七〇%ハ尿中ニ排泄セラル、然シ栄養法ニ依リテ多少ノ相違アリ、概シテ牛乳栄養兒ハ人乳栄養兒ヨリ尿量稍多キガ如シ。

ザイツ氏ニ據レバ

	第二ヶ月	四〇〇立方仙迷(一日量)
第六ヶ月	五〇〇	
第二年	六〇〇	
第五年	八〇〇	
第八年	一二〇〇	
春機發動期頃	一五〇〇	

尿回數 哺乳兒ノ初期ニ於テハ殆ンド食餌回數ノ三倍ナリ、尙ホ飲料即チ茶ノ如キモノヲ與フレバ、二十四時間ニ二十乃至二十五回ニ増加ス。

尿ノ性狀 初生兒ノ尿ハ一般ニ尿酸鹽ニ富ミ、其他尿酸結晶ヲ含ミテ、擁脛ノ濕潤部周圍ニ褐色ノ粉粒トシテ沈著ス、又屢々硝子様圓柱及ビ顆粒圓柱ヲ有スルコトアリ、蛋白尿、ノナラム。

ハ、初生兒ニ於テハ生理的ハ事ニシテ、往々生後十日頃マデ出現ス、初生兒尿ノ尿酸ニ富ムハ、血中ニ白血球增多ノ存スル爲ナリ、蛋白尿ハ蓋シ尿酸栓塞 Harnsäureinfarkt ニ因ルモ、ノナラム。

エンゲルツルノウ氏尿反應 (Engel u. Turneaue, Berl. Klin. Wochenschr. 1911, Nr. 7) ハ之レ栄養ノ如何ニ拘ハラズシテ、尿中ニ存在銀液十五滴乃至二十滴ヲ約五立方仙迷ノ哺乳兒ノ尿ニ滴下セシニ、十五分間ニシテ人乳栄養兒ノ尿ニハ黒色ノ沈澱ヲ生ジ、牛乳及ビ爾他栄養兒ノ尿ニハ白色若クハ僅ニ褐色ナルヲ見タリ

エフ、ボシャン氏 (Berl. Klin. Wochenschr. 1911, Nr. 7) ハ之レ栄養ノ如何ニ拘ハラズシテ、尿中ニ存在スル鹽化物、其他ノ磷酸鹽及ビ炭酸鹽ノ如何ニ關シ、黑色沈澱ハ硝酸銀ノ還元ニ外ナラズトセリ

井上學士ハ東京醫科大學小兒科ニ於テ之ヲ試ミ、其反應ノ事實ナルヲ認メシノミナラズ、尙ホ此試驗ノ陰陽ニ依リテ牛乳ト人乳トヲ區別シ得ベシトセリ(兒科雜誌百三十一號)

#### (九) 神經系統 Nervensystem

初生兒ニ於テハ官能的發育未ダ不充分ナリ、脳、髓ノ重量ハ體重ノ四分ノ一ヲ占ム、然レドモ其外形ハ大人ト大差ナシ、但シ前頭葉ハ比較的小ニシテ、主要ナル溝ハ深キ截痕ヲ示シ、其ノ割面ハ灰白色ヲ呈シ、白質ト灰白質トノ區別鮮明ナラズ、之レ神經髓質ノ發達未熟ナルニ由ル、延髓、脊髓、小腦ハ已ニ胎生期ニ於テ髓質發達ヲ遂グルモ、大腦ニアリテ

ハ生後ニ於テ漸々發達シ。第三ヶ月頃ニ至リテ發育ヲ遂グ、故ニ其削面ハ灰白ノ色調ヲ帶ブ、脳神經ニ於テモ、視神經ノ如キハ生後ニ一部分ノミ有髓ニシテ、篩狀板ノ附邊ニ於テハ猶ホ無髓ノ箇處アリ。

感覺器ニ就テハ、視覺、聽覺ノ發達ハ不充分ニシテ、初生兒ハ初メ光明ヲ嫌ヒ、色覺ノ如キモ漸ク明暗ヲ辨ジ得ルニ過ギズ、眼球ノ運動モ調節ヲ缺キ(„Physiologisches Schielen“)、視線ハ空虚ヲ凝視スルノミ、第三ヶ月頃ニ至レバ他人ヲ識別シ得ルニ至ル、聽覺ニ關シテハ、生下第一日ハ全ク聾ナリ、之レ羊水ヨリ來リシ粘稠ナル液體ガ鼓室ヲ充タスニ因ル、其ノ他味覺、嗅覺、筋覺、觸覺ハ、初生兒ニ於テ已ニ發達スルモノナリ。

反射機能 Reflex 光、線、反射、及ビ、角膜、反射、ハ己ニ初生兒ニ於テ存ス、皮膚反射、ハ往々之ヲ缺クコトアリ、然シ年長ノ哺乳兒ニ於テハ反射機能生理的ニ亢進シ、彼バビンスキ氏現象: Babinski'sches Phänomen (足趾ヲ壓擦スルトキハ足趾殊ニ母趾ノ足背ニ屈曲シ、或ハ足趾ヲ擴張スル現象ヲ云フ) 第二年マデ存スルハ、生理的ナリ。

トキハ容易ニ見ルヲ得、然シ筋肉ノ生理的緊張亢進 Physiologische Hypertonus der Muskulatur ヨリテ蔽ハル、コトアレバ、注意スベシ。

#### (十)精神作用 Psychische Tätigkeit

初生兒ニ於テハ精神作用ノ表現ハ殆ンド認ム可ラズ、感情ノ表現トシテ第二ヶ月ニ至

いハ漸ク微笑ヲ以テ、愉快ナル氣分ヲ示ス、ニ過ギズ、第三—第四ヶ月頃ヨリシテ人物及び物體ヲ固視シ、之ヲ握ラントシテ努力シ、或ハ自己ノ指ヲ弄スル等ノ運動ヲナス、此時ニ當リテ幼兒ノ刺戟性恐怖性ニシテ不安ナル睡眠ヲナス者ハ、神經性ナルカ、若クハ榮養障礙アル者ナリ、精神發達ノ遲徐ナルカ又喪失セルモノハ、白痴或ハ痴愚 Idiot od. Imbecilität ナリトス。

初生兒及ビ哺乳兒ハ初メ言語セズ、音ヲ表示スルニ過ギザル言語運動ナキ叫喚ヲナス、而シテ幼兒ハ餓餓及ビ疼痛ヲ云ヒ現ハスナリ、三ヶ月頃ニ至レバ調語 Iallen ヲ發シテ言語器官ノ練習ヲナシ、第一年ノ終ニ至レバ言語領解力發達シ、自働的話法ヲナス、正當ニ言語シ得ルハ、第三年ノ終ナリト云フ(マース Mass 氏)。

睡眠ハ生理的特徵ニシテ、健全ナル哺乳兒ハ第一ヶ月ニ於テ二十時間ノ睡眠ヲ要シ、後ニハ十二—十五時間トナリ、二三年ニハ晝二—三時間、夜十一—十二時間、學齡兒童ハ平均九—十一時間ノ睡眠ヲ取ル、尙ホ七年ハ十一十時間半、十年ハ九時間半—十時間、十二年ハ九時間、十四年ハ八時間半ノ安眠ヲ要ス、之レ精神ヲ過勞セザル健康兒童ニ就テ曰ヘルナリ。

## 第二章 小兒發育論 Kindliches Wachstum

(一)身長 Körperlänge 初生兒ノ身長ハ男女一樣ナラズ、平均五十仙迷ニシテ、カメレル

Camerer 氏ニ據レバ、男兒ハ四十九仙迷、女兒ハ四十八仙迷ナリ、而シテ第三ヶ月マデニハ九仙迷、其レヨリ第六ヶ月マデニハ八仙迷、次デ第九ヶ月乃至第十二ヶ月ニハ各三—四仙迷增加シ、畢竟一年ノ終ニハ二十一—二十五仙迷ノ增加ヲ見ルナリ、第二年ニハ十仙迷、第三年ニハ八仙迷増シ、以下春機發動期ニ至ルマデハ年々五仙迷ヅ、增加ス、故ニ第十五年ノ終ニハ百五十仙迷以上ノ身長ニ達スベシ、身長ノ發達ハ連續的ニ非ズシテ週期的ナリトス、身長發達ヲシテ遲延セシムル動機ハ主ニ榮養不良、氣候ノ關係、佝僂病、微毒、甲狀腺疾病、先天性心臟疾患等ナリ、熱性病ハ反ツテ身長ノ發達ヲ促進スルコトアリ、左ニチ一ミッヒ M. Thiemich 氏ノ表ヲ掲グベシ (Feer, Lehrbuch der Kinderheilk.)。

ノ 終		各 年 齡		年 時		分 娩		一 年 年 年		五 四 三 二 一 年 年 年	
(仙 迷)	身 長	男	兒	(仙 迷)	ケル 增加	女	兒	(仙 迷)	身 長	(仙 迷)	ケル 增加
一〇四	九九	九三	八五	七五	五〇	一〇三	九八	九二	八四	七四	四九
五六八	一〇	二五	一〇	二五	一〇	五六八	一〇	二五	一〇	二五	一〇
一三五〇	一一五	一三〇	一一五	一一五	一一五	一三三	一二八	一二三	一一八	一一三	一〇七
五五五五六五	一一六	一一六	一一六	一一六	一一六	五五五五六五	一一七	一一七	一一七	一一七	一一二
五五五五六四	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一	五五五五六四	一一一	一一一	一一一	一一一	一一一

本邦兒童ノ身長ニ關シテハ三島博士ノ調査アリ(日本健體小兒ノ發育論)。

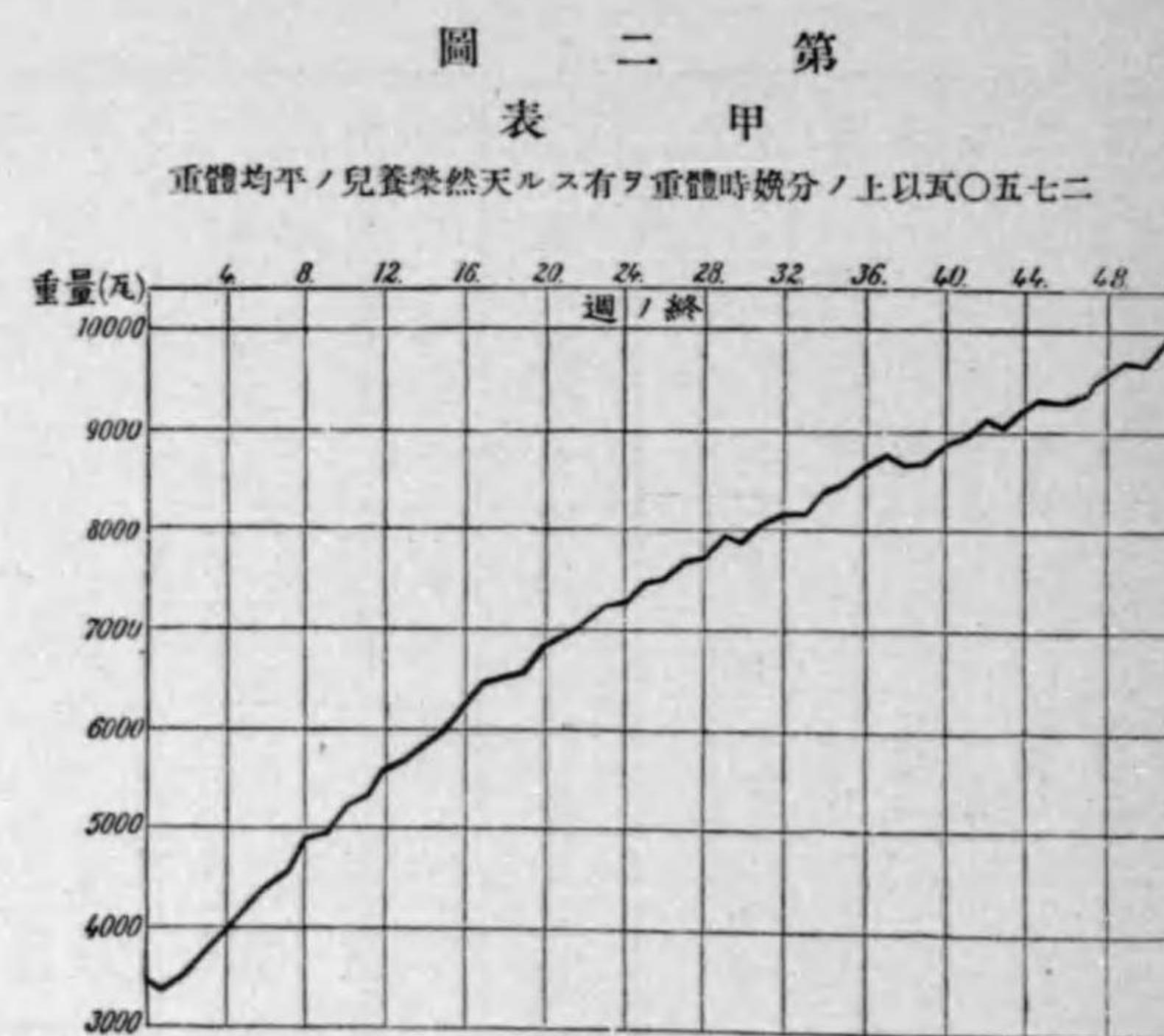
年 齡		初 生		年 年 年 年 年 年		九 八 七 六 五 四 三 二 一 年 年 年 年 年 年		人 員		男	
一五七	一五一	一四五	一四〇	一五八	一五三	一四六	一三九	一五八	一五三	一四六	一三九
七八六	九三三	九三一	九二〇	九二二	九二五	九一七	九一〇	九一八	九一〇	九一三	九一〇
一一八・三	一一三・八	一一二・八	一一一・七	一一〇・八	一一〇・三	一一一・四	一一一・五	一一一・五	一一一・五	一一一・五	一一一・五
六〇五	九〇五	七二〇	七六九	五二七	二五三	二三七	二八〇	六四	四九	四八・七	仙迷
一一六・二	一一六・〇	一一二・〇	一一一・四	一一〇・七	一一〇・二	一一一・〇	九六・五	八四・九	七八・九	七二・九	仙迷

十 年 年 年 年 年 年 年 年 年 年	八〇四 六四九 五四六 四七〇 三〇八 二七九	一一一・八 一二七・〇 一三〇・八 一三五・二 一四一・五 一四六・三 一二六	五三三 四〇一 三六七 二八〇 二四五 一四三・二 一四四・七	一二〇・四 一二五・九 一三二・三 一三九・〇 一四三・一 一四四・七
---	--	---	---	--

初生兒ノ身長ニ關シテハ榎及ビ三輪博士ノ報告アリ。

男	榎順次郎博士(東京醫學會雜誌)	三輪德寬博士(東京醫學會雜誌)
女	五〇・四仙迷	四八・八仙迷
	四七・三仙迷	四八・一仙迷

(二) 體重 Körpergewicht 初生兒ノ體重ハ男兒ニアリテハ平均三四〇〇瓦、女兒ニアリテハ三二〇〇瓦トス、概ネ長子ハ次子ヨリモ體重輕キ、常トス、此平均體重ヨリ重キ者ヲ過熟セル初生兒 Übertragene Neugeborene“ト稱シ、體格偉大ノ健全ナル多產婦之ヲ生ムコトアリ、平均體重ヨリ少ナキ者ハ、母體ニ微毒及ビ結核ヲ有スルカ、或ハ早產兒ニ非ザレバ、双胎兒ナリトス、而シテ分娩時體重ハ生下第二日、或ハ第三日内ニ却ツテ二〇〇



一三〇〇瓦ノ減少ヲ來スヲ恒トス、之レ胎便ノ排出ト、全ク食餌ヲ取ラザルニ水分排泄及ビ脂肪燃焼ノ旺盛ナルトニ因ルナリ、然レドモ此ノ生理的體重減少、Physiologische Gewichtsabnahme“ハ第八日乃至第十日ニ於テ回復シ、小兒第五ヶ月乃至第六ヶ月ニ至レバ、分娩時體重ノ二倍トナリ、一年ノ終末ニハ殆ンド三倍トナル、小兒ノ體重增加ノ速度ハ初一年間ハ最モ速ニシテ、第二年以下ハ其ノ速度緩慢ナリ、茲ニ老カメレル氏ノ二表ヲ掲グ。

乙表

二七五〇瓦以上ノ分娩時體重ヲ有スル小兒ノ平均體重 (Canneter sen, Jahrbuch f. Kinderheilk. Bd. III.)

第二章 小兒發育論

二	一	一	八	四	三	二	一	二	一	分	一	分	一
○	六	三	二							姚			
六	二	九	四	五	六	九	三	四	九	〇	八	三	四
八	二	四		五	六	九	〇	七	〇	七	〇	八	三
一	〇	九	一	五	〇	九	一	一	一	一	一	一	四
一	一	八	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	三
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

子一ミッヒ氏ノ體重發育表 (Feer, Lehrbuch der Kinderheilk.)

五	四	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
四	三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
三	二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

男	女	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
兒	兒	七	六	五	四	三	二	一	年	年	年	年	年	年
		五	六	〇	五	四	一	〇						
		六	〇	六	〇	四	五	〇						
		一	一	一	一	一	一	一						

本邦初生兒ノ體重ニ關シテハ、榎及ビ三輪博士ノ報告アリ。

年 齢	人 員		年 齢	人 員	
	體 重 (瓦)	男		體 重 (瓦)	女
初生兒	五〇	七七	一出生兒	九〇〇	八五〇
一	四一〇	一六一	二	一〇八〇	九九〇
二	一三七〇	一三七	三	一八〇	一五〇
三	一七五〇	一七五	四	一九〇	二一九〇
四	一五〇〇	一五〇	五	一九五〇	二一五〇
五	一六五〇	一六五	六	一七〇〇	一九〇〇
六	一七〇〇	一七〇	七	一八〇〇	一九〇〇
七	一七五〇	一七五	八	一九〇〇	二〇〇〇
八	一九〇〇	一九〇	九	一九五〇	二一五〇
九	一九五〇	一九五	十	一九九〇	二二九〇
十	一九九〇	一九九	十一	二〇三〇	二四七〇
十二	二一三〇	二一三	十三	二一七〇	二五四〇
十四	二二七〇	二二七	十五	二三一〇	二六七〇
十五	二三一〇	二三一	十六	二三五〇	二八七〇
十六	二三五〇	二三五	十七	二三九〇	三一五〇
十七	二四三〇	二四三	十八	二四七〇	三三五〇
十八	二四七〇	二四七	十九	二五五〇	三五五〇
十九	二五五〇	二五五	二十	二六三〇	三八三〇

年 齢	日々ノ增加		月々ノ增加	體 重
	月	瓦		
初生兒	一	瓦	一	瓦
二	月	月	二	三九三五
三	月	月	三	三九三〇
四	月	月	四	三九一〇
五	月	月	五	三九一〇
六	月	月	六	六三八五
七	月	月	七	六七八五
八	月	月	八	七二八〇
九	月	月	九	七五九〇
十	月	月	一〇	七九九〇
十一	月	月	一一	八二五
十二	月	月	一二	八五四五
十三	月	月	一三	九二七五
十四	月	月	一四	八五四五
十五	月	月	一五	八七三五
十六	月	月	一六	九二七五
十七	月	月	一七	九三五
十八	月	月	一八	九三五
十九	月	月	一九	九三五
二十	月	月	二〇	九三五

哺乳兒體重增加表

若シ小兒體重ヲ秤ラント欲セバ生下七日以前ノ者ハ毎日一定時ニ於テ行ヒ、其以後ハ一週一回同曜日ヲ定メテ施シ、七ヶ月以上ニ至レバ毎十日、或ハ十四日ニ於テスベシ。

(三)頭圍 Kopfumfang 前頭結節ト後頭結節トノ周圍ヲ測リテ之ヲ表ハス、初生兒ニ於テハ三十三—三十六仙迷、六ヶ月ニテハ四十三—四十四仙迷、一年ノ終ニハ約四十六仙迷、二乃至三年ニハ四十七—四十九仙迷ニシテ、五乃至十二年ニハ五十一—五十二仙迷トナル(大人ハ五十五—五十九仙迷)此頭圍ノ普通ヨリ大ナルハ脳水腫、佝僂病ニシテ先天性精神發育異常アル者ハ往々小ナル頭圍ヲ有ス。

(四)胸圍 Brustumfang 前ハ乳房ノ高サ後ハ肩胛骨角ノ上ニ於テ計リ、初生兒ニアリテハ三十二—三十四仙迷ヲ算シ、頭圍ヨリ小ナルカ、或ハ均シキヲ恒トス、一年ニハ平均一一仙迷、二乃至七年ニハ一一—二仙迷、七乃至十二年ニハ一一—五仙迷、春機發動期頃ニハ三—五仙迷、年毎ニ増加ス、胸圍ハ嬰兒ニアリテハ左右同形ナレドモ三年以降ニアリテハ右側胸圍ハ左方ヨリモ發達スルヲ恒トシ、七乃至十二年ノ男兒ニアリテハ一—五仙迷ノ差ヲ有ス、左ニ頭圍及ビ胸圍ノ平均數ヲ掲グ。

ザイツ氏ノ表 (Seitz, Kinderheilk. 3. Aufl.)

年 齢	初 生 兒	年 齡	頭 圍 (仙 迷)	年 齡	胸 圍 (仙 迷)
三	二	一	四九	四八	三四
四	三	二	四九	四七	三二
五	四	三	四九	四五	三一
六	五	四	四九	四六	三〇

十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	十	九	八	七	六	五
四	五	五	五	五	四	四	三	二	一	四	五	四	三	二	一
十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	四	五	四	三	二	一
四	三	二	一	一	一	一	一	一	一	三	二	一	一	一	一
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	三	二	一	一	一	一
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	二	一	一	一	一	一

本邦ノ初生兒頭圍ニ關シテハ榊及ビ三輪氏ノ報告アリ。

頭 圍	男 兒	女 兒	榊 氏	三 輪 氏	德 寬 氏
			三二・六仙迷		
				三三・一仙迷	
					三三・四仙迷

三島氏ノ調查(日本健體小兒ノ發育論)

## 小兒頭圍及ビ胸圍發育表

六	五	四	三	二	一	初 生 兒	年 齡	頭 圍
歲	歲	歲	歲	歲	歲	月	月	月
五	四	三	二	一	一	三	四	五
五	五	五	五	五	五	八	七	六
九	九	九	九	九	九	七	八	七
九	九	九	九	九	九	七	八	七
九	九	九	九	九	九	六	七	六
九	九	九	九	九	九	五	六	五
九	九	九	九	九	九	四	五	四
九	九	九	九	九	九	三	四	三
九	九	九	九	九	九	二	三	二
九	九	九	九	九	九	一	二	一

## 分娩ヨリ一個月ニ至ル小兒發育表

一	三	二	一	初 生 兒	年 齡	
月 女	週 男	週 女	週 男	初 生 兒	年 齡	
三八〇〇	三五〇〇	三二〇〇	三〇〇〇	三〇〇〇	三〇〇〇	
五五・五	五三・五	五四・二	五四・二	五四・二	五四・二	
三六・九	三五・五	三六・〇	三五・〇	三五・〇	三五・〇	
三六・〇	三五・〇	三九・二	三九・二	三九・二	三九・二	
三六・三	三五・三	三五・三	三五・三	三五・三	三五・三	
三六・六	三五・六	三五・六	三五・六	三五・六	三五・六	
三六・九	三五・九	三六・〇	三六・〇	三六・〇	三六・〇	
三六・九	三五・九	三六・〇	三六・〇	三六・〇	三六・〇	
三六・九	三五・九	三六・〇	三六・〇	三六・〇	三六・〇	
三六・九	三五・九	三六・〇	三六・〇	三六・〇	三六・〇	
三六・九	三五・九	三六・〇	三六・〇	三六・〇	三六・〇	

(五) 大顎門 Grosse Fontanelle 兩顎頂骨ト前頭骨トノ三骨ヨリ界セラレ、皮膜ヲ以テ被  
ハル、菱形體ノ間隙ニシテ、分娩後十ヶ月ニ至ルマデ漸々擴大シ、以後ハ狹小トナリ、十  
二ヶ月乃至十六ヶ月ニ至リテ閉鎖スレドモ、佝僂病及ビ脳水腫ニテハ開展スルヲ恒ト

ス初生兒ニ於テハ縦徑一五—二五仙迷、横徑一一二仙迷ナリ。

(六) 生齒 Dentition 之ヲ分チテ前後二回トス、第一生齒期トハ乳齒 Milchzahn 發生ノ時期テ云ヒ、上下二十枚ノ發生アリ、今ソノ順序ヲ掲グレバ

六年乃至九年	十二ヶ月乃至十五ヶ月	十八ヶ月乃至二十四ヶ月	三十ヶ月乃至三十六ヶ月	五年乃至六年
下頸内門齒——上頸内門齒——上頸外門齒 下頸外門齒(何レモ二箇)	第一小白齒	犬齒	第二小白齒	第一大臼齒
		四 簡	四 簡	四 簡(永久齒)

六年乃至七年ニハ第二生齒期(永久齒發生ノ時期)アリテ、乳齒ハ其發生ノ順序ニ從ヒテ交換シ、十乃至十四年頃ニ初メテ不換ノ第二大臼齒ヲ生ズ、春機發動期後十六乃至四十年ニ至レバ、終ニ第五臼齒ニ相當スル所謂智齒 Weisheitszähne ヲ生ズ。

生齒ノ發達程度ハ各人ニ就テ相違アリ、殊ニ發達ノ遲延スルハ精神發育障礙、栄養障礙、佝僂病及ビ黴毒ナリトス、之ニ反シ早期ノ生齒ハ初生兒ニ於テ已ニ門齒ノ發生ヲ見ルコトアリ、往昔醫士ハ哺乳兒疾病ヲ大ニ生齒ニ關係アルモノトナセリ、現今ニ於テモ猶ホ生齒困難テフ說 Lehre von der „Dentitio difficultis“ ヲ信奉シ、生齒熱 Zahnfieber ノ存在ヲ唱フル者アリ、頗ル怪訝ニ堪エザルナリ、然レドモ生齒時期ニ當リテ神經性及ビ佝僂病性ノ小兒ニハ嘔吐、下痢、輕度ノ搣搦等ヲ伴フコトアリ。

余ハ所謂生齒熱ヲ首肯シ得ベキ唯二個ノ實驗ヲ有スルノミ、生齒期ノ下痢ニ就キテハ其經驗ニ乏シカラザルナリ。

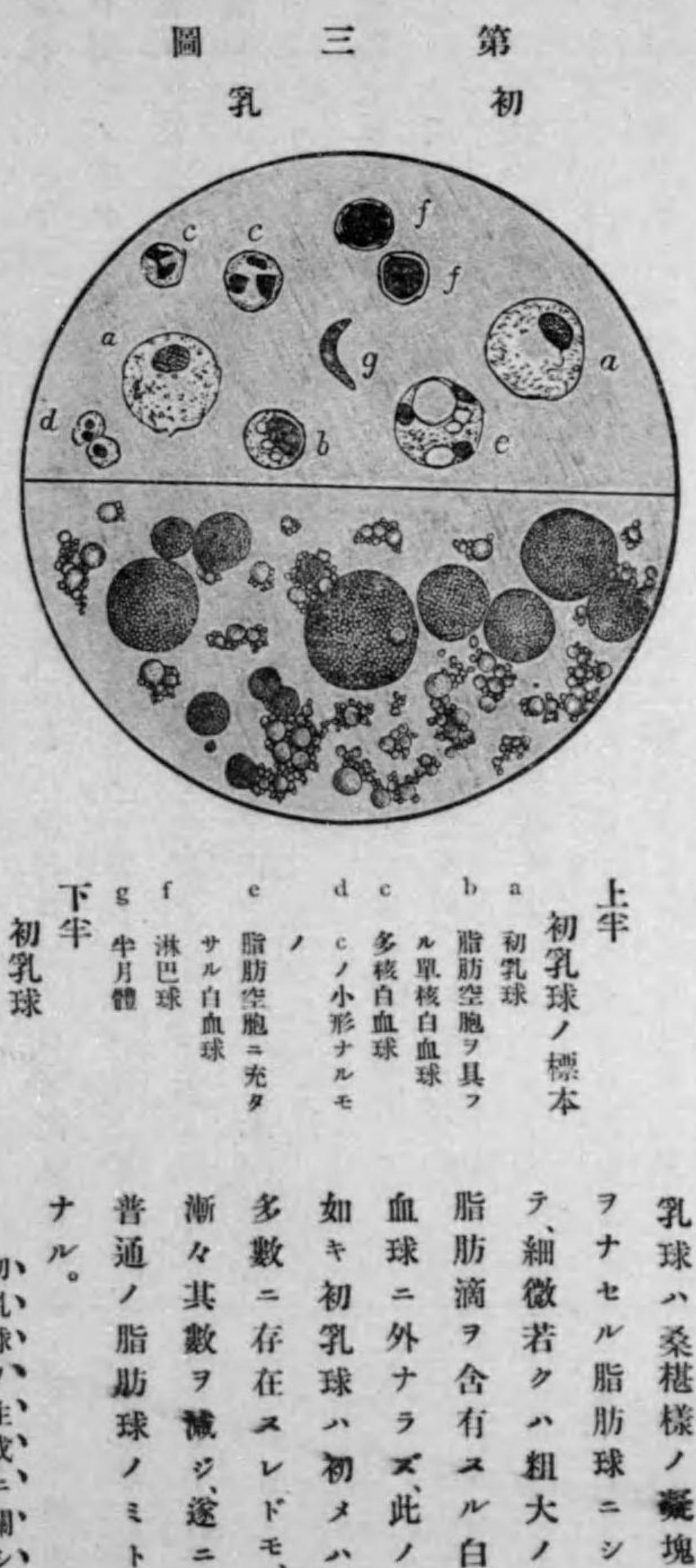
### 第三章 乳汁ニ就テ Die Milch

乳汁ニ就テノ知識ハ、小兒栄養法ヲ熟知スルニ缺クベカラザル要件ナルヲ以テ、其大略ヲ記述セムト欲ス、母乳ノ代用トシテ現今最モ賞用スルモノハ牛乳ナリ、稀ニ山羊乳ヲ用ヒ、或ハ驢馬乳ヲ用フルコトアリ、牛乳ハ用ニ臨ミ一時ニ多量ヲ得ラル、ト、其成分ニ變化少キトヲ以テ好ンデ使用セラレ、山羊ハ旅行ニ當リ自家用乳汁ヲ採ル爲メニ携帶シ得ルノ便アリ、尙ホ利益トシテ稱ヘラル、ハ結核ニ罹ルコト少キニアリ、其乳汁ハ牛乳ヨリ滋養價ニ富ムト稱セラル、モ、必ズシモ然ラザルガ如シ、驢馬乳ハ其成分人乳ニ酷似スルモ、脂肪含量ノ少キト腐敗シ易キトヲ以テ使用ヲ普及シ得ズ。

#### (一) 初乳 Das Kolostrum. Erslingsmilch

初乳ハ分娩直後ニ分泌セラル。黃色ノ乳汁ニシテ粘稠性ニ富ミアルカリ反應ヲ呈シ、比重一〇四〇—一〇六〇「カゼイン」Kasein ヲ含有スルコト極メテ少ク、加熱ニ由リ暫時ニシテ凝固ス、之レ初乳中ニハ「アルブミン」Albumin 及ビ「グロブリン」Globulin ヲ含有スルコト豊富ナルヲ以テナリ。

顯微鏡的検査ヲ施ストキハ、多數ノ初乳球 Kolostrumkörperchen ヲ見ルヲ以テ特徵トス、初



テ古來幾多ノ説アリ或ハ乳腺ノ上皮細胞ノ脂肪變性ニ陥リタルモノナリトシ、誠ハ白血球ナリトセリ、ツエルニー Czerny 氏等ノ研究ニヨリ白血球タルコト明白トナレリ、故ニ初乳球ノ一滴ヲ蓋板硝子ニ塗リエーテルアルコホールヲ以テ脱脂シ、更ニ「メチーレン」青及ビ「ギムザ」液ヲ以テ染色スレバ、圖ノ如キ美麗ナル白血球ノ形態ヲ現ハシ得ベシ、ツエルニー氏ハ初乳球トハ白血球ガ乳汁僻滯ニ際シ、未ダ吸收セラレザル脂肪ヲ淋巴道ヨリ運ビ去ラムトテ脂肪球ヲ含有スルモノナリトシ、其證トシテハ臨牀上ニ乳汁僻滯セル乳腺ヨリ初乳ノ性質ヲ帶ビタル乳汁ヲ分泌スルコトヲ舉ゲタリ。

初乳球ノ成分ハ脂肪量不定ニシテ、蛋白含有量多く、殊ニ「グロブリン」及ビ「アルブミン」ニ富ム、鹽類モ或ル種類ハ永久乳ヨリ多シ。

カメレル及ビセルドネル (Gamerer u. Söldner) 氏ノ表

乾燥成 分	% 脂 素		% 空 脂 素		% 糖		% 蛋 白		% 脂	
	カゼイン	アルブミン	・灰	・糖	・脂	・水	・脂	・蛋白	・脂	・水
分娩後二六一五一時間	○・九二八%	○・五〇八%	四・〇九%	三・九二%	○・七二%	○・九二八%	○・五〇八%	○・七二%	○・九二八%	○・五〇八%
	○・四八%	○・四一%	五・四八%	六・八一%	三・三一%	一六・〇四%	一四・一二%	一・九%	一・七九%	一・七九%
	一六・〇四%									

## (二) 永久乳 Dauermilch

人乳及ビ獸乳ノ已ニ初乳ノ性質ヲ失ヒタルモノヲ永久乳ト稱ス。

新鮮ナル乳汁ハ「ラクムス」ニ對シテ中性、或ハ「アルカリ性ナレドモ、時間ヲ經ルニ從ヒテ

乳酸菌 Milchsäurebazillen ノ爲ニ乳酸醣酵ヲ起シテ酸性トナル、比重ハ平均一〇三二ナリ。

## 乳汁ノ成分

ザイツ氏ノ表

%	蛋	白	脂	糖	鹽
カゼイン	カゼイン	アルブミン	アルブミン	・灰	・脂
○・九二八%	○・九二八%	四・〇九%	四・〇九%	○・四八%	○・四八%
一六・〇四%	一六・〇四%				

バウンドレル、シュロスマン氏小兒科全書ノ牛乳ノ項ヨリ抜萃セル表 (ラウドニツ Rauditz 氏ニ據リテ參照セルモノ)							
	人	牛	山	羊	人	牛	山
乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳
水	分	分	分	分	水	分	分
乾燥成分	「カリテール」	「カリテール」	「カリテール」	「カリテール」	乾燥成分	「カリテール」	「カリテール」
蛋白質	六五〇—七五〇	六五〇—七五〇	六五〇—七五〇	六五〇—七五〇	蛋白質	六五〇—七五〇	六五〇—七五〇
全素量	〇・一五〇—三〇	〇・一五〇—三〇	〇・一五〇—三〇	〇・一五〇—三〇	全素量	〇・一五五	〇・一五五
蛋白質	〇・一一二—〇・一七	〇・一一二—〇・一七	〇・一一二—〇・一七	〇・一一二—〇・一七	蛋白質	〇・五五	〇・五五
全脂	一〇一—一五	一〇一—一五	一〇一—一五	一〇一—一五	全脂	〇・五五	〇・五五
脂肪	〇・六一—〇・六一	〇・六一—〇・六一	〇・六一—〇・六一	〇・六一—〇・六一	脂肪	〇・五五	〇・五五
全糖	〇・五	〇・五	〇・五	〇・五	全糖	〇・五五	〇・五五
乳糖	四・〇	四・〇	四・〇	四・〇	乳糖	八八	八八
全灰	一三	一三	一三	一三	全灰	一一	一一
ラクトアルブミン	八七	八七	八七	八七	ラクトアルブミン	八七	八七
ラクトグロブリン	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	ラクトグロブリン	八七	八七
人	人	人	人	人	人	人	人
牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛
山	山	山	山	山	山	山	山

堀内松五郎氏(東京醫學會雜誌)栗山重信氏(兒科雜誌一七二號)本邦婦人ノ乳汁分析表							
	人	牛	山	羊	人	牛	山
乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳	乳
N <sub>2</sub> O							
CaO(酸化カルチウム)%	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	CaO(酸化カルチウム)%	〇・〇・〇	〇・〇・〇
TgO <sub>3</sub> (酸化磷酸)	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	TgO <sub>3</sub> (酸化磷酸)	〇・〇・〇	〇・〇・〇
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (酸化鐵)	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (酸化鐵)	〇・〇・〇	〇・〇・〇
□(クロール)	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	□(クロール)	〇・〇・〇	〇・〇・〇
反應(ラクムス)	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	〇・〇・〇	反應(ラクムス)	〇・〇・〇	〇・〇・〇
比	水	酸	結	合	水	酸	結
點	力	力	力	力	點	力	力
重	結	合	結	合	重	結	合
灰	分	分	分	分	灰	分	分
蛋白質	一・三四%	一・三四%	一・三四%	一・三四%	蛋白質	一・三四%	一・三四%
脂肪	六・九七%	六・九七%	六・九七%	六・九七%	脂肪	六・九七%	六・九七%
乳糖	二・九八%	二・九八%	二・九八%	二・九八%	乳糖	二・九八%	二・九八%
灰分	〇・一六%	〇・一六%	〇・一六%	〇・一六%	灰分	〇・一六%	〇・一六%
堀内松五郎氏(東京醫學會雜誌)	栗山重信氏(兒科雜誌一七二號)	本邦婦人ノ乳汁分析表					

乳汁ノ蛋白(カゼイン)ト脂肪トヲ除去シタルモノヲ乳漿 Molke ト稱シ、含水炭素可溶性蛋白質及ビ鹽類ヲ含ム、恰モ血液ニ固形成分ナル血球ト、液體成分ナル血漿トヲ分ツガ如シ。

(イ) **蛋白質** 乳汁ノ蛋白質ハ主トシテ「カゼイン」Kasein ヨリ成リ、其他ラクトアルブミン Laktalbumin 及ビ「ラクトグロブリン」Laktoglobulin ヲ含ム。

「カゼイン」ハ「スクレオプロテイド」種類ノ燒ヲ含メル蛋白質ナリ、酸、亞爾加里及ビ「ラブ」酵素ニ依リ凝固シテ不溶性トナル、故ニ「カゼイン」ヲ不溶性ハ蛋白トシ、ラクトグロブリン及ビ「ラクトアルブミン」ヲ可溶性ハ蛋白トス。今マ乳汁中ニ酸或ハラブ酵素ヲ入ル、トキハ「カゼイン」凝塊ヲ生ズ、此際牛乳ノモノハ人乳ノモノヨリモ、其ノ凝塊甚ダ強固ニシテ粗大ナリ、且試驗管内ニ於テベブシン、鹽酸消化ヲ行フニ、牛乳「カゼイン」ハ容易ニ消化セラレ難キ<sup>アソイド</sup>、「スクレイン」Pseudomuklein ノ殘渣ヲ遺シ、人乳ニ於テハ此者ヲ生ズルコトナシ、ビーデルト氏等ハ此點ヲ擧ゲテ人工榮養ハ天然榮養ニ及バザル主因ト、ナセリ、然レド實際ニ於テハ必ズシモ然ラザルガ如シ、而シテ「カゼイン」ハ乳汁ノ種類ヲ異ニスルニ從ヒテ生物學的ニモ差異アリ。

(ロ) **含水炭素** 人乳ニ於テハ獸乳ヨリ多量ニ含マレ、乳汁ノ種類ヲ異ニスルモ同一ナル乳糖ヲ含ム。

近時榮養障礙ノ原因ヲ乳漿ニ求ムルコト切ナルノ結果、含水炭素及ビ鹽類ノ研究盛トナレリ。

(ハ) **脂肪** 乳脂ハ諸種ノ「グリセリンエステル」ト游離脂肪酸 (Buttersäure, Palmitinsäure, Oleinsäure) トノ結合ニ成リ、其成分及ビ含量モ一定セズ、牛乳ハ人乳ヨリモ約四倍ノ揮發性ナレリ。

脂肪ノ含量ハ人乳ニ於テ殊ニ動搖アリ、分泌ハ初期ハ必ズ脂肪ニ乏シク、後ニ至ルホド漸々増加スルモノナリ。

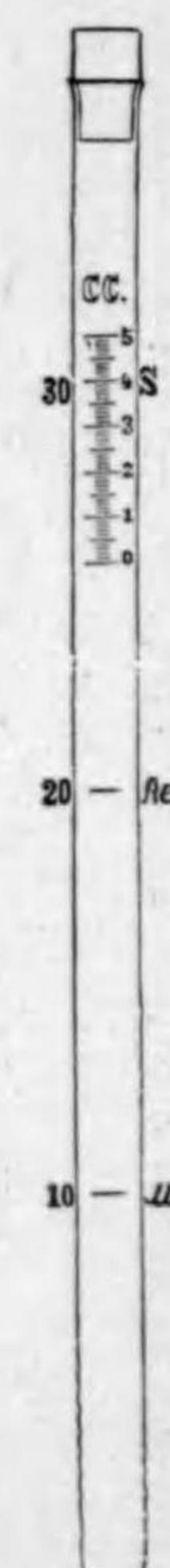
脂肪ハ定量ハ容易ニ行ヒ得ベキ方法ナリ、之ニ依リテ凡ソ乳汁ノ良否ヲ査定シ得ベキヲ以テ、左ニ其概略ヲ示スベシ(須藤氏醫化學實習)。

(一) **比重ニヨリテ測定スル法** 尿重計ニ類スルクエンヌ<sup>ム</sup>ミユルレル Quenne-Müller 氏ノ乳重計 Lactotensiometer ヲ以テス。

牛乳ニ水ヲ加フレバ其比重輕クナリ、之ニ反シテ脂肪ヲ脱去スレバ比重増スナリ、故ニ比重測定モ忽セニスベカラズ。

(二) **マルシアン Marchand** 氏ノ法 一〇・〇立方厘米ノ乳汁ヲマルシアン氏乳脂計ニ入れ(M迄)、二一四滴ノ苛性曹達液及ビ水ヲ以テ飽和シタル「エーテル」一〇・〇立方厘米ヲ加ヘテ(Ae迄)、強く振盪シ、更ニ九〇・〇容量%ノ酒精ヲ<sup>ム</sup>迄注ギ、栓ヲ密閉シテ内容ヲ充分ニ混和シ、次ニ乳脂計ノ全部ヲ約四〇度ノ温湯ニ浸シ時ニ長軸ニ沿フテ劇シク廻轉シ、數十分ノ後、二〇度ノ水中ニ移シテ冷却シ、最上層ヲ成セル鮮黃色ノ脂肪溶液ノ容量ヲ割度ニ就テ讀ミ、此容量ヲVトスレバ、次ノ公式ニヨリテ得タル數ハ一〇〇<sup>ム</sup>此ノ被檢乳中ニ存スル脂肪ノ重量ナリ。

$$(V \times 2.04) + 1.135 = x$$



第四圖 マルシアン氏ノ乳脂計(自然大ノ $\frac{1}{2}$ )

(三) ゲルベル N. Gerber 氏ノ法 ゲルベル氏ノ乳脂計 Acid-Densitymeter ノ以テ測定ス、方法モ左程困難ナラズ、且ツ稍精確ナルヲ以テ好ンデ用ヒラル。

試薬 (a) 濃硫酸 一八二〇—一八二五ノ比重ヲ有スルモノ(一五度ニ於テ)

(b) 「アミールアルコホル」〇八一五ノ比重ヲ有スルモノ(一五度ニ於テ)  
一〇〇立方厘米ノ濃硫酸(a)ヲ乳脂計ニ移シ之ニ一・〇立方厘米ノ「アミールアルコホル」ヲ靜ニ注加シ、  
更ニ注意シテ一・〇立方厘米ノ被檢乳ヲ加ヘテ「ゴム栓ヲ堅ク施シ、破裂ヲ防グ爲メ「タオル」様ノ物  
ヲ以テ之ヲ卷キ、乳脂計ノ内容ヲ充分ニ振盪シテ、乳脂計ノ全部ヲ六〇—七〇度ノ温湯中ニ浸シ、  
此際「ゴム栓ノアル端ヲ下ニ向ケシムベシ」三分ヲ經テ之ヲ取出シ、附屬ノ遠心機ニ收メテ約一  
〇分以上廻轉シ、更ニ乳脂計ヲ取出シ「ゴム栓ヲ下ニシテ再ビ六〇—七〇度ノ温湯中ニ投ジ、二—  
三分時ノ後管ノ上部ニ集積セル脂肪層ヲ讀ムベシ、脂肪層ガ占ムル割度數ノ $\frac{1}{10}$ ハ脂肪ノ重量%

第五圖 ゲルベル氏ノ脂肪計(自然大ノリ)



ナリ、今若シ脂肪層ノ上界ヲ2、下界ヲ41トスレバ、其差ハ三九ナルガ故ニ被檢乳中ノ脂肪ハ三九  
%ナリ。

(二) 鹽類及ビ鑑質成分 鑑質成分ニ關シテハ甚ダ興味アル事項多ク、今日諸家ノ研究モ  
亦之ニ向ヒテ集注セラル、景況ナリ幼時ニ於テ人類ヨリモ急速ナル生長ヲ要スル獸  
類ノ乳汁ハ概々鑑質成分ニ豊富ナルヲ見レバ、榮養ニ關シテ如何ニ鑑質ノ必要ナル者  
カヲ識ルニ足ラム。

鑑質ノ中、生長ニ付テ必要ナルハ磷ト「カルチウム」トニシテ、骨ノ主要ナル無機成分ヲナ  
スモノナリ、而シテ兩者共ニ牛乳中ニハ人乳中ヨリモ多シ、鐵成分モ亦牛乳ニ多シ、故ニ  
牛乳ヲ稀釋スルニ當リテ鑑質成分ノ關係ヲ顧ミルノ必要ヲ説ク人モ尠ナカラズ。

(ホ) 酸酵素 亦注目すべき成分ニシテ牛乳ヲ煮沸シ或ハ人工的ニ諸種ノ方法ヲ以テ處  
理スルトキハ其分解ヲ招ク、酸酵素ニハ種々アリ。

「オキシダーゼ」Oxydase 酸化ラナスモノニシテ、煮沸スレバ分解ス、故ニ此検査ニ由リテ煮乳ト

生乳トヲ區別シ得。

「レドウクターネゼ」Reducase 還元作用ヲ營ムモノニシテ、乳汁ノ酸敗スルトキハ分解ス。

「チアスター」Dihydrogen u. Glycolytic Ferments 含水族素ノ分解ヲ司ルモノ。

其他「リバーゼ」Lipase、「カタラーゼ」Katalase 蛋白分解酸酵素 Proteolytic Ferments 等アリ。

「オキシダーゼ」存否ヲ見テ、煮乳ト、生乳トヲ區別シ得ベシ、今マ生乳ニ一滴ノ醋酸ヲ點下シ(濾過  
紙ニ就テ行フベシ)尚本古キ「テルベニンチン」油ト新鮮ナル瘡瘍木脂アルコホル液トノ同量ヲ混ジ  
タルモノヲ滴下スレバ、直ニ美麗ナル青色ヲ呈スベシ、之レ「オキシダーゼ」ノ存在ニ由ルモノニ  
シテ、彼血色素ノ瘡瘍木脂試験ト同一理ナリ、而シテ煮乳ニハ之ヲ缺クモノアリ。  
又「レドウクターネゼ」ノ存否ハ度ニ依リテ牛乳ハ變敗如何ヲ見ル法アリ(ベルタンサン及ビシャウ  
ジユード氏)。

原理ハ牛乳ノ細菌性分解ニ因リテ漸次ニ増加スル一種ノ還元物質ヲ測定スルニ基ク。

試薬 (a) 四千倍ノ「メチレン」青溶液

(b) 四千倍ノ「フクシン」溶液 + 五〇度酒精

試験管中ニ二〇立方厘米ノ被検乳ヲ盛り、三滴ノ(b)ト五滴ノ(a)トヲ入ル、トキハ混和液ハ灰白色ヲ呈ス、此際四十度ノ水浴中ニ置ケバ、牛乳分解ノ程度ニヨリテ一定時ノ後ニ、灰白色ハ紫藍色ヲ呈シ遂ニ淡紅色ニ移ル、之レ「レドウ・クターゼ」ノ「メチレン青」ヲ還元シテ「フクシン」ノミトナルニ因ル之ニ因リテベ氏及ビシ氏ハ次ノ如ク定メタリ。

- (一) 被検乳ニ於テ色調變化ノ十五分間以内ニ起ルモノハ、少クトモ哺乳兒及ビ患者ニ用フベカラズ。
- (二) 色調變化ノ四十五分時間内ニ起ルモノハ、少クトモ哺乳兒及ビ患者ニ用フベカラズ。
- (三) 一時間半内ニ起ルモノハ、已ニ變敗ノ兆アルモノナリ。

(ハ) ハプチン類 Haptine 乳汁中ニハ種々ナル抗元、Antigen ト成リ得ベキ物質ヲ含有ス、乳汁或ハ乳汁ノ蛋白ヲ家兎ノ血中ニ送ルトキハ、其家兎ノ血清中ニハ特種ノ沈降素 Praezipitin ヲ生ズ、之ニ依リテ人乳ノ「カゼイン」ト牛乳ノ「カゼイン」ヲ分チ得。

抗體 Antikörper 及ビ抗毒素 Antitoxin モ種々ノモノヲ含ミ、母體若シ室扶斯、或ハ實扶的里ニ罹レバ、其乳汁中ニハ之ニ對スル抗毒素ヲ分泌ス。

其他乳汁中ニハ調理素 Opsonin 及ビ補體 Komplement ヲ含有ス、此等ノ抗體、調理素及ビ補體ノ存在スルアリテ、新鮮ナル乳汁ハ殺菌能力ヲ有スルモ若シ八十度以上ニ煮沸シ、或ハ三乃至二十四時間放置スルトキハ、其效力ヲ失フニ至ル、之レ亦牛乳煮沸等ニ際シテ顧慮スベキ點ナリ。

(ト) 瓦斯體 Gase 人乳中ニ含ムモノハ、一四一一七% 酸素、三五・〇九% 炭酸及ビ四四・七七% 窒素ナリ。

### (三) 摺乳及ビ牛乳貯藏法ノ注意

牛乳ハ可及的健全ナル乳牛ヨリ搾取シタルモノナル可キハ勿論ナリ、牛舍、乳房清潔法等モ亦衛生ノ範則ニ從ハザルベカラズ。

飲用牛乳トシテハ、消毒法ノ完全ニ行ハレタル者ヲ以テ理想トスレドモ、其他ノ緊要ナル條件ハ左ノ如シ。

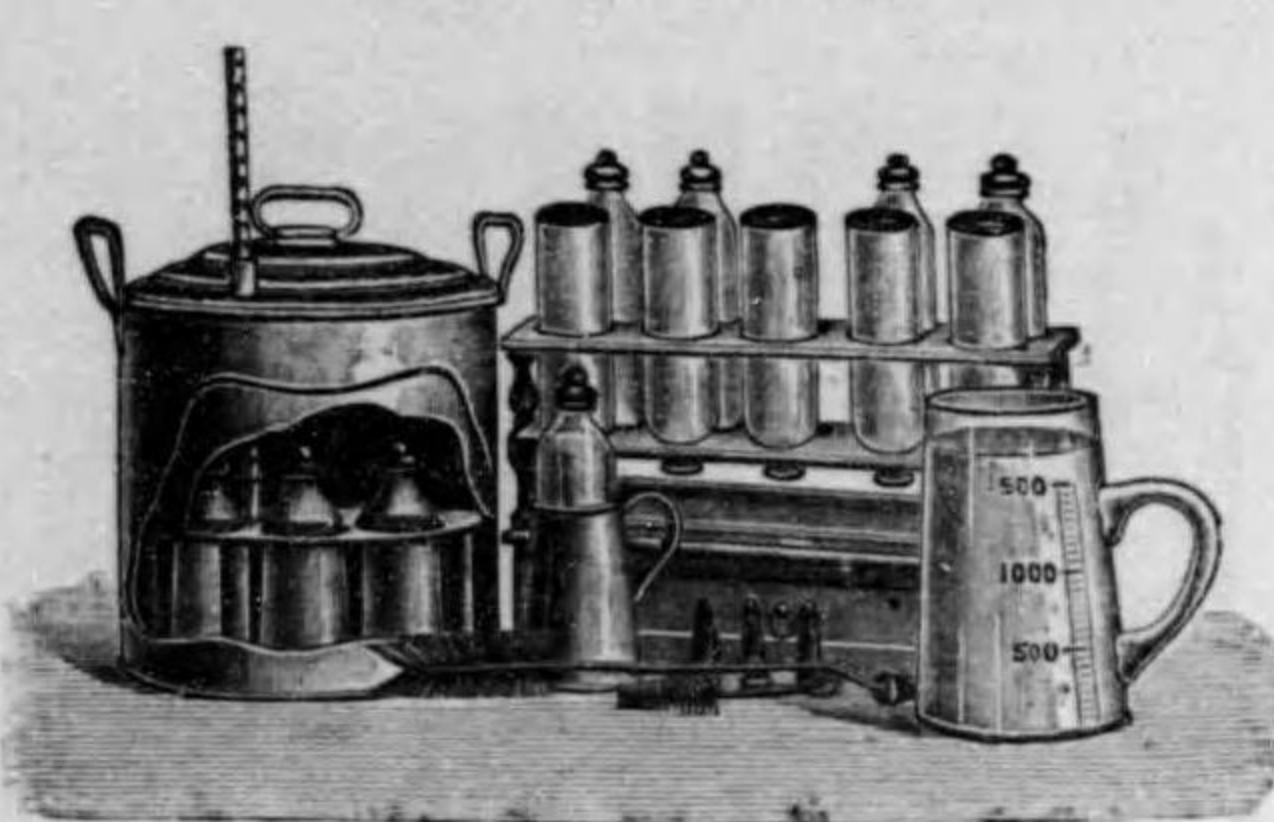
多數ノ乳牛ヨリ得タル乳ヲ混合スルコト、  
搾乳ヨリ成ルベク長時間ヲ經過セザル乳ヲ飲用スルコト。

牛乳ニ於ケル脂肪等ノ成分ハ、各乳牛ニ依リテ其量不定ナレバ、成ル可ク多數ノモノヲ混和スルトキベ殆ンド其缺點ヲ免ル、コトヲ得ベシ、牛乳ハ搾乳ヨリ時間ヲ經ルニ從ヒテ、其中ニアル汚物搾乳時ニハ汚物ノ混入ヲ避タルコトヲ得ズ、即チ牛毛、牛糞等ヲ

圖六 第  
器產消氏トツレスク  
(nach Frühwald)



圖七 第

器菌殺温低氏フルドンレルオ  
Ollendorfscher Pasteurisierapparat狀ノ前沸煮 狀ノ後沸煮  
栓謹護フルドンレルオ  
Ollendorf's Gummikapp.nverschluss

混ズ(空氣中ヨリ入リ  
來ル芽胞ノ繁殖ニ由  
リテ酸酸酵及ビ腐敗  
ト雖モ其一立方仙迷  
鎖状菌及ビ球菌状ヲナセル乳酸菌ノ多數ヲ見得ベシ、故ニ新鮮ナル牛乳  
ナル冷藏器ニ入レテ運搬スベシ。

牛乳ノ變敗ヲ豫防スルニハ次ノ方法アリ。

(一) 冷却防腐法ハ直チニ水庫ニ入レ、冷却シテ貯フルナリ。

(二) 高熱殺菌法 Sterilisation 百十度乃至百十五度ニマデ熱スルコト十五分間ナリ。

(三) 低熱殺菌法 Pasteurisation 六十五度乃至八十度ニテ二十分乃至三十分間消毒スルナリ。

(四) 單純煮沸法 普通ノ牛乳鍋ニテ煮沸スルナリ。

(五) 藥剤防腐法 炭酸曹達、撒里矢爾酸ヲ用フル人アレドモ實用ニ堪ヘズ、近時過酸化水素ヲ以テ殺菌シ、冷所ニ貯藏シテ良好ノ成績ヲ收メタル報告アリ、人乳ヲ貯藏スルニ最良ノ方法ナリト云フ。

要之高熱殺菌法ハ絶對的ニ殺菌スルヲ得レドモ、生物學的ニ變化ヲ來シ、バアロー氏病

等ヲ起スノ恐レアリ、低熱殺菌法ニ至リテハ比較的の殺菌法ニ過ギズ、然シ乳酸菌及ビ普通ノ病源菌ハ概々死滅シ、結核菌ノ如キモ八十度ニ十分間又ハ六十八度ニ半時間熱スルトキハ殺滅セラル、モハナリ。

故ニ吾人ハ日常ソクスレット氏消毒器 Soxhlets Sterilisierungsapparat 及ビジヤンチール Gentle 氏消毒器ヲ以テ百度ニ煮沸シ、五分時間ニ及ベ足レリトス。

冷藏法 殺菌消毒シタル牛乳ハ直チニ水箱ノ中ニ貯藏スルコト甚ダ必要ナリ、然ルトキハ細菌ノ繁殖ヲ確實ニ妨げ得、冷藏法ヲ行フニ適當ナルハ、護謹栓哺乳罐ニシテ、冷却スルトキハ陰壓ノ爲ニ護謹栓固ク密著ス。

圖八 第  
鍋乳牛氏グッヘルフ  
Milchkochtopf (Soltmann-Flügge)

## 第四章 小兒ノ栄養法 Ernährung des Kindes

小兒(哺乳兒)ノ栄養法ヲ別チテ天然栄養法、人工栄養法及ビ混合栄養法ノ三トス、甲者ハ母親若クハ乳媪ノ乳房ニ賴リテ、即チ人乳ヲ以テ哺育スルノ命名ナリ、乙者ハ獸類ノ乳汁ヲ以テ哺育スルノ稱呼ナレドモ、現今吾人ノ好ンデ用フルモノハ牛乳ニシテ、他ノ獸乳ノ如キハ例外ニ屬シ、人工栄養トハ則チ牛乳ヲ以テ栄養スルニ外ナラズ、内者ハ天然栄養法ト人工栄養法トノ兩者ヲ使用スル方法ナリ。

分娩ノ機轉ヲ終リテ初生兒ノ此世ニ出ヅルヤ、其生活ヲ營マムガ爲ニ、從來母氏ニ賴リテ營マレシモノモ、更ニ自ラ代リテ三種ノ重要ナル官能ヲ營マザルベカラズ。

## 一、自家體温ノ保持。

二、食餌ヲ攝取シテ生活ノ保持及ビ成育ニ必要ナル勢力ヲ作爲スルコト。

三、肺呼吸ニ由リテ酸化作用ニ必要ナル酸素ヲ供給スルコト。

然ルニ自家體温ノ保持ニ就テ、初生兒及ビ哺乳兒ハ大人ト比較スルニ、非常ナル努力ヲ要ス。之レ體表面積ノ關係ニシテ、初生兒ノ體表面積ハ大人ノ約三倍大ニ當リ、年長ノ哺乳兒ハ大人ノ約二倍大ニ當ルト云フ、一基瓦ノ表面積ハ

大人

三〇平方仙迷

六ヶ月ノ小兒

六〇平方仙迷

## 初生兒

八・三平方仙迷

立體的類似ノ物體ニアリテハ、若シ物質ノ性質等シキトキハ、熱放散及ビ吸收ハ表面積ト重量トノ比ニ正比例スルガ故ニ、初生兒及ビ哺乳兒ハ重量ノ基瓦ニ對シテ、大人ヨリ二一三倍大ナル勢力及ビ熱交換ヲ必要トスルコト瞭然ナリ。

大人ハ一基瓦ニ對シテ約三五熱量 Kcal.ヲ要シ、哺乳兒ハ約一〇〇一一〇熱量ヲ必要トス、約六ヶ月ノ哺乳兒ニ就テ此ノ如シ、年齢ノ加ハルト共ニ體表面ハ比較的の減少スルガ故ニ、哺乳兒期ノ終末ニ至ラバ約九〇熱量ニテ足ルベシ、斯ノ如クンバ、小兒ノ消化器官及ビ其ノ附屬分泌腺ノ如キハ、大人ニ比スレバ多大ノ動作ヲ要スルヲ以テ、隨ツテ過重ナル任務ヲ負ハザル可カラズ、又容易ニ毀損セラレ易キ位地ニ立ツモノト云フベシ。

故ニ其構造ニ於テモ亦之ヲ大人ニ比スルニ、特有ノ點ナクンバアラズ、消化腺ニ於テハ其實質甚ダ豐富ナリ、例之肝臟ノ重量ト體重トヲ比較スルニ

初生兒期

一：一八

小兒期

一：二〇

春機發動期

一：三五

成人期

一：四〇

ノ如シ (Czerny-Keller, Des Kindes Ernährung)\*

又哺乳兒ノ腸管ハ其長サヲ身長ニ比スルニ六一八：一一當リ、成人ニ於テハ五：一二相當ス、腸絨毛モ亦成人ノモノニ比スレバ甚ダ大ニシテ、腺組織及ビ淋巴組織モ豊富ナリ、又哺乳兒ノ身體ハ水分ニ富ミ、カメレル氏ニ據レバ一〇〇瓦ニ付キ水分七一八瓦ナリ。

### 第一 人乳營養法(天然營養法) Ernährung an der Brust.

Die natürliche Ernährung

天然營養法ハ哺乳兒ニ對シ實ニ理想的當然ノ營養法ニシテ、母氏ノ乳房ニ依リテ乳兒ヲ哺育スルヲ得バ、之レ最良ノ策ナレドモ、已ムヲ得ズンバ他婦人ノ乳房ニ賴ラザル可ラズ、蓋シ母乳ハ人體ヨリ由來スルモノナルヲ以テ、各滋養成分ハ其ノ質ニ於テモ、其ノ量ニ於テモ人類ノ特長ニ悉ク適合シタルモノナルヤ論ヲ俟タズ、吾人ハ試驗管ト試薬トヲ用ヒテ人乳及ビ牛乳ヲ分析シ、定量スルモ、兩者間ニ甚シキ相違ノ點ヲ發見スルコト少シ、然レドモ兩者ガ含有セル各滋養成分、殊ニ蛋白質ノ如キニ至リテハ、生物學的意味ニ於テ全然別種ノモノニ屬ス、例之人乳中ノ「カゼイン」ト牛乳中ノ「カゼイン」トヲ以テ沈降反應 Prazipitationsreaktionヲ試ムルニ、兩者ニ就テ特種反應ノ存スルヲ見得ベシ、即チ

人乳ハ人類ノ哺乳兒ニ向ヒテハ、全然適合シタル同種性食餌 Arteigene Nahrungニシテ、何者ヲ以テ之ニ代用ストモ、決シテ完全ノ結果ヲ現ハスコトヲ得ズ、反之牛乳ノ如キハ異種性食餌 Artefremde Nahrungニシテ、已ムヲ得ザルトキハ以テ人乳ニ代用シ得ベキニ過ギザルナリ、此天然營養兒ト人工營養兒トヲ比較セんニ、前者ハ哺乳兒期ニ於テ危險ニ陥ルトモ、之ヲ無事ニ通過スルニ拘ハラズ、後者ハ屢々消化及ビ營養障礙ニ罹リ、其犠牲トナリテ斃ル、者甚ダ多數ニ上ルヲ知ラム、伯林ニ於テノ統計ヲ舉グムニ、出生後一年未滿ノ小兒一萬人中、各月ノ死亡數(自一八九五年)

	母 營 養	獸 乳 營 養
出生ヨリ一ヶ月	一一〇一	一一一〇
一ヶ月—二ヶ月	七四	五八八
二ヶ月—三ヶ月	四六	四九七
三ヶ月—四ヶ月	三七	四六五
四ヶ月—五ヶ月	二六	三七〇
五ヶ月—六ヶ月	二六	三一
六ヶ月—七ヶ月	二四	二七七
七ヶ月—八ヶ月	二四	二四一
八ヶ月—九ヶ月	二三	二二三
九ヶ月—十ヶ月	一九一	一九一

歐米ニ於ケル人工栄養ノ流行ハ本邦ノ比ニアラズト雖モ、我國ニ於テモ人工栄養漸々隆盛トナル傾向アルハ、争フベカラザル事實ナリトス。人工栄養ガ遙ニ天然栄養ニ劣ル理由ハ多々アルベキモ、其ノ中主要ナルモノ一二ヲ擧ゲム。

抗毒素等ノ乳汁中ニ移行スルコト。

エールリッヒ Ehrlich 氏ハ始メテ「アブリン」又ハ「リチン」ニ對シ免疫セル鼠ノ乳ヲ、非免疫鼠ノ産シタル幼兒ニ與ヘテ免疫質ヲ得ルコトヲ知リ、レーメル Römer 氏ハ實扶的里免疫馬ノ乳ヲ飲ミタル幼馬ノ血清中ニ實扶的里抗毒素ヲ證明セリ。

人乳々漿 Menschenmilchmolke ト牛乳々漿 Kuhmilchmolke トノ差異ニ由ルコト。  
近時 フインケルスタイン Finkelstein 及ビマイエル Meyer 氏ノ唱フル所ニ據レバ、乳兒ノ腸上皮細胞ハ人乳々漿中ノ「イオン」ニ接觸スレバ、完全ニ官能ヲ營ミ得ルモ、牛乳々漿中ノ「イオン」ハ腸上皮ノ官能ヲ阻害スト云フ。

以テ兩栄養法優劣ノ一般ヲ知ルベシ。

### 廢乳に就て Das Abstillen

總テノ母ハ其初生兒ニ授乳シ得ベキヤト云フニ、殆ンド總テノ場合ニ於テ健康ナル母ハ授乳シ能フモノナリ、乳汁分泌甚ダ僅少ニシテ殆ンド絶望ノ場合ニテモ、乳兒ヲシテ屢々吸啜セシムルトキハ、偶々分泌ヲ促進シ、遂ニ授乳不足ヲ感ゼザルニ至ルコト往々之アリトス。

斯ノ如キ場合ニ際シ乳腺ノ分泌ナキモノト速断シテ、廢乳スル人モ亦尠ナカラズ、ボイブル Heubner 氏ハ五百七十人ノ婦人ニ就キ、分娩後滿三ヶ月間ノ乳汁分泌ニ關シテ調査セシニ、八三・三%ハ分泌充分ニシテ、一六・七%ハ不充分ナリキ、然シ此ノ中ニ兎唇ノ爲メ吸乳不完全ナル者、又初々分泌不足ノ故ヲ以テ人工栄養ヲ始メ、益々分泌減弱ヲ來タセシ者ヲ含メルヲ以テ、真ノ分泌不足ハ僅ニ一・四%弱ニ過ギザリシト云フ。

母氏及ビ乳兒ノ關係ヨリシテ絕對的授乳不可能ハ、母氏ノ死亡シタル時ナリ、其他ノ場合ニ於テハ比較的授乳ヲ不可トスルノミ。

(一) 重症產褥性敗血膜毒症、腸室扶斯、猩紅熱、重症丹毒、惡性糖尿病、發作頻繁ナル癲癇及ビ

母氏脚氣ニ罹リテ其乳兒ニ危險ノ兆候現ハレタルトキ等ハ、殆ンド絕對的ニ授乳セザルヲ宜シトス。

(二) 月經時、肺炎ノ如キ熱性急性疾患、腎臟炎、貧血ハ授乳ヲ不可トスル人アレドモ、猶ホ人工栄養ノ危險ナルニ勝ルコト論ヲ俟タズ。

(三) 結核ニ就キテハ種々ノ議論アリ、母氏發熱烈シク、太甚シキ衰弱ニ陥レル者ハ授乳シ

得ザルハ勿論ノコトナレドモ、然ラザル場合ニ於テモ、往時ハ絶對的ニ廢乳スペキモノトセリ、然ルニ近來シユロスマン Schlossmann 氏ハ結核ノ母氏ガ其兒ニ授乳スルトキハ、反ツテ母氏ノ健康ニ宜シク、而モ其體重ヲ增加セシメ、兒モ後來結核ニ對シテ大ナル抵抗力ヲ得ルニ至ルト云ヒ、ドイツ Deutsch 氏ハ結核婦人ノ授乳ハ母氏ノ爲ニモ、乳兒ノ爲ニモ有害ニシテ、全然廢乳スペシト云ヘリ、然レド假令廢乳ストモ、母氏ト乳兒ト同棲セザルヲ得ザル生活狀態ノ者ニ對シテハ、一顧ノ價値ナキ議論ナリトス。

(四) 乳腺炎 Mastitis 外科的ニ治療ヲ施シタル後、ハ哺乳ヲ許可スベシ、此際哺乳ハ反ツテ乳腺ノ血液循環ヲ促シ、炎症ノ消散ヲ扶ケ、又疼痛ヲ緩解スルノ利アリ、而シテ母乳ニ多數ノ膿球等混入スルモ、健康ナル乳兒ニハ左程害ナキモノトス。

(五) 乳嘴裂傷 哺乳ノ初メニ於テ屢々乳嘴ニ裂傷ヲ得、暫時ノ廢乳ヲ要スルコトアルモ、適宜ノ時機ヲ見テ哺乳セシムベシ。

療法 五一〇%單寧グリセリン、黒色軟膏硝酸銀〇・一ペルバールサム、一〇%ワゼリン、一〇〇%貼用シ、疼痛ヲ緩解スルニハ五%アネステジン軟膏、三一五%硝酸銀液ヲ用ヒ、而シテ常ニ繡帶ヲ以テ高ク舉上スベシ。

(六) 乳房及ビ乳嘴ノ形態ニ變化アルトキハ、授乳シ得ザルコトアリ、例之乳嘴陷凹 (Hollwarze) セルモノ、乳嘴低短ナルモノ等ハ廢乳ノ原因トナリ得ベシ。

(七) 狼咽及ビ兔唇 Wolfsrachen u. Hasenscharte 狼咽ニテハ絶對的ニ哺乳不可能ノ事アリ。

(八) 鼻加答兒 Coryza 「アドレナリ」(1:3000)ノ溶液ヲ點シテ治癒スルコトアレドモ、又タ甚シキ哺乳障礙ヲ來スコトアリ。

以上列舉シタルモノハ授乳障礙トシテ認ムベキモ、近時文明ノ程度進歩スルニ連レ、廢乳シテ人工栄養ニ賴ラムトスル者多キハ、吾人ノ怪訝ニ堪ヘザル所ナリトス之レ人智ノ發達スルニ隨ヒテ乳腺ノ變性ヲ來スニ由ルト説ク人アレドモ、採ルニ足ラザル説ニ外ナラズ。廢乳ハ理由ニ種々アリ、授乳ニ因リテ容姿ノ衰フヲ憂フルモノ、虚榮憧憬ノ爲ニ授乳ヲ廢スルモノ、人工栄養法ノ危險ヲ識ラザル爲ニ便利ナリト思惟シテ廢乳スルモノ、產婆及ビ醫師ノ愚劣ナル勸告ニ動カサレテ廢乳スルモノ、僅微ハ浮腫等アレバ、直チニ脚氣ト速断シテ廢乳スルモノハ如キ爾リ、又分娩後ニ乳汁分泌ノ開始稍後ル、ヤ、輕卒ニ母乳ヲ廢シテ牛乳ヲ與フルコトアリ、是等ハ實ニ思ハザルノ甚シキモノニシテ、何物ヲ以テスト雖モ、母乳ニ代フルモノナキヲ知ラザルニ因ル、ブアヴオリース Favorinus 曰ハズヤ

婦人ハ己ガ兒ニ哺メテコソ、初メテ完全ナル母タルヲ得ベケレ。

„Eine Frau ist nur dann ganz u. vollkommen Mutter ihres Kindes, wenn sie es selbst stillt.“

### 授乳婦ノ攝生 Hygiene der Stillenden

授乳婦ハ労働及ビ怠惰ハ過度ヲ避ケザルベカラズ、労働過激ノ不可ハ勿論ナレドモ、富裕ノ家庭ニアリテハ何等ノ動作ヲ爲サズ、而シテ終日閑居スルノ弊アリ、是レ慎ムベキ事ニシテ、假令深窓ノ婦人ナリトモ適當ノ運動ヲ怠ルベカラズ。

精神的興奮即チ憤怒疼痛悲哀ハ乳汁分泌ニ大影響ヲ及ボスモノニアラズ、神經性ノ婦

人ニ來ル突然ナル乳汁分泌閉止：Plötzliche Versiegen "der Milchsekretion"ハ、精神的反射ニ依リテ起ル乳嘴括約筋ノ收縮ニシテ、只一時的ノモノニ外ナラズ、然レバ餓エタル乳兒ヲシテ切リニ吸啜セシムレバ、再ビ分泌ス可キナリ。

授乳婦ハ食餌ハ嗜好ノ範囲ニテ多量ニ食セシムルヲ宜トシス、勿論滋養價ノ多キ品ヲ

擇ブ可キモ、衛生的食物ト特ニ指定スルモノナシ、食シ能フ物ハ何品ヲモ制限スルノ要ナク、香味ヲ加ヘタル物酸味アル食物、生果ノ如キ更ニ顧慮スルコトナク與ヘテ可ナリ、

食慾少ナク便秘ノ傾向ヲ有スル婦人ニハ、殊ニ含水炭素ニ富メル食餌、野菜、果物等ヲ交互ニ調理シテ與フベシ。

母乳ノ成分、殊ニ脂肪ハ個人ニヨリ又時期ニヨリテ甚ダ異動ヲ生ズ、乳汁ヲ検査シ、脂肪量少シトテ直チニ其婦人ノ乳汁ヲ不可トナスハ甚ダ誤レリ、寧ロ其乳兒ノ生育程度如何ヲ標準トシテ乳汁ノ良否ヲ決スベシ。

榮養法ニ依リテ授乳婦ノ乳汁成分ニ甚シキ變化ヲ來シ得ルモノニアラズ、脂肪及ビ蛋白質多キモノ必ズシモ乳汁ノ脂肪量等ヲ増加セズ、又牛乳及ビ「ソーブ」多量ニ與ヘタリ

トテ、必ズシモ乳汁ノ量ヲ增加シ得ルニアラザルナリ、古來鯉ノ味噌汁ハ乳汁ノ量ヲ増加シ、青菜ヲ食スルトキハ乳ノ性質ヲ惡シクスルト唱フルモ、一ノ妄説ニ過ギズ。

#### 利乳劑 Lactagog

ナトーダン「Sennatogen」アルツトロボン「Maltropon」「ラクタゴール」Lactagol 等ハ左程効能ナシ、外見上

乳汁ノ量ヲ増加スルガ如ク思ハル、ハ暗示的作用ニ過ギズ、近時バッシュユ Basch 氏ハ内分泌學說ニ依リ、生殖器ト乳腺ト關係アルハ神經作用ニアラズシテ、一種ノ刺戟素ホルモン Hormon ノ存在ニ基クトナシ、乳汁ノ分泌催進ニ作用スル特種ノ刺戟素ヲ分離シタリト云フモ未だ治療上ニ應用スル程度ニ至ラズ。

較近健康婦人ノ乳汁ヲ約一〇立方仙迷數度皮下ニ注射スルトキハ、不足ナル乳汁ニテモ其分泌ヲ催進シ能フト云フ者アリ。

液體需要ハ授乳婦ニ於テ盛ナリ、故ニ飲料トシテ水、茶ハ勿論、ソーブノ如キ物モ多量ニ與フベシ、アルコホル飲料ノ少量ハ害ナケレドモ、多量ノ飲用ハ有害ニシテアルコホルノ幾分ハ乳汁ニ移行スルガ如シ。

乳房ハ清潔ハ必要ナリ、乃チ常ニ洗滌シ不潔ナラシムベカラズ。

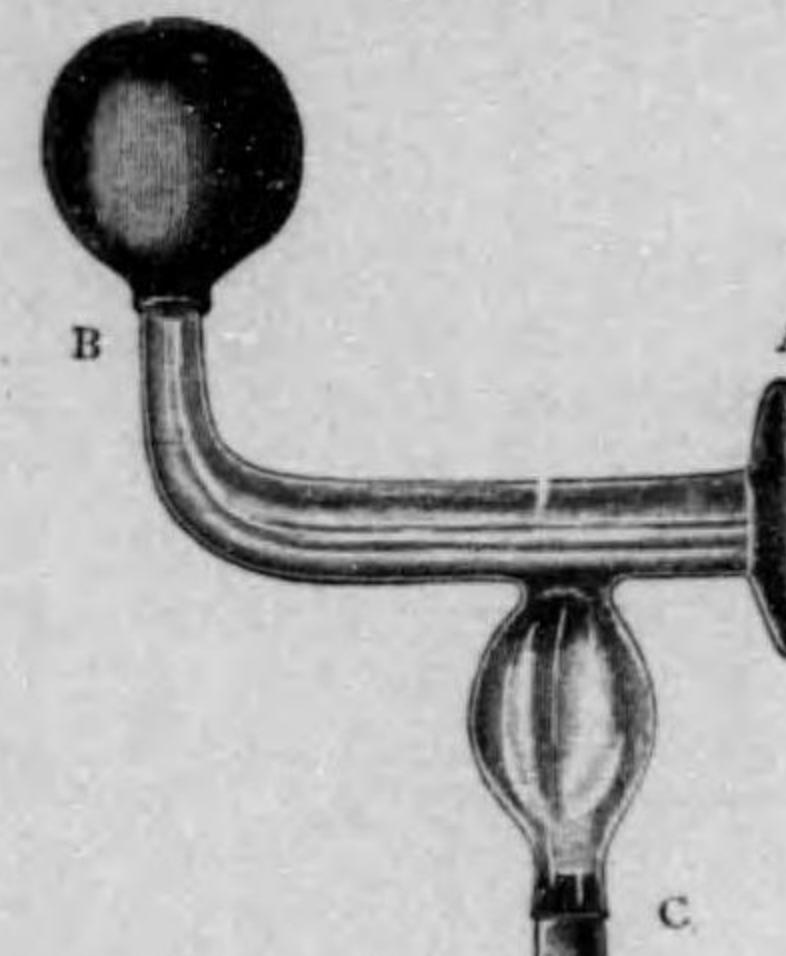
特ニ授乳婦ニ禁忌スペキ藥物ハ之ナシ沃度、臭素、撒里矢爾散、阿片、莫爾比涅<sup>アトロビン</sup>ハ乳汁ニ移行スルモ、害ヲナサズル程度ナリ、水銀療法ハ之ヲ母體ニ施スモ、乳ニ移リテ哺乳兒ニ作用アラシムルコト能ハズ、又母體ニ「クロ、フォルム」麻酔ヲ施スモ、哺乳兒ニ害ナシ、下劑ハ鹽類性下劑ヲ用フルヲ可トス。

月經ハ授乳期ニ於テ全然閉止スルカ或ハ不規則ナルコトアリ、然シ此際月經アルモ何等ノ憂ナシ。

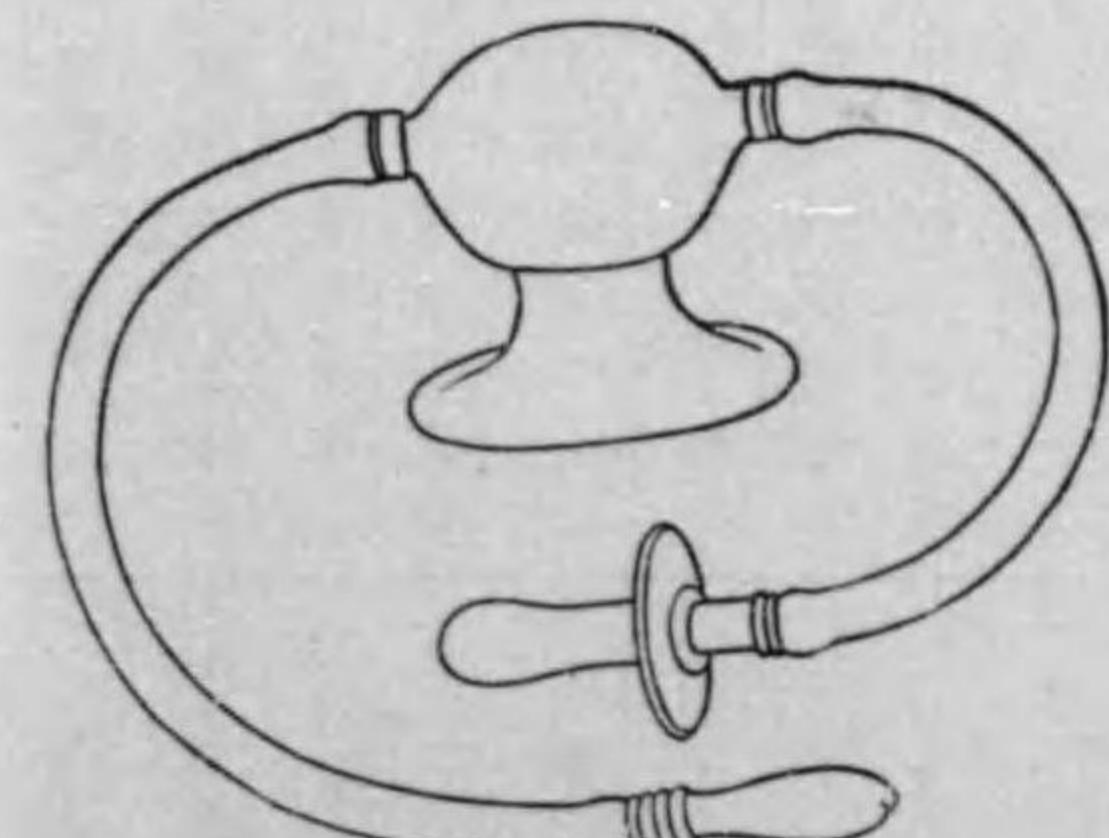
### 母乳栄養ノ方法 Technik der Brusternährung

初生兒ニ初メテ哺乳セシムルハ分娩後二十四時間ニ於テスベシ、其レ迄ハ少量ノサッカリソラ加入シタル番茶煎汁等ヲ與フベシ幾多ノ初生兒中分娩後三十六時間乃至四十八時間ニ至リ初メテ乳ヲ索ムルモノ往々之アリ、初度ノ授乳ニ當リ巧ニ強ク吸飲スル者アレドモ時ニハ乳嘴ヲ良ク保持シ得ズシテ直チニ離ス者アリ、然レド漸次哺乳スル

第九圖 器引吸氏ムヒラブイ  
(Milchpumpe nach Ibrahim)  
(nach Feer)



第十圖 器乳吸氏ンダニビ



### ニ至ルベシ。

乳房平低ニシテ哺乳ノ困難ナルモノ、或ハ吸啜力ノ弱キ時ニハ次ノ裝置ヲ使用スペシ。

イブラヒム Ibrahim 氏ノ吸引器ハ圖ノ如キ T 字形ノ硝子鐘ヨリ成リ、A ノ乳房ニ當テ、B ニ附ケル強厚ノ護謄球ヲ以テ吸引シ、乳汁ヲ C ニ集ムル様ニ裝置ス。

ビュダン Budin 氏ノ吸乳器ハ尙ホ乳腺炎及ビロ蓋破裂ノ哺乳困難ナル者ニモ用フルニ足ル。

授乳ニ際シテ乳汁ヲ充分ニ排出セシムベキヤ否ヤ、之レ吾人ノ屢々遭遇スル質問ナリ、乳房ノ充分ナル乳汁排出ハ甚ダ必要ノ事タリ、則チ分泌ヲ催進シテ排出量ヲ増加ス、若シ充分ニ排出セザルトキハ、乳汁ノ鬱滯ヲ來シテ分泌不足ヲ將來スルコトアリ、充分ナル排出ヲ客シム結果トシテハ、分娩後第一週ノ末期ニ至リ屢々乳汁ノ分泌停止シ、而シテ二三週後ニ至レバ遂ニ恢復スペカラザルコトアリ。

充分ニ哺乳セシムルトキハ、初乳ハ直チニ永久乳ノ性質ニ變ジ、初乳球ハ甚ダ少數トナル分娩後第三日ヨリ第六日頃ノ間ニハ分泌急ニ増加スルノ感アリ、而シテ盛ニ排出シ得ルモノナリ。

兩側ハ乳房ハ各授乳時必ズ交互ニ哺乳セシメテ、充分ナル排出ニ力ムベシ。

授乳ノ度數 授乳度數ノ一定ハ甚ダ必要ノ事件ナリ、然ルニ屢々乳兒ノ要求ヨリモ多量

ニ供給セラル、場合多ク殊ニ我邦ノ家庭ニ於テ然リトス、母乳如何ニ優良ノ栄養品タ



二ヶ月	七八〇〇
三ヶ月	八二一〇
四ヶ月	八三八〇
五ヶ月	八八三〇
六ヶ月	九〇四〇

瀬川博士ハ自己ノ小兒ニ就テ調査シ、而シテ體重ヲモ併セテ記載シタリ。

第一週	第二週	第三週	第四週	第五週	第六週	第七週	第八週	第九週	第十週	第十一週	第十二週	第十三週(約三ヶ月)
一 日 ノ 哺 乳 量												
體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體	體
一七七〇												
二五四〇	二八一〇	三〇一〇	三三五〇	三五八五	三九八五	四〇三五	四二八五	四七二五	四七〇〇	四七〇〇	四七〇〇	四九六〇
二八一〇	三〇一〇	三〇一〇	三三五〇	三五八五	三九八五	四〇三五	四二八五	四七二五	四七〇〇	四七〇〇	四七〇〇	四九六〇
三〇一〇	三〇一〇	三〇一〇	三三五〇	三五八五	三九八五	四〇三五	四二八五	四七二五	四七〇〇	四七〇〇	四七〇〇	四九六〇
三三五〇	三五八五	三九八五	四〇三五	四二八五	四七二五	四七〇〇	四七〇〇	四七〇〇	四七〇〇	四七〇〇	四七〇〇	四九六〇
三五八五	三九八五	四〇三五	四二八五	四七二五	四七〇〇	四九六〇						
三九八五	四〇三五	四二八五	四七二五	四七〇〇	四九六〇							
四〇三五	四二八五	四七二五	四七〇〇	四九六〇								
四二八五	四七二五	四七〇〇	四九六〇									
四七二五	四七〇〇	四九六〇										
四七〇〇	四九六〇											
四九六〇												

第十四週	八四一〇	五二六〇
	八五〇〇	五三九〇

ツエルニ及ビケルラ Czerny u. Keller 氏ノ調査ニ據レバ、哺乳兒ノ一日平均哺乳量ト體重トノ比較ハ、生後八—十日間ハ甚ダ不整ナルモ、其後若干週乳量ハ體重ノ $\frac{1}{5}$ ニ相當シ、其レヨリ徐々ニ減退シ、第二ヶ月ヨリ第五ヶ月ニ入ル迄ハ $\frac{1}{6}$ — $\frac{1}{7}$ 而シテ第六ヶ月ノ末ニハ $\frac{1}{8}$ ニ達スルナリ。

栄養效果ノ標準ハ偏ニ體重增加ノ狀況ニ依ラザルベカラズ、體重增加ハ母乳栄養兒ニアリテハ漸次ニ上昇スルヲ正規トシ、稍成長シタル六ヶ月乃至九ヶ月ノ乳兒ニアリテハ、一週間ノ增加一五〇乃至二五〇瓦トシ、時トシテハ三〇〇瓦ニ達スルコトアリ、斯ノ如キ體重增加ヲ示サムルトキハ、他ニ疾病ノ存在ナキ限りハ必ズ栄養不給ニ基クモノナリトス。

### 乳母ノ選擇 Auswahl einer Amme

乳母ハ母氏ニ代ハルベキ唯一ノ補助ナリ、乳母ハ乳汁分泌充分ナル健康者タラザルベカラズ、乳汁ノ成分ニ關シテハ、健康婦人ノ各個ニ就テ著シキ差違ヲ見ザルナリ。

乳母ノ攝生法ニ就テハ、已ニ授乳婦ノ攝生法條下ニ於テ述べタルコト、大差ナシ、但シ

乳母ニ充分ナル乳汁分泌ヲ求ムルノ結果、薄弱ナル、乳力弱キ、乳兒ニ多量ノ分泌アル、乳房ヲ與フルトキハ、乳汁停滯ヲ起シ、終ニ分泌不足ヲ來ス、コトアレバ、乳母ヲ選ブニ當リ、其哺乳兒ハ食餌需要量ニ相當スル、乳汁分泌量ヲ具フル者ヲ擇ブベシ。

吾人醫師ノ義務トシテ、乳母選擇ヲ行フ際ニハ、勿論乳母ノ健康狀態ヲ検査スペシ、ビルケー氏反應 Piquet'sche Reaktion ハ陽性ナリトモ、他ノ條件ニシテ満足スルモノアラバ、決シテ不合格ノ理由トナスヲ得ズ、然シ之ニ反シワッセルマン氏反應 Wassermann'sche Reaktion ハ必ず行フベキモノニシテ、若シ陽性ナルトキハ、決シテ採用スペカラズ、微毒ノ有無ニ就テハ乳母ノ子ヲ見ルコト必要ナリ、其子ニシテ一ヶ月以上ノ年齢ナレバ、遺傳微毒ノ症候顯著トナルベキ頃ナリ。

乳母ハ分娩直後ヨリモ、一二ヶ月他ノ乳兒ニ哺乳セシメタル者ヲ以テ適當トス、分娩後一年以上ヲ經過セルハ不可ナリ。

乳汁ノ顯微鏡検査ハ、左程價值ナク、脂肪球ノ大小及ビ員數ヲ云々スルハ愚ノ甚シキモノナリ、然レドモ初乳球ヲ含ムモノ、白血球等異物ノ多量ニ存スルモノハ不良ノ乳汁ト云フヲ得ベシ、茲ニ注意スペキハ、暫時廢乳セシ者ノ乳汁中ニ、往々初乳球ト同一ノ像ヲ示ス、乳球ノ存スルコトアレバ、其際ニハ再び哺乳セシメ、而シテ後ニ判定ヲ下スヲ必要トス。

之ヲ要スルニ、乳母選擇ハ最良標準トシテハ、乳母ハ子ヲ検査スルニ如クハナシ、若シ其ノ子ニシテ一二ヶ月ノ年齢ヲ有シ、微毒、其他疾病ノ兆候無ク、且栄養狀態佳良ナラバ、其母ハ乳母トシテ理想的ノ者ナリ、故ニ乳汁ノ検査等ヨリモ乳母ノ子ヲ見ルコト實ニ肝要ナリトス。

雇傭シタル乳母ハ、乳兒ヲ哺育スルノ外、尙ホ家庭内ノ動作、炊事、洗濯等ノ補佐ヲナサシメ、決シテ安逸ヲ貪ラシムベカラズ、茲ニ人道問題トシテ注意スペキハ、遺傳微毒ヲ有スル乳兒ニ健全ナル乳母ヲ附與スルコト不當然ナリトス。

### 離乳又ハ斷乳 Entwöhnung

健全ニ發達セル乳兒ハ、生後六ヶ月乃至八ヶ月頃ニ至レバ、哺乳ヲ好マザルニ至リ、却ツテ大人ノ食スル物ニ向ヒテ切リニ渴望ス、此時ニ當リ少量ノ鹽分ヲ含メル食物、或ハパンノ如キモノヲ與フルトキハ、乳兒ハ喜ンデ口中にニ入レテ食ヒ、更ニ新ナルモノヲ追求シテ止マズ、乃チ離乳ヲ天啓スル時機到來ニシテ、之ヲ顧ズシテ毫モ副食物ヲ與ヘズ、乳汁栄養法ノミヲ永續スルトキハ、乳兒ハ貧血ヲ呈シ、皮膚ノ色ハ蒼白トナリ、皮下脂肪組織ノ發達不良トナリテ、膨張ヲ缺キ、骨骼ノ發育モ充分ナラザルニ至ル、故ニ吾人ハ離乳ノ時機至ラバ、猶豫スルコトナク副食物ヲ與フベシ、離乳ノ時期ニ關シテハ、六ヶ月乃至

八ヶ月ヲ適當トシ、或ハ誕生以後ヲ適當トナスト云ヘドモ、ツエルニ一氏ハ六ヶ月乃至七ヶ月頃ヲ最モ適當ト云ヘリ、我邦ノ兒童ニアリテモ、七八ヶ月頃ニ至リテ副食物ヲ求ムルモノ多キヲ見ルナリ、故ニ遲クトモ誕生迄ニ離乳ヲ斷行スベシ。

離乳ノ法ハ最初正午ニ一度ヅ、母乳ノ代リニ少量ノ鹽分或ハ鯉節ノ「だし」ヲ加入シタル肉汁 Fleischbrühe 約百瓦ヲ與ヘ、或ハ重湯ト肉汁ト同量ノモノ百瓦ヲ與フベシ、此際ニ用フル肉ハ凝膠シ易キ物質 Leimgebende Stoffe ヲ含メルモノ(犢肉或ハ幼鳥ノ肉)ヲ用フベカラズ、此肉汁ヲ用フルニ先チテ牛乳ヲ試ミ(夏季ハ注意スペシ)之ニ慣レテ後肉汁ニ移ルコトアリ、漸々肉汁又ハ肉汁加入ノ重湯ヲ日ニ二三回ニ増加シ、一二週ヲ經タル後ハ種々ノ野菜(きやべつ)人參、燕はうれん草等ヲ加ヘテ煮タル肉汁ヲ以テ重湯ニ混入スベシ、更ニ時ヲ経レバ重湯ニハ飯粒ヲ混ジ(初ハ一〇〇瓦ニ飯粒二茶匙ノ割合)、漸々濃厚トナシテ薄キ粥ニ及ボスペシ、此頃ニ至レバ米粥ノ他、肉汁ニ諸種ノ穀粉製剤ヲ入レタルモノ Mehluppe、又ハ「パン」ヲ細断シタルモノヲ入レテ與フベシ。

齡一年後ニハ全然離乳セシメ、米粥ノ外、卵黃及ビ小魚ノ肉等ヲ與ヘ得ルニ至ラシムベシ、果物ハ野菜ヲ與フル頃ニ至レバ、煮タル林檎及ビ其ノ「ジャム」様ニ碎キタルモノヲ與ヘテ支障ナカルベシ。

## 第二 人工栄養 Künstliche Ernährung

### 人工栄養ノ方法 Technik der künstlichen Ernährung

#### (一) 牛乳ノ稀釋法 Verdünnung der Kuhmilch

人乳ヲ與フルコト能ハザルトキハ、已ムヲ得ズ、獸乳栄養法ニ依ルベシ、人工栄養ハ障礙ヲ來シ易キヲ以テ、特別ノ注意ヲ拂ハザルベカラズ。

人工栄養モ亦天然栄養ト均シク分娩直後ニハ哺乳セシムルノ要ナク、番茶煎汁ニ「サッカリン」ヲ加ヘタルモノヲ與フベシ。

人工栄養ノ方法 Technik der künstlichen Ernährung

生後一・二ヶ月 牛乳一ト水二ノ割合 $\frac{1}{3}$ 牛乳三分ノ一乳。  
 三ヶ月乃至四ヶ月 牛乳一ト水一ノ割合 $\frac{1}{2}$ 牛乳二分ノ一乳又ハ等分乳。  
 五ヶ月乃至六ヶ月 牛乳二ト水一ノ割合 $\frac{1}{3}$ 牛乳三分ノ二乳。  
 七、八ヶ月以後 牛乳ノ稀釋セザルモノ、全乳ト稱ス。

此牛乳稀釋ハ素ヨリ兒ノ體質、栄養狀態及ビ季節ノ如何ニヨリテ、斟酌ヲ要スルコト勿論ナリトス。

已ニ牛乳ヲ以上ノ如ク稀釋スルトキハ、各成分ニ於テ著シキ栄養價ノ減弱ヲ來スヲ以テ單ニ分量ヲ増大シテ之ヲ補填セントスルモ、過多ノ液量輸送ハ有害ナルヲ以テ實行シ得ザルナリ、而シテ通常之ヲ補フニハ糖類ヲ以テス、普通用ヒラル、ハソクスレット氏滋養糖 Soxhlet'sche Nährzucker' レフルンド氏滋養麥芽糖 Looflund'sche Nährmalzose、ケルレル氏マルツ汁 Keller'sche Malzsuppe 改良リーピッヒ氏汁 Verbesserte Liebigsuppe 等ナリ、之等ノモノハ牛乳中ニ五一八%ノ割合ニ混入セラル。

乳糖或ハ蔗糖ヲ用フルトキハ、牛乳中ニ四一六%ノ割合ニ加フベシ。

カメレル及ビホイプネル氏ノ研究ニ由リ、乳兒ノ體重一軒ニ對シテ一〇〇燃價ノ栄養品ヲ要スト唱ヘラレテ以來、其稀釋ニヨリテ減ジタル燃價ノ不足ヲ補フニ力メテ、他ヲ顧ミザル有様ナリ、近時平井博士ハ栄養液ノ滲透壓ニ注意スペキコトヲ唱ヘタリ、吾人體内ノ組織間液、殊ニ血液ハ常ニ一定ノ滲透壓(〇・八五%生理的食鹽水ト同壓)ヲ有シ、若シ之ニ變異ヲ來ストキハ、或ハ煩渴トナリ、或ハ不快感ヲナシ、時トシテハ栄養障礙ノ原因トナリテ、生理的ナル生活機轉ノ進行ヲ許サムナリ、故ニ乳兒ノ栄養液モ亦血液ト同壓性ノモノナラザルベカラズ、而シテ博士ハ松井氏ノ測定セル血液ト略ボ同壓ノ諸種栄養品ヲ掲ゲタリ。

#### 一五%「ミルクード」液

#### 一四%水飴液

#### 一三%「コンデンスミルク」液

#### 一二%ソクスレット滋養糖液

#### 一一%メリングスフード液

#### 一〇%蔗糖液

#### 九%乳液

#### 七%葡萄糖液

#### 六%蜂蜜液

#### 二/三%ケルレル氏マルツ汁

#### 二/三%改良リーピッヒ氏汁

#### 二/三%ヒギヤマ液

#### 九ヶ月兒用「インファンチナ」液

全乳ハ血液ト同壓ナレバ顧慮スルノ要ナキモ、稀釋乳ヲ用フルニ當リテハ、稀釋液ヲ上述ノ濃度ヲ標準トシテ製セバ、略ボ同壓ノモノヲ得ベシ、此稀釋度ヨリ稍稀薄ノモノヲ用フルハ宜シキモ、濃厚ニ失スルモノヲ用フルトキハ危險ナリ。

#### (二)牛乳ノ量

與フベキ牛乳量ヲ定ムルニハ、各栄養品ノ燃價ヲ知リ、之ニ據リテ適當ニ處理セザルベカラズ。

#### 人乳

#### 牛乳

#### ケルレル氏マルツ汁

#### 一三%煉乳

一〇〇〇ccm

"

"

"

八〇〇"

四三〇"

一〇% 糖液	四〇〇
一〇% ソクスレット液	四〇〇
牛乳 + 8% 滋養糖	五四〇
牛乳 + 8% 滋養糖	六七〇
牛乳 + 5% 穀粉煎汁 + 6% 乳糖	七八〇
牛乳 + "	四〇〇
牛乳 + "	四六〇
牛乳 + "	五二五
"	四〇〇
"	四六〇
"	六七〇
"	七八〇
"	四〇〇
"	四六〇
"	五二五
"	六七〇
"	七八〇
"	四〇〇
"	四六〇
"	五二五

而シテ是等ノ「カロリ」價ニヨリテ適當ノ牛乳及ビ糖分ヲ規定スベシ、其他ニ乳兒ハ一千瓦ノ體重ニ對シテ一五〇—二〇〇瓦ノ水ヲ要スルコトヲモ顧慮セザルベカラズ。實地ニ當リテハ乳兒一日間ノ哺乳量、滿一ヶ月約六〇〇耗満、二ヶ月約七〇〇耗満、三ヶ月約八〇〇耗ヨリ兒ノ月齡進ムニ準ジテ增量シ、千二百耗ヲ以テ限度トナスベシ。

### (三) 授乳ノ度數

天然榮養兒ト大差ナク、一日五回乃至七回ヲ以テ至當トス。

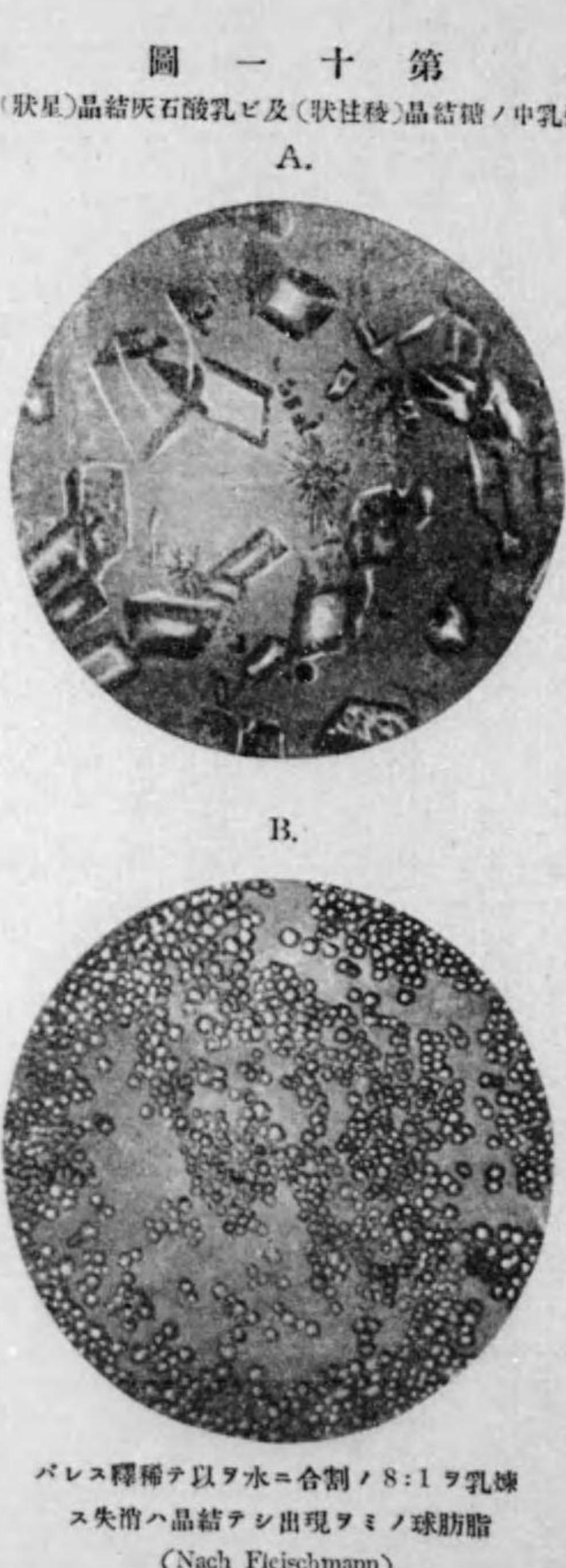
### (四) 牛乳製品及ビ加工牛乳

(イ) 煉乳 Kondensierte Milch (Condensed milk) 糖分甚ダ多キニ失シ、又ビタミンヲ缺キテ、牛乳榮養品トシテハ不適當ノモノナレドモ、已ムヲ得ザルトキハ使用スルコトアリ、我

邦ニテハ瑞西國及ビ米國ヨリ輸入スルモノ用ヒラル米國製鷺印、瑞西國製巢中小鳥印及ビ人形印最モ愛用セラル。

米國製鷺印(田原氏)藥學雜誌第八八號

水	三一・三三%	蛋白質	八・三九%
脂肪	九・四六%	糖	四八・九四%
鹽類	一八八%		



煉乳ハ過多ノ糖分ヲ含有ス、故ニ之ヲ以テ小兒ヲ榮養セント欲セバ甚ダ稀薄ノモノヲ用フベシ、而シテ此ノ稀釋ハ容積ニテ十二倍ヨリ濃厚ナルモノヲ用フベカラズ、又二十

二倍ヨリ稀薄ナルモノヲ用フルヲ要セズ。

一一三ヶ月 二十二乃至二十倍

四一六ヶ月 二十乃至十八倍

七一十ヶ月 十七乃至十二倍

(ロ) 脱脂乳 Magermilch 器械的ニ「ラーム」(脂肪)ヲ去リタル牛乳ニシテ、遠心器或ハ脂肪分離器ヲ用ヒテ三十分钟間攪拌スベシ、屢々小兒栄養障礙ニ用フ、脂肪ヲ含有スルコト平均一%ナリ。

(ハ) バタ牛乳(牛酪乳) Buttermilch 古ヨリ和蘭ニ於テ用ヒラレ、現今歐洲ニ於テモ使用セラル、全乳ヲ冷温ニテ二十四時間放置シ、上層ニ集マレル乳脂ヲ去リ、次デ乳酸菌培養 Milchsäurebakterienculturヲ加ヘテ乳酸醣酵ヲ起サシメ、乳汁ノ凝固ヲ始ムルニ及ビ、之ヲ或ル方法ヲ以テ攪拌シ(振盪シ或ハ遠心装置ニ依リテ)、脂肪ヲ分離セシメテ製シタル殘留物ナリ、而シテ乳酸醣酵ノ爲ニ酸味ヲ帶ビ、乳糖ハ分解セラル、ガ故ニ、含水炭素ニ乏シキ牛乳ナリトス。

(ニ) ビーデルト氏乳脂混和物 Biedert's Rahmgemenge 之ハ牛乳ヲ稀釋シテ生ジタル脂肪ノ不足ヲ補ハム爲メ乳脂ヲ加ヘ、尙ホ加糖セルモノナリ。

(ホ) ゲルトネル氏脂肪乳 Gärtner'sche Fettmilch 牛乳ト水ト乳糖トヲ混ジ、遠心器ニ依リテ製シタルモノナリ、脂肪ハ11—11.5%ニシテ、人乳ト化學的成分殆んど等シキモノナリ。

ナリ。

(ヘ) バックハウス牛乳 Backhausmilch 「ユリップシン」或ハ「ラップ」ヲ以テ蛋白質ヲ消化性トナシタルモノナリ。

(ト) ヴォルトメル氏母乳 Voltmer's "Muttermilch" 腺臓ヲ以テ乾酪素ヲ「ベブトン」化シタル牛乳ナリ。

(チ) レフュンド氏ベブトン化乳 Loefflund's peptonisirte Milch 「ペブシン」ヲ以テ「ベブト

第  
十  
二  
離  
脂  
器



(リ) モンチー氏法 牛乳ヲ稀釋スルニ、水ヲ用ヒズシテ乳漿ヲ用ヒタルモノナリ、是等ノ製品ハ汎ク使用スルニ足ルモノ渺ナシ。

## (五)牛乳ニ加入スル含水炭素

含水炭素ハ近時盛ニ研究セラレ、健康ナル哺乳兒ニアリテモ、榮養障礙ノ哺乳兒ニアリテモ、甚ダ重要ノ事項ニ屬スルヲ以テ、吾人ハ茲ニ特別ノ條目ヲ設ケテ述ブル所アント欲ス。

含水炭素ハ新陳代謝上、如何ナル作用ヲ營ムヤト云フニ、  
一、體重ハ增加ヲ來ス、蛋白ト脂肪トノミヲ増スモ、決シテ體重ノ增加著シカラズ、含水炭素ヲ加フルニ至リテ初メテ著シ。

二、水分停滞ニ缺クベカラズ、穀粉榮養障礙ノ時ニ浮腫ヲ生ズルハ之ニ因ル、水分蓄積ノ因ハ、糖ガ「グリコゲント」ナル際ニ、其重量ノ二三倍ノ水ト結合スルガ故ナリ。  
三、體温調節ニ關係アリ、含水炭素ニ乏シキ食餌ヲ與フルトキハ鹽熱 Salzfeber ニ類似スル、糖熱 Zuckerfeber ヲ招致ス、之レ分ニ富ムモノヲ與フルトキハ鹽熱 Salzfeber ニ類似スル、糖熱 Zuckerfeber ヲ招致ス、之レハ腸内ノ醣酵機轉ニ因ルナルベシ、然レドモ主因ハ含水炭素ノ體温調節機能ニ關係アルガ爲メナラム。

四、主トシテ「エネルギー」ノ目的ニ使用セラル。

五、蛋白ヲ體内ニ蓄積セシムル作用アリ。

六、脂肪ノ新陳代謝ヲ完全ナラシム。

七、腸内ニ於ケル醣酵機轉ハ大便ノ硬度ヲ柔軟ニス、故ニ便祕ニ惱ムトキハ含水炭素ノ量ヲ多クスベシ。

吾人ガ哺乳兒榮養ニ使用スル含水炭素ハ次ノ如シ。

單糖類(葡萄糖) Traubenzucker od. Glykose

果糖 Fruchtzucker od. Laevulose

乳糖(=葡萄糖+「ガラクトーゼ」) Milchzucker od. Laktose

複糖類(麥芽糖)(=葡萄糖+葡萄糖) Malzzucker od. Maltose

蔗糖 Rohrzucker od. Saccharose

(澱粉(穀粉)) Stärke (Mehl)

多糖類(糊精) Dextrin

(纖維) Zellulose

就中主ニ使用セラル、モノハ麥芽糖、蔗糖及ビ乳糖ナリ、澱粉ハ穀粒及ビ穀粉トシテ使用セラル。

麥芽糖製劑ノ中最モ使用セラル、モノハソクスレット氏滋養糖 Soxhlet's Nährzucker 及ビレフュンド氏滋養麥芽糖 Löflund's Nährmaltose ニシテ、共ニ麥芽糖及ビ「デキストリン」ヲ以テ主成分トス、其他リーピッヒ氏「マルツ」汁 Liebig's Malzsuppe モ亦用ヒラル、之ヲ要スルニ麥芽糖ハ同化限高ク、且醣酵スルコト少ナキヲ以テ賞用セラレ、乳糖ハ同化限低ク、且吸收遲ク、容易ニ下痢ヲ起スノ恐レアルヲ以テ、汎ク用ヒラル、ニ至ラズ、蔗糖モ亦醣酵

シ易キモノトシテ、幼少ノ乳兒ニハ用ヒラル、コト少ナシ、單ニ甘味ヲ附スル爲メ用ヒラル、コトアレドモ、寧ロ「サッカリント」ノ安全ナルニ如カザルガ如シ。  
含水炭素ノ中、可溶性ノ單糖及ビ複糖ノ如キモノヲ第一、含水炭素 *Erste Kohlenhydrat* ト稱シ、不溶性ノ多糖類ナル澱粉及ビ穀粉ヲ第二含水炭素 *Zweite Kohlenhydrat* ト稱ス。  
第一含水炭素ニ關シテハ前來聊カ述ベタル所アルヲ以テ、以下第二含水炭素ニ就テ細說スベシ。

吾人ガ糖類ヲ第二含水炭素トシテ使用スルニ、二種ノ法アリ、一ハ穀粒煎汁或ハ粘滑汁、Schleimトナシ、他ハ穀粉煎汁、Mehlabkochungトナス、粘滑汁トハ穀粒ノ煎汁ニシテ、主ニ三ヶ月以内ノ乳兒ニ用ヒ、穀粉煎汁ハ四ヶ月以後ノ小兒ニ用ヒラル、兩者ノ目的ハ普通栄養法ヲ以テスルモ、猶且體重增加ヲ來サルトキ、牛乳ヲ稀釋スル水ニ代ヘテ、相當濃度ノモノヲ加フルナリ。

粘滑汁ニ使用スル穀類ハ米、麥、燕麥等ニシテ、穀粉煎汁ニハ小麥粉、大麥粉、燕麥粉、玉蜀黍粉(モンダミン)等ヲ使用ス。

此等ノ穀粉ハ一般ニ礦質含量ニ乏シキヲ以テ、三・十五%ハ割合ニ食鹽ヲ混ジテ使用スベシ。

粘滑汁ノ製法ハ、穀粒ニ一定ノ割合(○・五~三%)ニ水ヲ混ジ、弱キ火ニテ一時間煮沸シ、ガゼニテ強ヒテ壓ヲ加フルコトナク濾過ス、此濾過液ハ即チ粘滑汁ナリ。

穀粉煎汁ハ穀粉ニ最初少シグ、ノ微温湯ヲ加ヘテ攪拌シ、一定ノ濃度(即チ三~四%)トシ、約二十分間煮沸シテ其儘牛乳ニ混ズルナリ。

牛乳ヲ稀釋スルヤ、水ノ代リニ	第二含水炭素ヲ混入スルトキハ、其濃厚度次ノ如シ	濃度ノモノ
第一ヶ月	粘滑汁	○五%
第二ヶ月	同	一〇~一〇%
第三ヶ月	同	一五~三〇%
第四ヶ月~第六ヶ月	穀粉煎汁	二〇~四〇%

吾人ノ普通用フル重湯ハ一ノ粘滑汁ナリトス。

稀釋煎汁ト稱スルモノハ、冷却スルモ凝固セズシテ流动狀態ヲ保ツ穀粒煎汁ヲ云フ。  
粘滑汁ト穀粉煎汁トノ區別ハ後者ハ前者ニ比シテ含水炭素且植物蛋白ノ含量ニ富ムナリ。

穀粉製劑ニハ種々ノモノアリテ、何々小兒粉ト稱スルモノ皆是ナリ。

クノル氏燕麥粉 Knorr'sche Hafermehl 五%可溶性含水炭素「デキストリン」ヲ含ム。

二重燒麵粉 Zwieback「デキストリン」カルシウム及ビ磷酸鹽ヲ含ム。

タインハルト小兒榮養品 Theinhardt's Kindernahrung 五三六%可溶性、一六七%不溶性ノ

含水炭素ヲ含ム。

ネスル小兒粉 Nestle's Kindernehrli 四一五%可溶性、三五二%不溶性ノ含水炭素ヲ含ム。

クフェーケー小兒粉 Kuféke's Kindermahl 111・五%可溶性、五一〇%不溶性ノ含水炭素ヲ含ム。

「メリンスフード」 Mellin's food, 「ミルクフード」 Milkfood, 「ヒールドコルン」 Goldkorn 等世ニ行ハル。

### 第三 混合栄養法 Allatementmixte od. Zwischenmilchernährung

母乳ノ不足ヲ告グルトキ、補フニ牛乳ヲ以テスルハ已ムヲ得ザルニ出づ、之ヲ行フニ二様アリ、一ハ人乳ト牛乳トヲ交互ニ與ヘ、一ハ同時ニ與フルナリ、母氏ノ乳汁分泌量ガ兒ノ一回ノ食餌需要ヲ充タシ能ハザルトキハ、後者ヲ選ブベキモ、普通ハ母乳六回ヲ與ヘタリシモノヲ、五回或ハ四回トナシテ、其他ハ牛乳ヲ以テ補フ、又母乳分泌量甚ダ僅少ニシテ大部分牛乳ヲ與ヘザルベカラザルトキハ、夜間ノ哺乳ノミハ母氏ノ乳房ニ賴ルベシ、只注意スペキハ乳齶ヨリ哺啜セシムルヤ、乳汁容易ニ口ニ入ルヲ以テ、漸々乳房ヲ嫌フニ至リ、爲ニ母乳分泌量減退シ、畢竟スルニ純然タル人工栄養ニ依ラザルベカラザルニ到ルコトアリ、故ニ乳齶ノ護謙管ニ壓ヲ加ヘテ加減シ、又ハ乳嘴ノ孔ヲ小ニシテ乳汁ノ流出ヲ幾分カ困難ナラシムル様ナスベシ。

## 第五章 小兒ノ診察法及ビ小兒病ノ診斷

Untersuchungstechnik u. Diagnostik der  
Kinderkrankheiten

稍年長ノ小兒ヲ診察スルハ、大人ノ診察ト大差ナキモ、年少ノ小兒、殊ニ哺乳兒ノ診察ニ至リテハ多少ノ熟練ヲ要ス、如何トナレバ小兒ハ言語セズ、又タ絶エズ不安狀態ヲ以テ抵抗スルニ因ル、尙ホ病歴ヲ知ラムト欲スルモ、母氏及ビ乳母等ハ云フ所ハ自己ハ觀察及ビ判断ヲ加味スルヲ以テ、決シテ正當ヲ期スベカラズ、是レ實ニ小兒ノ病勢ヲ知ルニ苦シム所以ナリ、故ニ病歴ヲ尋ヌルヤ、母氏及ビ乳母ヲシテ駆辯ヲ弄セシメズ、寧ロ醫師ハ問ニ對シテ然リ、或ハ否ト答ヘシムルニ如カズ。先づ年齢ヲ尋ヌルハ必要ナリ、之ニ由リテ身體及ビ精神ノ發育果シテ適當セルヤ、否ヤヲ知リ得ベシ。

哺乳兒ニ就テハ必ズ栄養法及ビ栄養障礙ノ存否ヲ糺スコトヲ忘ルベカラズ、家族關係ヲ尋ヌルニ當リテ、特ニ注意スペキハ微毒、結核、血液病惡液質、神經病的素質ノ有無ヲ調査スルコトナリ。

患兒ノ從來經過セシ疾病ヲ聞クヤ、長時日ニ亘レル消化障礙、麻疹、疫疾、「インフルエンザ」等ヲ經過セシコトアリヤ、否ヤヲ問フベク、殊ニ麻疹及ビ疫疾ハ結核ト大關係ヲ有スル

ヲ以テ、決シテ輕々ニ看過スベカラズ。

### (一) 一般ノ疾病徵候 Allgemeine Krankheitszeichen

發熱、不機嫌、食思缺損持続的嘔泣、痙攣、口渴不眠及ビ睡眠不安、羸瘦、發育障礙ノ狀態ヲ知悉スベシ。

小兒ノ診察ハ幼稚ナル哺乳兒ニ就テハ比較的容易ナルモ、一年以上ノ小兒ハ診察ヲ行フニ反抗シテ、不安及ビ興奮狀態ヲ呈シ、呼吸脈搏及ビ體溫ノ真相ヲ誤ラシムルコトアリ、故ニ小兒ハ成ル可ク母氏ノ腕ニ抱カシメ、或ハ其膝ニ横ハラシメ、一瞥シテ先づ聽診ヲ行ヒ之ヲ終リテ打診ヲ爲スベク、決シテ最初ヨリ小兒ノ嫌厭スル操作ヲナシ、例之器械ヲ以テ咽喉ヲ検査スルガ如キコトアルベカラズ、正確ナル脈搏及ビ呼吸數ヲ知ラムト欲セバ、患兒ノ睡眠中ヲ擇ブベシ、聽診及ビ打診ニ際シ顔貌、身體ノ姿勢、不隨意運動ノ狀態、皮膚ノ色澤、榮養狀態等ハ一見以テ其要所ヲ獲得スベキナリ。

小兒ハ姿勢及ビ運動ニ關シテハ、初生兒ニアリテハ子宮内ニ於ケルガ如ク屈縮姿勢ヲ取り、健康ナル哺乳兒ハ背位ニ於テ上肢ヲ内轉シ、肘關節ヲ屈曲シ、下肢ヲ少シク縮小ス、而シテ醒覺時ニ上下肢ヲ活潑ニ運動スルヲ恒トス。若シ此ノ如キ隨意運動ノ全然缺如スルカ、或ハ遲々タルガ如キコトアラバ、生下一週以後ノ小兒ニアリテハ、必ズ病的ニシテ、何等カ身體ノ異常ニ想到セシムルナリ、例之生下二ヶ月以後ノ小兒ニシテ、活潑ナル四肢運動ノ缺損スルモノアラバ、白癡ノ如キ精神發育異常ノ存在ヲ疑フベシ、醒覺時及

ビ睡眠時ニ於テ非常ノ不安運動アラバ、幼若ナル小兒ニアリテハ不適當ナル榮養法疼痛感覚(耳炎、痛痛利尿疼痛、間擦性濕疹、佝僂病、バルロー氏病)、皮膚痒感、發熱ノ存スル徵ニシテ、更ニ顯著ノ不安狀ヲ示スモノハ、高度ノ呼吸困難(喉頭狹窄)、心臟麻痺ノ初期敗血膜毒性機轉、腦膜炎、癲癇狀態、尿毒症ノ際ニ於ケルガ如シ、睡眠不安ハ生長セル小兒ニアリテハ、神經系統ノ興奮ヨリ起ルコト頻々ナリ、臥牀ニ於ケル體位モ亦診斷ノ補助トナルコトアリ、肋膜滲出液アルトキハ絶エズ側位ヲ採ル、不動ノ背位ニ於テ下肢ヲ多少屈曲スルハ、急性腹膜炎ニ於テ見ラレ、脊椎「カリエス」、腸寄生蟲ノ爲ニ腹痛アルトキハ、腹位ヲ取ルコト往往アリ、又苦悶ノ狀態ニ於テ強直ノ位置ヲ取ルハ、脊椎關節ニ於テ多發性關節炎ノ存スル證ナリ、佝僂病ノ病勢旺盛ナル時期ニアリテハ、患兒ハ決シテ靜止セズ、擁スレバ劇烈ナル疼痛ノ爲ニ號泣シ、母親ノ腕ニ在リテモ不安狀ヲ呈スルモノナリ、頭ヲ後方ニ曲ゲテ端坐スルハ喉頭狹窄ノ際ニアリ、頭ヲ後屈シ且ツ足ヲ曲ゲテ横ハルハ、腦膜炎及ビ脳水腫患者ニ見ル狀ナリ、項部強直アリテ腦膜炎ナラザルモノハ、頸椎「カリエビ」齒痛アルトキハ口中ニ指ヲ入レテ摘ムコトアリ、又腦膜炎ニ罹レル患兒ハ屢々陰部ニ手ヲ觸ル、コトアリ、膀胱結石アルモノハ陰莖包皮ヲ摘ムコトアリ、腸室扶斯ノ病兒及ビ蛲蟲ヲ有スル者ハ屢々指ヲ鼻腔ニ入レテ旋廻ス。

### (二) 榮養狀態及ビ體格 Ernährungszustand u. Körperbau

先づ骨格ノ發育、筋肉及ビ皮下脂肪組織ノ狀態ヲ顧ミテ判定セザルベカラズ、脂肪組織ハ哺乳兒ニ於テ良ク發育セルモノニシテ、殊ニ腹部、臀部、上腿ニ於テ爾リ、上腿ニ於テハ定型的ノ對照セル横皺アリテ、前内方ヨリ後方ニ向テ上腿ヲ包圍スルヲ見ル、之ヲ内轉筋皺襞 Adductorenfalten Cohnト云フ、其他鼠蹊下部、脣部、前膝膚部等ノ皺襞ヲ存シ、哺乳兒ニ於テ是等横皺ノ缺如セルハ、榮養不給又タ障礙ノ存スル證左トス、扁瘦セル小兒ニアリテハ、是等定型的ノ横皺ノ他ニ、不規則ナル縱橫ノ皺裂ヲ生ズルヲ例トス、然リト雖モ精密ニ榮養狀態ヲ判断セントセバ、須ラク重量及ビ尺度測定ニ據ラザルベカラズ。

若シ體重計ヲ以テ精確ニ小兒ヲ測ラムト欲セバ、必ズ空腹時ヲ擇ブヲ至當トス。

體重曲線ハ人工榮養兒ニアリテハ、天然榮養兒ト大ニ趣ヲ異ニシ、初期ニ於テハ徐々ニ上昇シ、然ル後ニ或ハ停止シ、或ハ下降スルコトアリ、上昇モ漸次ヲ以テセズシテ飛跳的ノ傾向ヲ有ス、人工榮養兒ニシテ體重ノ增加ヲ示サザルモノハ、不合理ナル榮養法ニ基クモノニシテ、斯ノ如キ榮養障礙ハ更ニ他症狀ニ依リテ知リ得ベキナリ。

消化機能普通ニシテ食物モ亦之ニ適ヒ、而カモ重量增加ヲ來サムルハ先天黴毒、佝僂病、

結核ノ患者ニ屢々見ル所ナリ、齒牙發生ハ健康ナル小兒ニ於テ體重增加ニ影響ヲ及ボス

コト渺シ。

異常ノ重量過多ヲ示スモノハ、人乳榮養兒ニ見ル脂肪過多症 Adipositas ニシテ、急劇ナル重量増加ハ、榮養過剰ノ牛乳榮養兒ニ屢々之アリ、主トシテ水分停滞ニ因スル者ナリト云明ヲ認ムル者ナレドモ、哺乳兒結核ニ於テハ必ズシモ然ラザルガ如シ。

發育ノ停止シテ進マザルトキハ、乃チ佝僂病、遺傳黴毒、粘液水腫、骨軟化症、蒙古人種様痴呆、心臟瓣膜障礙、甲狀腺疾患、肝臓及ビ睾丸疾患ノ存在ヲ疑フベシ。

### (三) 皮膚 Haut

皮膚ノ著色 初生兒ニアリテハ普通瀰漫性ノ紅色ヲ呈シ、殊ニ紅色著シキトキハ初生兒紅斑ト稱セラル、健康ナル哺乳兒ニアリテハ淡キ薔薇紅色ヲ帶ブルヲ常トス。

蒼白色 種々ノ一時性血液分布不調和ニテ起ルモノニシテ、徹照光線ヲ以テ耳殻ヲ透見スルヲ検査ノ良法トス、高度ナル蒼白ハ屢々人工榮養兒原發性血液異常萎黃病ニハ帶綠色ニシテ、白血病ニハ蠟色ナリ及ビ續發性貧血、佝僂病、結核、黴毒、胃腸病、腸寄生蟲、心臟疾患慢性腎臟病、急劇ナル身體發育、出血後等ニ見ル。

皮膚發赤 多少ノ瀰漫性發赤ハ發熱、興奮、殊ニ猩紅熱ニ見ル、限局性ノモノハ結核患者ノ惡液質赤頰、間擦性濕疹等ナリ、斑狀發赤ハ發疹性傳染病ニ就テ見ルモノトス、不規則ナル境界劃然タル斑點ノ麻疹樣形態ヲ有スルモノハ、麻疹或ハ風疹ニ非ザレバ、藥疹若クハ血清疹ナリ、又更ニ非定型的猩紅熱トモ考フベシ、點狀ニシテ瀰漫性ナルハ、猩紅熱ノ他ニハ血清疹、藥疹、發汗シ易キ小兒及ビ佝僂病兒ニ見ル所ノ汗疹ナリ、銅赤色斑點状、發疹ハ先天黴毒ニ見ル所ナリ、不規則ナル融合セル赤色ノ大發疹ニシテ、四肢ノ伸展面

ニアルモノハ多形性滲出性紅疹ナリ、其他紫斑病及ビ出血性素質原發的血液病、敗血膜毒性疾病、黴毒、中毒及ビ外傷ノ際ニハ出血斑ノ現ハル、コトアリ、皮膚ハ暗紫色(チア)、ビ粟粒結核ノ際ニ於ケル呼吸又循環ノ障礙ニ基クモノナリ、局所充血及ビ出血ニ因スル皮膚變色ハ、屢々長時日ニ亘リテ、色素沈著ヲ貽スコト多シ、皮膚ノ色ヲ見ント欲セバ、須ラク患兒ノ安靜ナル時ニ於テナスペシ、啼泣シ不安ナルトキハ容易ニ鬱血ヲ起シ、チアノ一ゼラ來スコトアリ、又哺乳兒ニ於テハ皮膚ノ菲薄ナルヲ以テ、罨法、綃帶藥物塗擦ヲ行フトキハ、容易ニ反應ヲ起スコトヲ知ラザルベカラズ。

初生兒ノ黃疸性皮膚色、中等度ノモノハ初生兒黃疸ニ見ル所ノ生理的現象ナレドモ、高度ニシテ重キ全身症狀ヲ兼ネタルモノハ、敗血膜毒性機轉カ、或ハ膽道ノ異常ニ基ク膽汁鬱滯ナルカ、或ハ先天性肝黴毒ナラザル可カラズ、稍年長ノ小兒ノ黃疸ハ、ワイル氏病、加答兒性黃疸、傳染病ノ初期又經過中ニ發現スルコト多ク、稀ニハ器械的膽汁鬱滯膽道ノ填塞及ビ壓迫ニ起リ、尙ホ鬱血肝、肝硬化症、脂肪變性、急性黃色肝萎縮、中毒ノ際ニ來ルコトアリ。

皮膚ノ黃褐色、或ハ銅色ノ著色ハ重症榮養障礙、赤痢、麻拉里亞等ニ由ル惡液質及ビ副腎疾患(アチソン氏病)ニ見ルモノナリ。

皮膚剥落 生理的皮膚剥落 Physiologische Hautabschaffung 生後第二週ニ於テ來ルモノハナ

リ、又廣汎ナル範圍ニ於テノ落屑ハ、發疹性傳染病ニ於テ見ルモノニシテ、猩紅熱ニ於テハ特有ノ薄屑狀ヲナシ、麻疹、腸窒扶斯丹毒ニ於ケルモノハ寧ロ糠皮狀ヲナス、大ナル皮屑ニ於テ落屑スルハ剝脱性皮膚炎ナリ、先天黴毒ニ於テハ之ヲ手掌及ビ足蹠ニ見ル、其他先天性魚鱗癖、鱗屑疹、剪髮性飼行疹、落屑性濕疹ニ於テモ亦落屑アリ。

著明ナル發汗 乳兒ニ就テハ溫暖ナル衣服及ビ寢具ヲ與フレバ、非常ニ發汗シテ、病的發汗ニ非ザルヤフ、疑ハシムルコトアリ、其他注意すべきハ、尙僕病ノ一重要ナル早期症候トシテ屢々發汗ヲ認メ、又バルロー氏病ニ甚シキ發汗ヲ見ルコトアリ、結核ニハ盜汗ト稱シ、就褥後ニ於テ非常ナル發汗アルハ、世人ノ熟知スル所ナリ、腦脊髓疾患ノ際ニモ發汗アリテ、彼ハイネ、メダン氏病ノ急性期ニ於テハ主要症狀ノ一ト認メラル、ガ如シ。

皮膚膨張狀態 哺乳兒ノ皮膚ハ彈力ニ富ミ、滑澤ニシテ濕潤ス、若シ多量ノ體液消失(下痢及ビ消耗性疾病ノ結果)アレバ、此特有ノ膨張ハ忽チ失ハレテ醜形ヲ呈スルニ至ル、又初生兒硬皮症アルトキハ皮膚ハ硬化ス、黴毒ニ於テハ手掌及ビ足蹠ノ皮膚ハ浸潤(同時ニ發赤及ビ輕度ノ剥屑アリ)シテ光澤ヲ帶ブルヲ見ル、若シ皮膚ニ水腫アレバ、鞞軟<sup>ヒダリ</sup>、weichトナル、是レ腎臟炎ニ發現スルハ勿論ナレドモ、哺乳兒ニ就テハ敗血性疾患、內臟黴毒、肺及ビ腸胃ノ重症疾患ニ於テ現ハレ、更ニ食餌ノ鹽類成分過剩ナルトキハ、所謂水分停滞ヲ起スコト屢々アリ、又時トシテ諸種ノ血液異常、出血性素質、心臟衰弱、惡液質狀態、腎臟機能不全、歇斯的里、バセドウ氏病及ビ傳染病ノ經過中ニ見ルコトアリ、局處性水腫ハ

初生兒期ニ於テ生理的トシテ耻骨部及ビ脣部ニ發現ス、是レ分娩機轉ニ由ル淋巴液鬱滯ナルヲ以テ、暫時ニシテ消失スルヲ常トス、下肢ニ水腫ノ生ズルコトアルハ、腫瘍又ハ腹水ニ依リテ腹靜脈ノ壓迫セラル、爲カ、或ハ痘撲及ビ麻痺ノ爲ニ來ルモノナリ、又小兒ニハ一時性ニ血管神經病性水腫ノ現ハル、コト稀ナラズ。

皮膚氣腫 頭部及ビ胸廓部ニ於テハ、外傷ニ因リテ皮下組織ト連絡スル呼吸器官ノ接續離斷アルトキニ起リ、之ニ觸ルレバ捻髪音ヲ發スルコトニ依テ水腫ト區別シ得最モ多ク見ルハ氣管切開ノ創傷部附近及ビ肋骨々折、疫咳、氣管枝肺炎及ビ格魯布ニテ劇烈ナル咳嗽ヲナストキニ起ルナリ。

皮膚發疹 繼發的現出ハ内因的及ビ外因的ニヨル尋麻疹ノ如キモノ多シ、其他屢々小兒ニ見ルモノヲ舉グレバ、發疹性傳染病ノ尋麻疹様苔癬、即チ「ストロフルス」、微毒性發疹、水疱性發疹物(水痘、匐行疹、微毒性水痘疹等)、膿疱疹(エクティーマ)、瘡瘍及ビ膿瘍等ナリ。

皮膚瘙痒 佝僂病(ストロフルス)、濕疹、痒疹、疥癬、黃疸、糖尿病、發疹性傳染病ノ發疹期ニアリ。

尚ホ皮膚ニ於テ注意ヲ要スルハ、毛細管擴張色素性痣及ビ疣贅等ナリトス。

#### (四) 顔貌 Gesichtsausdruck

幼少ナル哺乳兒ノ感情發表ハ著明ナラズシテ、吾人ハ微笑ヲ以テ唯一ノ標準トス、微笑

スルトキハ満足シ、然ラザルトキハ不滿ヲ推測シ得ルニ止マルナリ。

顔貌ノ視診ハ年少ナル小兒期ニ於テ最モ價值アリ、新鮮ナル炎症性疾患例之肋膜炎、肺炎、心囊炎、腹膜炎等ニ於テハ、疼痛アル如ク歪ミタル顔容ヲ爲シ、喉頭性及ビ心臟性呼吸困難ノ際ニハ、苦悶アルガ如キ顔容ヲ示スヲ通例トス、急劇ナル顔貌變化ハ乳兒ニ於ケル水分損失小兒コレラ及ビ削瘦症ニ之ヲ見ル、即チ嘗テ丸カリシ口唇ハ薄クナリ、顔面皮膚ニ皺襞ヲ生ジテ老人ノ如キミーラ様容貌ヲ成ス。

小兒ニ於テ重症ノ腹部疾病アルトキハ外貌空虚トナリ、鼻梁尖銳、眼窩陷没、角膜光澤ヲ失ヒテ眼瞼運動ヲ缺キ、口唇蒼白トナリ、所謂ヒボクラース容貌ヲ呈ス。

#### (五) 哭泣、咳嗽 Geschrei u. Husten

亦注意スペキ必要ノ事項ナリ、腦膜炎ニテハ突然ニ聲高ク悲鳴ヲ舉グルコトアリ、之ヲ腦水腫性號泣 Cri hydrocephaliqueト稱ス、又乳兒脚氣ノ患者ハ一種特有ナル呻吟ヲナシ、聲音嘶嗄ヲ以テ特徵トス。

#### (六) 眼、耳、鼻 Augen, Ohren u. Nase

小兒病ニ特異ノ症狀ヲ現ハスコトアリ、乳兒ニシテ不明ノ發熱、アル者ニハ、往々中耳炎、ヲ見ルコトアレバ、殊ニ注意シテ耳ヲ検査スベシ。

#### (七) 口唇 Lippen

先天微毒性ノ龜裂及ビ丘疹等ヲ注意スペシ。

## (八) 口腔 Mundhöhle

口蓋破裂、頬粘膜ニ於ケル丘疹、麻疹ノ前驅期ニ於ケルコブリック氏斑等ハ看過スベカラズ。

第十三圖 地舌圖



齶口瘡ノ有無、舌苔等ハ必ず検査スベシ、滲出質小兒ニ於テハ舌上ニ滲出物ノ不規則ナル形態ヲ生ズルコトアリ、特ニ之ハ地舌、Landkartenzunge, Lingua geographica ト名ク、其他舌繫帶ニ於ケル潰瘍形成ハ痰咳ニ屢々見ルモノナリ。

## (九) 咽頭 Rachen

小兒科醫ノ必ズ検査スペキ部位ニシテ、咽頭ニ存在スル疾病ヲ看過スルガ如キハ、蓋シ小兒科醫トシテ、價値ヲ下グモノナリ。咽頭検査ハ初心ノ士ニハ稍難事ニ屬スレドモ、熟練スルトキハ容易ニ行フヲ得。幼少ナル小兒ハ啼泣セシメ、或ハ鼻ヲ摘ムトキハ必ず口腔ヲ開ケドモ、年長ノ小兒ハ故意ニ抵抗シ、容易ニ開口ヲ肯ゼザル者アリ、斯ノ如キ際ニハ舌匙ヲ少シヅ、歯列ノ間ニ插入シ、漸々以テ舌背ノ中央ニ送リ、遂ニ舌根ノ附邊ニ達セシメ、俄ニ匙尖ニ力ヲ加フレバ、反射的ニ咽頭ノ絞縊運動ヲ起シテ忽チ開口スベシ。

## (十) 淋巴腺系統 Lymphdrüsensystem



(nach Hecker)

触診ニヨリテ其状態

ヲ検査スベシ、結核性ノモノハ最モ多ク頭腺ニ於テ現ハル、顎下腺腫脹アラバ悪性實扶的里、猩紅熱、ルードウイッヒ氏安魏那等ノ關係ヲ忘ルベカラズ。

(十一) 胸部ノ検査 Untersuchung der Brust

organe

普通小兒ノ胸廓形狀ハ前述ノ如クナレドモ、病的異形ノ中最モ多キハ、歐洲ニ於ケル仰

僕病性ノモノナリ、即チ鳩胸、龜背及ビ肋骨ニ見ル結節状突起等ニシテ、漏斗状胸モ亦屢之ヲ見ル、肺癆性體格 Habitus phthisicus ト稱スルモノハ、胸廓上下徑ニ於テ長ク、前後徑ニ於テ扁平ニシテ肋間腔廣ク、季肋弓ノ角度狭小ナル胸ヲ指ス、樽狀胸廓ハ氣胸及ビ痰咳ノ患兒ニ稀ニ見ルコトアリ、其他胸廓ノ異形ハ肋膜炎等ニ於テ見ルナリ。

心臟 心臟ハ心尖搏動、哺乳兒ニ就テハ通常不分明ニシテ、第四肋間腔ニ於テ乳嘴腺ノ外方一一二仙迷ノ處ニ微ニ觸ル、ヲ得、年齢ヲ問スルニ從ヒ明瞭トナリ、位置モ亦變ジ、二三ヶ年ニ至レバ第五肋間ニ來リ、益中央線ニ接近スルニ至ル。

心臟ノ濁音界 哺乳兒ニ於テハ其境界真ニ心臟ノ大サニ一致セズシテ、只偉大ナル心擴張アレバ乃チ知ルヲ得ルナリ、比較的濁音界ハ左ハ乳嘴線ノ外方一一二仙迷ニ及ビ上界ハ第二肋骨ニ達シ、右ハ僅ニ右胸骨線ヲ越エ、而シテ下ハ第四肋間腔ニ及ブ、絕對的濁音界ハ左胸骨線ノ附邊ニ於テ僅少ノ領域ヲ占ムルニ過ギズ。

胸骨柄ノ上部ニ於テ弱濁音ヲ呈スルハ、胸腺濁音界ニシテ顛倒セル三角形ヲナス、然レドモ胸腺濁音界ハ容易ニ識リ得ルモノニ非ズ、之ヲ知ルニハ非常ノ熟練ヲ要ス。

心臟ハ聽診ハ大人ト大差ナキモ、只注意スペキハ、心音ハ大人ヨリモ高音ニシテ、背部ニ於テモ尙ホ聽取シ得ベシ、學齡兒童等ハ心臟聽診ノ際、急速ニ呼吸スルトキ所謂心肺雜音 Herzlungengeräusch ヲ生ジ、普通ノ心臟雜音ト誤診スルコトアリ、一般ニ哺乳兒期ニ於テハ心内膜炎性有機的及ビ官能的心雜音ハ稀有ナリ。

第十五圖

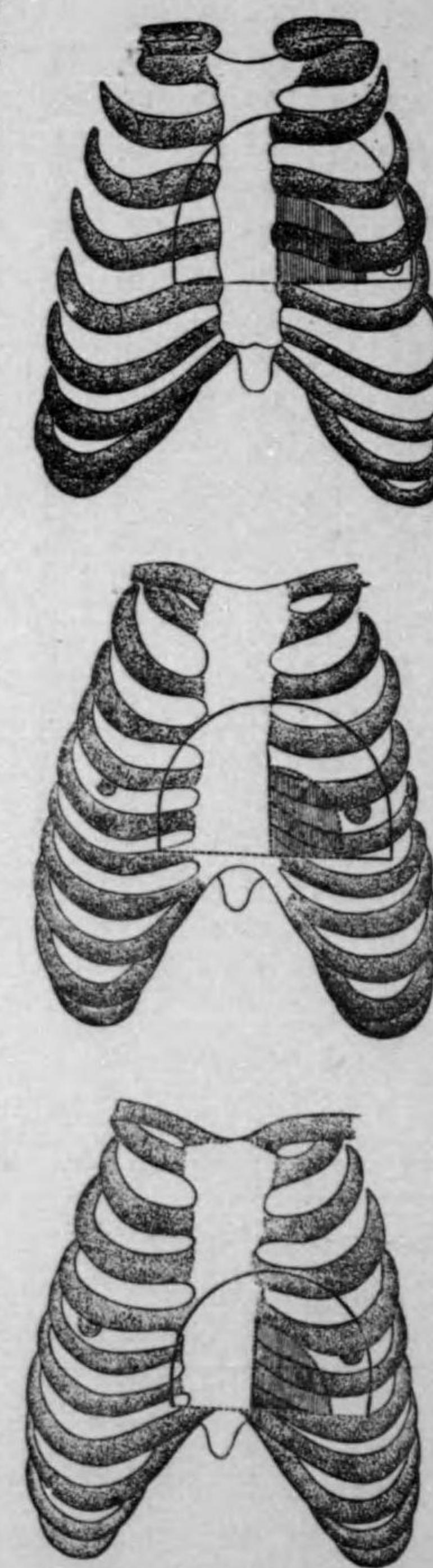
第十六圖

第十七圖

約一年ノモノ

約六年ノモノ

約十二年ノモノ



肺臟 肺臟ヲ検査スルニハ、先づ聽診ヲ行ヒ、然ル後ニ打診ヲ行フベシ殊ニ幼兒ニ於テ然リトス。

肺臟聽診 患兒ハ啼泣又不安ハ決シテ、障礙トナラズ、反ツテ深呼吸ヲ扶ケテ聽診ニ便利ヲ與フルナリ、幼兒ノ呼吸音ハ所謂小兒呼吸音 Pueriles Atmen ニシテ、大人ヨリモ著明ニシテ銳シ、而シテ呼氣ヲモ聽取シ得、肺臟ノ聽診ニ際シ幼兒ニ於テハ特ニ胸部ノ後下部ヲ注意スベク、肺尖ハ大人ニ於ケル程甚シク留心スペキ場處ニ非ズ、肺炎等ニ於テ氣管技性呼吸音 Bronchialathmen ハ須要ナレドモ、時ニ著明ナル氣管枝聲 Bronchophony ガ氣管枝音ヨリモ先ニ現ハレ、是ニ由リテ診斷ヲ助クル場合渺ナカラズ。

**肺、臓打診** 聽診ト異ニシテ患兒ノ不安運動ハ甚ダ障礙トナル故ニ打診ノ際ニハ母氏及ビ看護婦ヲシテ患兒ヲ腕ニ擁シ、或ハ膝ニ乗セ可及的正シキ姿勢ヲ採ラシメ、左右均齊ナラシムベシ、姿勢至ムトキハ脊柱ハ彎曲シタル側ハ濁音ヲ呈スルニ至ル、打診ハ初ヨリ決シテ強打診法ヲ用フベカラズ、蓋シ幼兒ノ胸廓ハ振動シ易キヲ以テ、強打診法ヲ用フレバ必ズ鼓音ヲ呈ス、故ニ靜ニ指頭ヲ以テ弱キ觸打診ヲ行フベシ、如此シテ若シ或部ニ音ノ微弱ナル處アルカ、或ハ抵抗感覺ノ著シキ處アレバ、更ニ強打診法ヲ行ヒテ眞ノ濁音ナルヤ否ヤヲ比較スベシ、哺乳兒ニ於テ肺炎竈ハ打診音ニ變化ヲ與ヘザル而已ナラズ、附邊ノ氣腫部ノ共振動ニ依リテ反ツテ鼓音ヲ呈スルコトスラアルモノナリ。

#### (三)腹部ノ検査 Untersuchung der Bauchorgane

哺乳兒ニ就テ腹壁ノ緊張度如何ハ診斷ノ扶助トナル、弛緩ハ永ク疾患ニ惱メルカ、或ハ重症ナル疾病存立ノ證ト云フヲ得。

肝臓及ビ脾臓肥大、觸診ニ依リテ精密ニ知リ得ベシ、肝臓ハ大人ヨリモ大ニシテ季肋下ニ觸知シ得、脾臓ハ觸知シ得ルモノハ已ニ肥大セルナリト斷定スル學者アレドモ、必ズシモ然モズ其ノ轉位シ得ルコトアルヲ注意スベシ。

腹部ノ局所性、壓痛ハ幼兒ニ於テハ顔貌足ノ姿勢、體位等ニテ察スベシ、腹部ニ疼痛アルトキハ顔ヲ歪メ、四肢ヲ軀幹ニ接シ、且屈曲シテ啼泣スルガ如シ。  
胃液採取及ビ腸管膨満法等ハ必要ニ應ジテ施スベシ。

#### (三)尿 Harn

哺乳兒ニ於テ其採取ハ屢失敗ニ終ルコト多シ、通常男兒ニ就テハ試驗管中ニ陰莖ヲ入レ、糾創膏ヲ以テ保持セシメ、女兒ニアリテハ低キ齶、或ハエルレンマインエル氏懶ノ小ナルモノヲ取り、尿道口ノ邊ヨリ脱脂綿ヲ以テ尿ヲ罐中ニ傳フル様ニ裝置シ之ヲ陰部ニ當テ、更ニ糾創膏ヲ以テ固定スベシ、或ハ護謨製ノ受尿器(第二十圖)ニ依ルコトアリ、必要アラバ膀胱ノ尿ヲ得ムガ爲メカターテルヲ送入スベシ。

#### (四)神經系統 Nervensystem

他動的運動及ビ腱反射 檢查スルニ當リ、幼兒ニアリテハ可及的注意ヲ他方ニ向ケシムベシ、哺乳兒ニアリテハ授乳中ニ行フヲ適當トス。

足現象 發熱若クハ興奮セル乳兒ニアリテハ、屢見ル現象ニシテ診斷上價值アルモノナラズ。

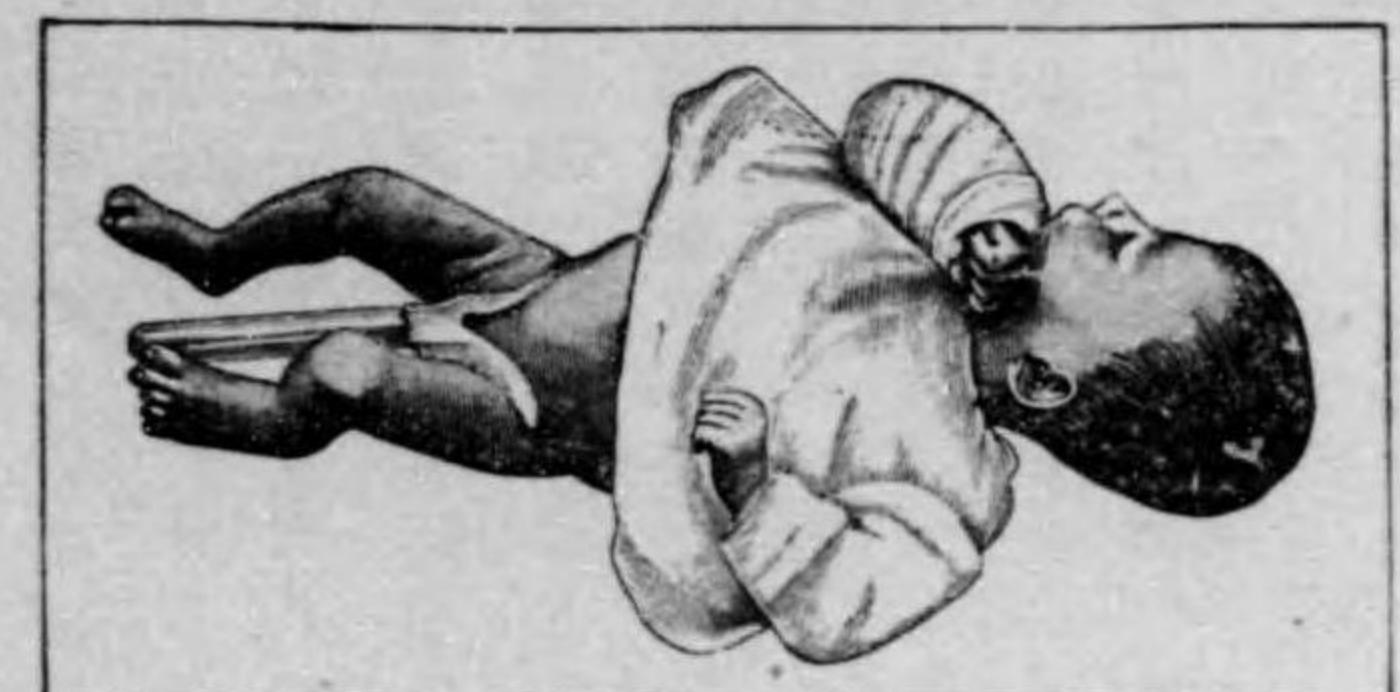
膝蓋腱反射 缺如セルモノハ必ズ病的ナリ。

顏面神經現象 Facialisphaenomen 痙攣質小兒ニハ必ズ存スルモノニシテグヴォステック氏點 Chvostek's Punktヲ叩クベシ、即チ顎骨弓ノ中央點ト口角トヲ結ビ付ケタル線ノ中點ニ相當スル處ナリ。

知覺検査 未ダ言語能力ナキ小兒ニ於テハ單ニ痛覺ノ有無ヲ知リ得ルニ過ギズ、帽針ヲ以テ足蹠ヲ刺ストキニ、知覺存スレバ下肢ヲ屈曲スルガ如シ。

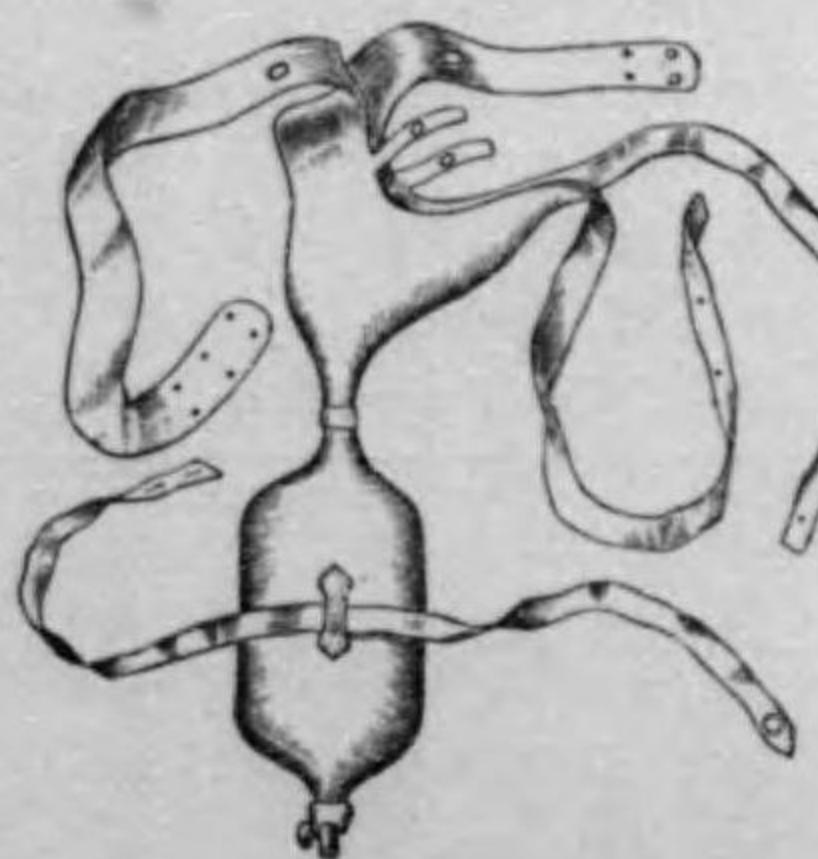
第十八圖

取尿ノテヒ用ヲ管試テ就ニ兒乳哺性男



第十九圖

取尿ノテヒ用ヲ管「ルエイマンレルエ」テ就ニ兒乳哺性女

第二十圖  
受尿器

電氣検査ハ固ヨリ必要ナリ、其方法ハ哺乳兒ニ就テモ一般成年者ニ行フト相異ナラズ、但ソノ實行ニ就テハ技術上ノ熟練ト周到ナル注意トヲ要スルナリ。

腰椎穿刺法 Lumbarpunktion, Spinalpunktion 甚ダ重要ノ診断法ニシテ、乳兒ニ就テモ屢々行フ

モノナリ、先づ患兒ヲ側位ニシ、看護婦ヲシテ一方患兒ノ首ヲ持シテ成ルベク胸ニ接近セシメ、他方膝臍部ヨリ手ヲ入レテ、兩側ノ下肢ヲ抱キテ腹部ニ曲ゲ、恰モ海老ノ如キ姿勢ヲ取ラシム(第二十一圖)、斯クシテ醫師ハ兩側腸骨櫛ノ結合點ト脊部中線トノ交叉點ヲ案出シ、其點ニ於テ左手ノ示指ヲ以テ椎骨間腔ヲ探ルベシ、然ルトキハ大抵第四腰椎骨間ニ當ルナリ、中線ニ於テ右手ニ持シタルクインケー氏腰椎穿刺針ヲ垂直ノ位置ニ於テ穿刺スベシ(第二十二圖)、脊椎管ノ中ニ入ルナラバ抵抗ナク針ハ進入スベシ、而シテ凡ソ皮下二—四仙迷以上進入スルトキニ、套針ノ、マンドリンヲ抜キ取り見ルベシ、此時脳脊髓液ハ點滴狀ヲナシテ出デ來ル、液ノ壓高キトキハ射出シテ出ヅ、診断用ノ目的ナラバ通常五一—〇立方仙迷ニテ足リ治療上ノ目的ナラバ高壓ノ液ノ射出終リ、點滴狀ヲナシテ出デ來ルマデ液ヲ採ルベシ、一定ノ液ヲ採取スルニ先チテ、壓力計ノ一端ニ結ビ付ケテ壓ヲ測定スルコト必要ナリ(第二十三圖)。

此クインケー氏法ハ千八百九十年同氏ノ創意ニ成リシモノナリ。

## (五) レントゲン撮照法 Röntgenstrahlen

小兒病ニ於テモ亦屢々應用セラレ、而シテ骨系統疾患、氣管枝腺腫脹、肺炎浸潤、肋膜炎性滲出液等ノ際ニ用ヒラル。

圖二十一 第  
作動一 第法刺穿椎腰

圖一十二 第  
法刺穿椎腰



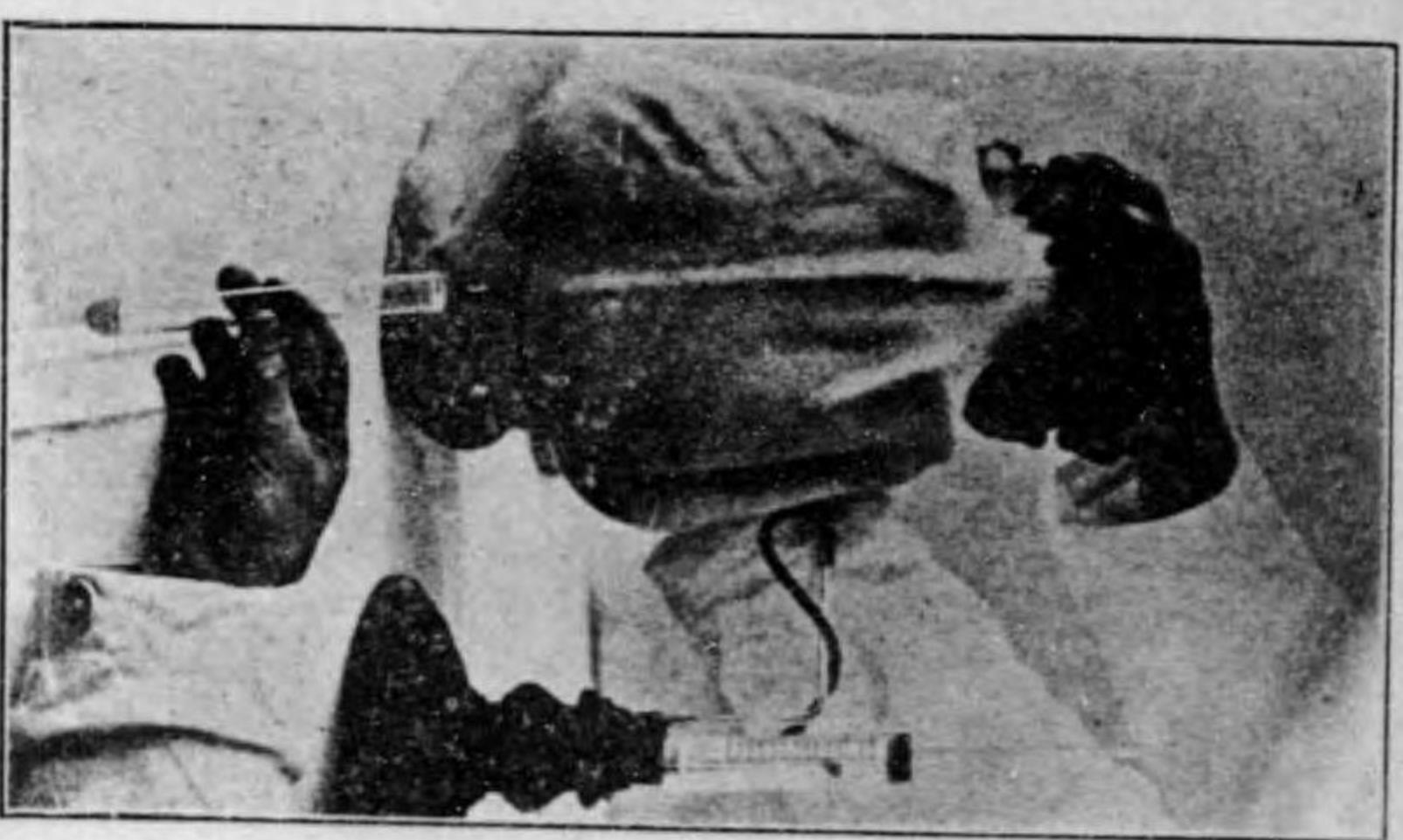
(nach Pfraundler)



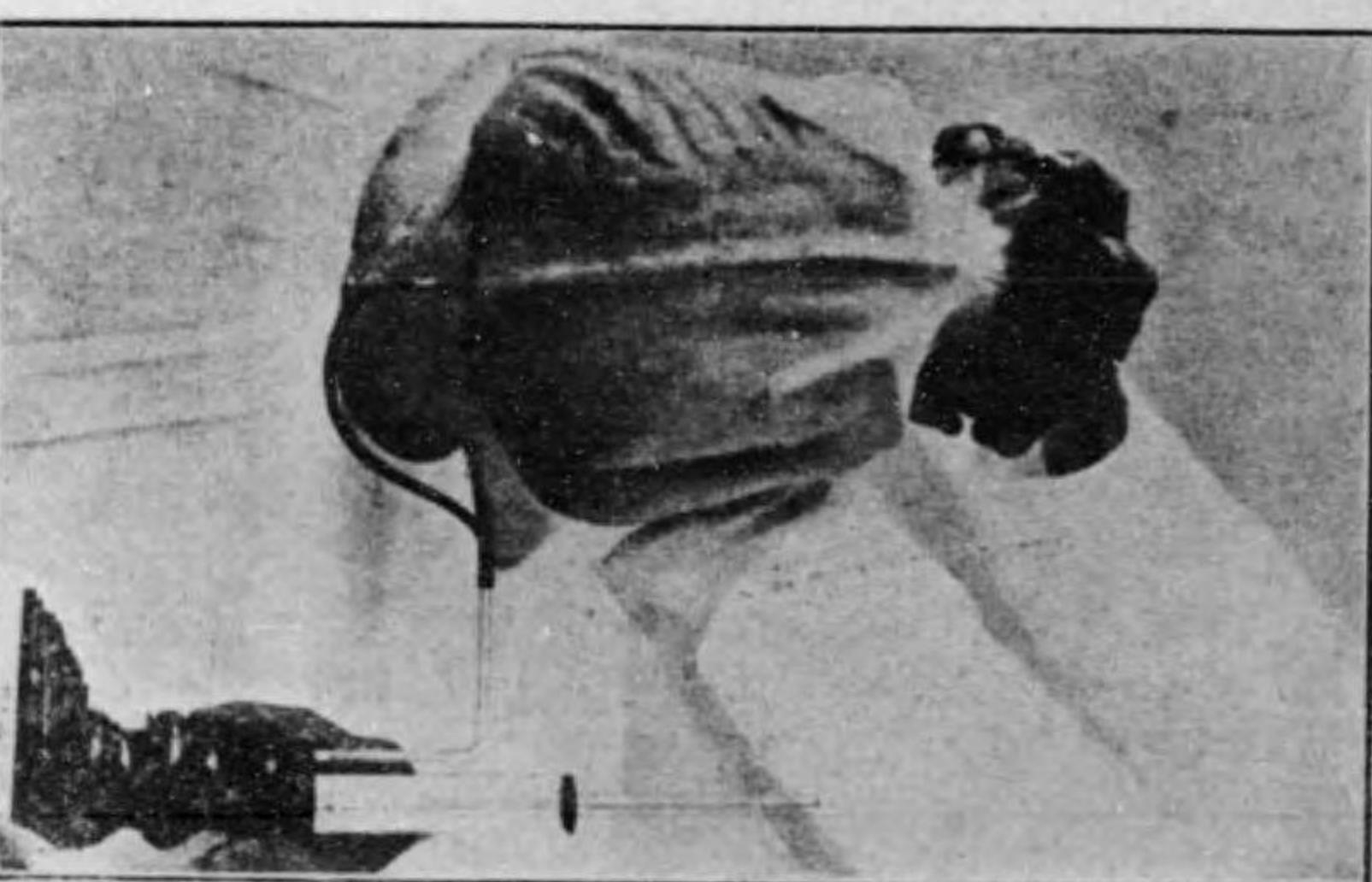
(nach Feer)

圖四十二 第  
作動三 第法刺穿椎腰

圖三十二 第  
作動二 第法刺穿椎腰



(nach Pfraundler)



九一

## 第六章 一般豫防法及ビ療法總則

### 第一 一般豫防法 Allgemeine Prophylaxe

疾病ニ對スルノ豫防法ハ夙ニ出產前ヨリ行ハザル可カラズ、古ノ所謂胎教ノ說ク所則チ之ニ外ナラザルナリ、已ニ胎兒ヲ宿セバ、其時ヨリシテ母氏タルモノハ攝生ニ注意シ累ヲ胎兒ノ將來ニ及ボスコト勿ルベシ。

分娩時及ビ產褥期ハ損傷又傳染ヲ避ケ、母氏自ラ攝生ヲ嚴守スペキハ言ヲ俟タズ、生兒ニ就テハ臍感染ヲ豫防シ、臍漏眼ヲ防グ爲メニ、ダレーテー氏點眼 Crede'sche Einträuflung フ行フベキハ人ノ周知スル所ナリ。

哺乳兒期ニ於テハ最モ豫防テフ點ニ著眼シテ養育セザル可カラズ、左ノ哺乳兒死亡率統計表ヲ覽レバ、一目瞭然タルナリ。

ブラウスニツツ氏 (Prausnitz, Hankbuch v. Pfundl'r u. Schlossmann) の表ニ據レバ

一〇〇〇人ノ產生兒中

死產兒

三一三〇

生後一月ニ死セシモノ

一五四

同二月ニ

五六

同六月ニ

一五

同五月ニ

一五

同四月ニ

二一〇

同三月ニ

三一二

第一週以内ニ死セシモノ

二八四

第八日ヨリ第十五日迄ニ死セシモノ

一一九

第十六日ヨリ一ヶ月ノ終迄ニ死セシモノ

二一七

而シテ各國ノ統計ヲ比較スルニ

生產兒百人中

日本

獨逸

佛國

二〇

一五

三七

四五

呼吸器病並ニ結核症

一五九

一五

九三

我邦ニ於テハ歐洲ノ如ク人工栄養盛ナラザルガ故ニ、消化器病ノ死亡率比較的少キモ、

而カモ前章ニ示セルガ如ク、乳兒ノ人工栄養ヲ施セル者ノ罹病及ビ死亡率多キヲ見レ

バ、哺乳兒期ノ豫防法ハ單ニ栄養法ニ向ヒテ留心セザル可カラザルヤ明ラカナリ。

第六章 一般豫防法及ビ療法總則

九三

哺乳兒ニ於テ傳染性疾患ノ豫後不良ナルハ普ク人ノ知ル所ナリ、此等ノ侵入門ハ主トシテ上氣道及ビ口腔ノ粘膜ニシテ、殊ニ鼻加答兒、安魏那、氣管枝加答兒「インフルエンザ」ヲ注意スベシ、室扶斯、疫咳ハ哺乳兒ニ於テハ豫後不良ナルカ、然ラザレバ危險ナル後貽症ヲ遺スコト多ク、哺乳兒ニシテ猩紅熱ニ罹レバ概々死亡スルモノト念フベシ、而シテ此等ノ疾病ハ周圍ノ人々ヨリ感染スルコト多キガ故ニ、成ル可ク患者ヲ隔離セザル可カラズ、一家内ニ猩紅熱等ノ患者ヲ生ジ、乳兒ノ存スル家庭ナラバ速ニ乳兒ニ感染セザル様戒心セザルベカラズ。

實扶的里、疫咳、腹痘、亞布答性口内炎、安魏那及ビ結核ハ時ニ汚物感染Schmutz oder Schmutzinfectionニ負フ所尠シトセズ、小兒ハ二年乃至三年ニ至レバ、牀上ニ匍匐シ、汚穢ナル玩弄物及ビ塵埃等ヲ口中ニ入ル、コトアリ、斯クシテ諸種不潔物ノ體内ニ入ル機會ヲ生ズ、故ニ小兒ノ居室ハ清淨ニシテ不潔物ノ存在セザルヲ要ス。

小兒ニ於ケル結核感染防遏ハ、住居衛生及ビ小兒ノ周圍ニ在ル結核性家人ノ攝生法ニ關スルコト大ナリ、故ニ能フベクンバ、結核性家族ヲ隔離スルコト肝要ナリトス。

學校ニ於テノ危險ハ比較的僅少ナリ、是レ顯著ナル結核兒童ノ登校ヲ禁ズルト、結核患者タル教師ヲ採用セザルトニ依リテ豫防シ得。

健康ナル小兒ニ微毒ノ傳染スルハ、乳母及ビ使傭人ノ微毒ニ因ルコト明ラカナレバ、乳母及ビ兒守ヲ擇ブニ當リ微毒ノ有無ヲ檢スベシ。

要之上述ノ豫防ハ專ラ體格ヲ向上シテ諸種疾病素質ヲ減少セシムルニアリ、故ニ食餌トシテハ成ル可ク滋養價ニ富ム物ヲ與フベシ、但ツエルニ一氏ノ所謂滲出質ノ者ニハ決シテ肥肿ヲ來ス物ヲ與フベカラズ、反ツテ植物性ニ富ム食餌ヲ與フベシ。  
身體ハ強固Abhärtungヲ圖ルニハ、平時ニ於テ冷水摩擦法、灌注法、冷水浴ヲ行ヒ、又野外生活ノ習慣ヲ附ケシムベシ、體質ノ先天的薄弱ナル者ハ森林學校Waldschuleニ送リ或ハ「フェーリエンコロニーFeienkolonie」ノ團隊ニ加ハラシムベシ。

學校衛生法ノ必要ナルコトハ陳述ヲ俟タズ、脊柱彎曲異常、近眼等ヲ豫防スル爲メニ教室、机、椅子等ノ製作ニ注意スベキハ勿論ナリ、然レドモ委細ハ衛生學ニ讓リテ茲ニ説カズ。

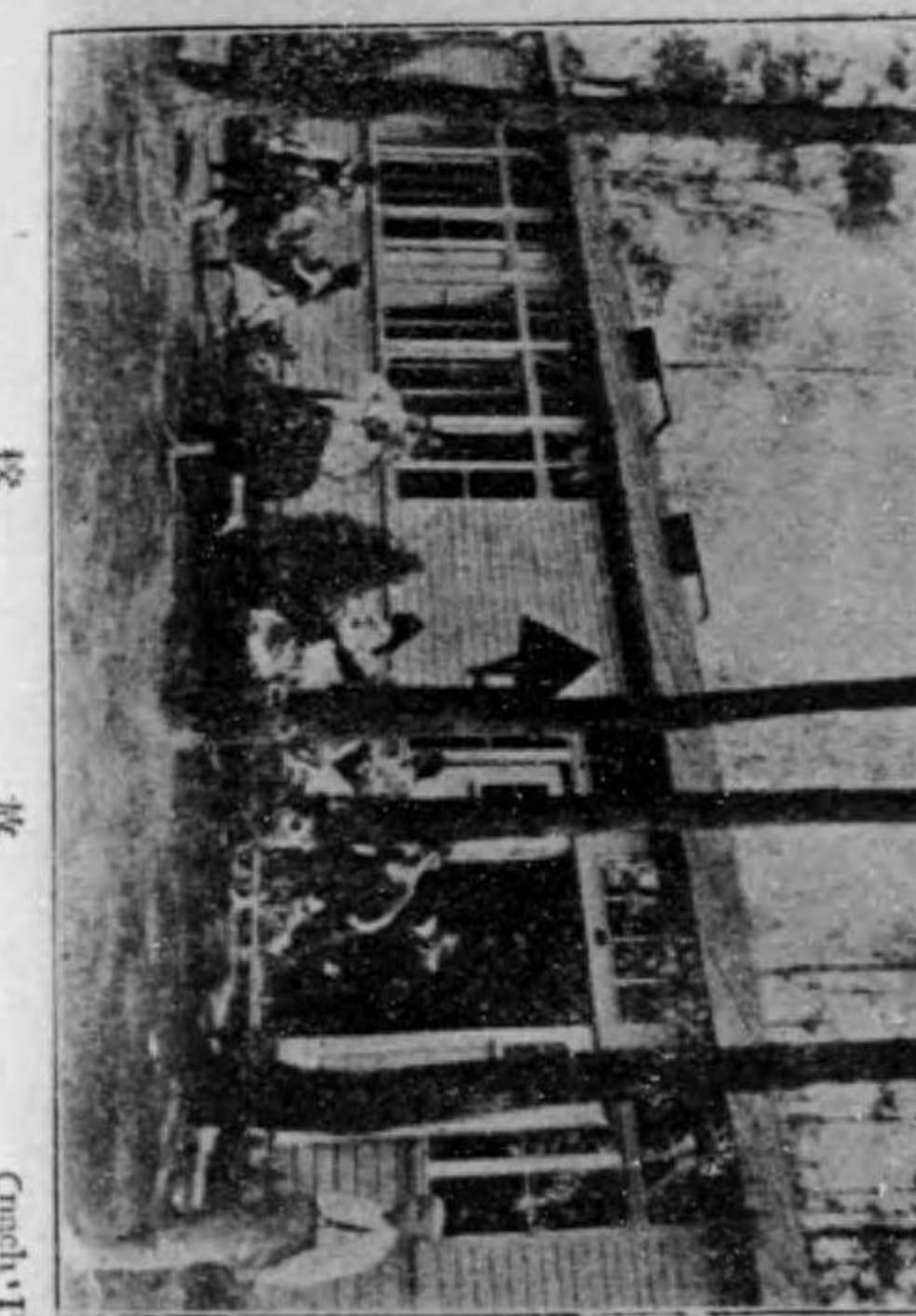
## 第二 療法總則 Allgemeine Therapie

小兒ニ於テモ、年長ノ兒童ニアリテハ、其療法ヤ大人ニ於ケルト大差ナシト雖モ、年少ノ者、殊ニ哺乳兒ニ於テハ自ラ特有ノ點ナクンバアラズ、即チ、主トシテ理學的療法及ビ食餌攝生ニカム、藥物療法ハ如キハ副物タル觀ナキニ非ズ、藥物療法ニ於テハ大人ト異ニシテ、味ノ苦キモノ、酸キモノ、苟クモ不快感ヲ與ヘ、或ハ食慾ヲ害スルモノハ、如何ナル良藥ト雖モ與フルヲ得ザル憾アリ。

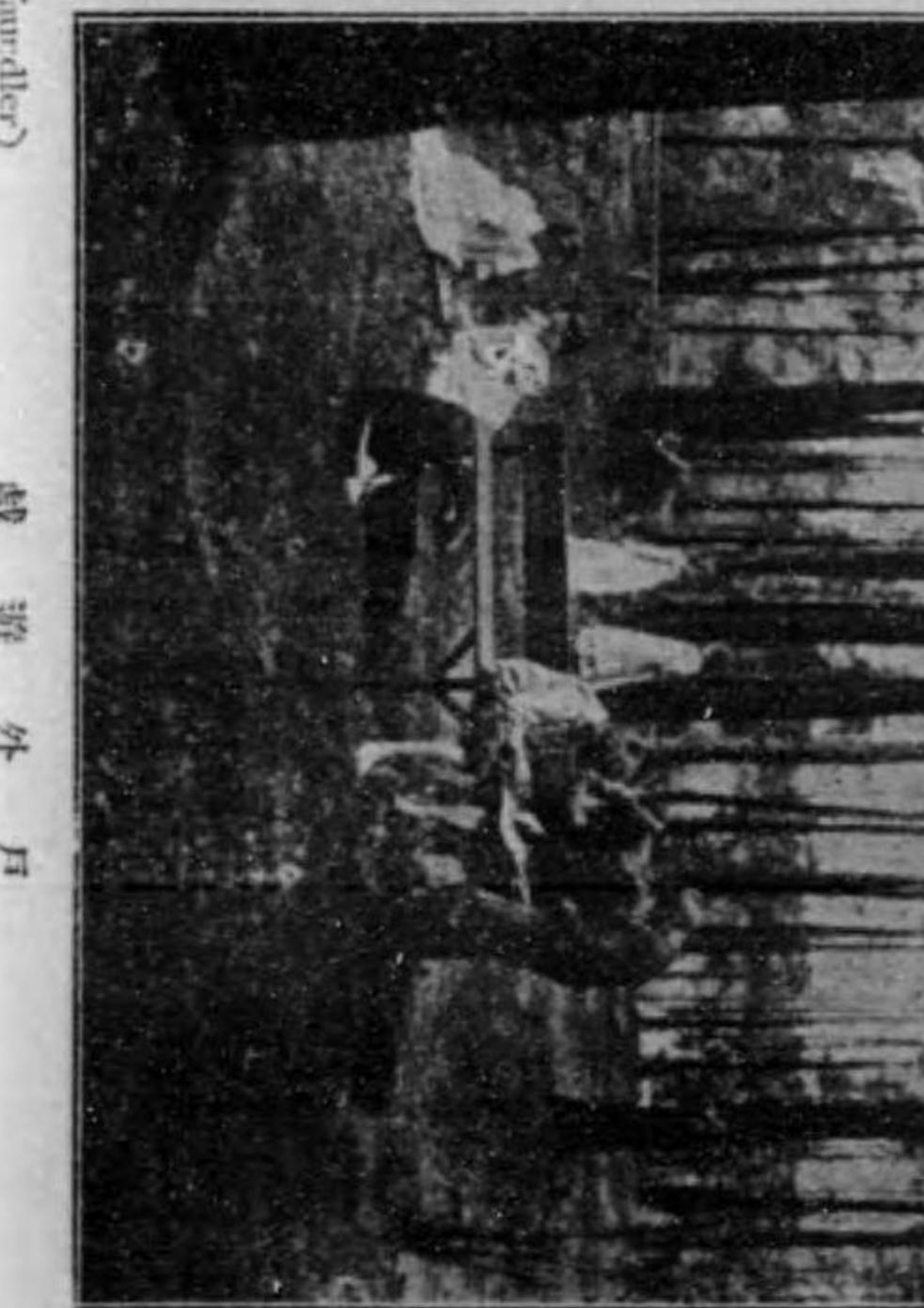
小兒ノ疾病ハ其症候ノ不良ニ赴クヤ、電光石火ノ如ク速ナリ、然レド治療ニ向フモ亦迅



國 二十一 痘 命 外 人



校 放 痘 (Gesch. Frauenday) 截 遊 外 人



戰 命 外 人

速ニシテ驟雨去リテ後清風肌ニ逼ルガ如シ。

小兒病ニ於テモ、理學的及ビ食餌的療法、精神療法、氣候及ビ温泉療法「レントゲン」及ビ「ラジウム」療法適用セラル。此章ニ於テハ専ラ一般ニ通ズル事項ヲ述べ精細ナル療法ハ各症ノ條下ニ於テ論及スベシ。

(一) 發熱ニ對スル療法 最モ普通ニ用ヒラル、ハ水囊應用ナリ、高熱ヲ發スルトキハ強心劑ヲ與フルノ傍ラ、水囊ヲ心臓部ニ置クベシ、熱益、昇騰スルカ又頭痛ヲ訴フル場合ニハ、尚ホ水囊ヲ頭部ニ當ツベシ、然シ水囊及ビ其他ノ冷却法ハ榮養甚ダ不良ナル小兒、若クハ幼少ナル哺乳兒ニハ應用スペカラズ是レ虛脫ヲ起ス虞アレバナリ。

其他理學的方法トシテハ冷浴、行フ、攝氏三十度位ノ水中ニ入浴セシムルナリ。

濕布應用モ亦簡單ナル方法トシテ賞用セラル、濕布ニ用フル水ノ溫度ハ一定シ難キセ、乳兒ニハ室温ノモノヲ用フベク、稍年長ノ小兒ニハ二十度以下ノモノヲ用フルモ可ナリ、普通濕布ハ四肢ヲ除キテ軀幹ノミニ纏絡ス、或ハ頭部ヲ除キテ全身ヲ纏絡スルコトアリ、濕布ニ用フル布片ハ幾重ニモ疊ミ、先づ之ヲ水ニ浸シテ水滴ノ落チザル程度ニ控リ、其上ニハ蒸散ヲ防ガム爲ニ稍幅廣キ油紙ヲ貼用スペシ、布片材料ハ「フラネル」或ハ綿「ネル」類ニテ良シ、而シテ濕布ハ乾燥スルヤ直チニ交換スベシ、即チ更ニ水ニ浸シテ控リ直スベシ、濕布ノ長時間使用ハ濕疹及ビ膿疱ヲ形成スルコトアリ、之ヲ豫防スルニハ皮膚ニ油剤ヲ輕ク塗擦シ置クベシ。

解熱劑ハ上述ノ理學的療法ヨリモ用ヒラル、コト少ナク、殊ニ幼兒ニ於テハ一般ノ熱性疾患ニ對シテモ、大人ヨリ其ノ用途少ナシ。アスピリン、「アンチビリン」及ビ「ピラミドン」ハ解熱ノ意味ヨリモ、寧ロ一定ノ疾病ニ對シテ特效的ニ應用セラル、モノニシテ。インフルエンザ、霍麻質斯、安魏那ニ於テ爾リ、然レドモ此等解熱劑ノ中、規尼涅及ビ「オイヒニン」ハ比較的多ク使用セラル。

「アスピリン」一回量

一年迄

○○一一〇〇三

一二二年

○○三一〇〇六

三一五年

○○八一〇一

六一十年

○一〇一〇二

十一十五年

○一五一〇三

右一日三回、乳糖ト伍用スベシ。

「アンチビリン」ハ小兒年齢ト約同數ノ「デチグラム」ヲ一日二回、或ハ三回マデ、稍多量ノ白

糖ト和シテ用フベシ。

例之二年ノ小兒ノ「インフルエンザ」ニハ

「アンチビリン」

○二

白糖

○四

右爲一包一日二包服用。  
亦水劑トシテ使用スルコトヲ得。

鹽酸キニーネハ一歲未滿ハ一回ニ〇・一、一五年ハ〇・三、五—十年ハ〇・五十—十五年ハ〇・六ヲ使用ス、然レドモ苦味甚シキヲ以テ、幼兒ニハ「オイヒニン」ヲ使用スベシ。

「オイヒニン」ハ「キニーネ」ト同量ヲ牛乳、或ハ肉汁ニ混ジテ與フベシ。

(二) 體溫下降ニ對スル療法 生活力薄弱ナル小兒及ビ栄養障礙ニテハ、體溫異常ニ下降スルコトアリテ、危險ナレバ、速ニ防遏策ヲ講ズベシ、即チ「クヴエース」Conveuse、湯婆、灰爐ヲ使用スルナリ、其他温キ飲料ヲ與ヘ、或ハ温浴ヲ取ラシムベシ、温浴ハ初メ攝氏三五—三六度トナシ、注意シテ、熱湯ヲ少シヅ、灌ギ、遂ニ四十度位ニ至ラシムベシ、此際小兒ノ皮膚ヲ手ヲ以テ強ク摩擦スルヲ可トス。

(三) 虛脫ニ對スル療法 虛脫ニ際シテハ、上述ノ如ク温浴ヲ取ラシメ、胸部及ビ背部ニ冷水ヲ灌注スルカ、或ハ冷水ニ浸シタル布片ヲ以テ強ク皮膚ヲ摩擦スベシ。

芥子應用ハ虛脫ノ兆候アルトキ、特ニ呼吸ヲ興奮スル爲メ、或ハ炎症ニ對シテ用ヒラル、最モ多ク毛細氣管枝炎ノ際ニ用フ、芥子泥ヲ胸部ニ當テ、皮膚ノ潮紅スルヲ待チテ除去スベシ。

温浴及ビ芥子應用モ救急ノ間ニ合ハズ、已ムヲ得ザルトキハ單ニ手、布片、酒類、アルコホルヲ以テ皮膚ヲ盛ニ摩擦スペシ、而シテ内用ニハ「アルコホル」飲料、珈琲等ヲ與フベシ。

樟脳油皮下注射ハ奏效最モ確實ニシテ好ンデ用ヒラル、小兒ニテハ $10\%$ 樟腦阿列布油ヲ用ヒ、必要ニ應ジテ一回ニ一筒乃至二筒ヲ注射スベシ、注射部位ハ幼兒ニアリテハ胸部ヲ擇ブベシ。

樟脳ハ又内服トシテ用ヒラル、哺乳兒ニ安息香酸ト同量ニ和シテ $0.03-0.05$ ヲ日ニ數回用フ。

## 精製樟脳

各 $0.03-0.05$ 

## 安息香酸

 $0.1$ 

## 乳糖

右爲一包一日三包服用

「コフエイント製劑モ亦奏效確實ニシテ不快ナル副作用ナキヲ以テ好ンデ用ヒラル、安息香酸曹達コフエイント貯用セラル。

## 一年迄

一回

 $0.03$ 三迄

## 二十三年

 $0.06$ 迄

## 四十六年

 $0.1$ 迄

## 學齡兒童

 $0.15-0.2$ 迄

一日數回内服、或ハ皮下ニ $(10-120)\%$ ノ溶液用フベシ。

アドレナリンモ亦虛脱ノ際ニ用ヒラル、一千倍溶液ヲ乳兒ニハ $\frac{1}{2}$ 筒、年長兒ニハ $\frac{1}{2}$ 筒ヲ

皮下或ハ筋肉内ニ注射スベシ。

「ギタリスハ「ギタリス葉浸トシテ用フ、奏效緩徐ニシテ又蓄積作用アレバ、常ニ脈搏ニ注意スベシ。」

## 一一二年

一日量

 $0.05-0.1$ 

## 三十四年

 $0.1-0.2$ 

## 五十年

 $0.2$ 

## 一十五年

 $0.3-0.5$ 

## 單舍利別

 $1.0$ 

右一日三回二日分服(四年ノ小兒)。

「ガレンハ副作用ナキヲ以テ好ンデ使用セラル、内服、注射或ハ食鹽水注入ノ際ニ其ニ混ジ「ギタリス」ヨリ稍多量ニ用ヒラレ、一二年ノ小兒ニハ一日 $0.2$ 、四年以上ノ小兒ニハ一日 $0.5$ ヲ用ヒテ可ナリ。

「ストロファントウス丁幾モ亦用ヒラル。

麥角劑モ亦小兒ニ強心劑トシテ用ヒラル、ナリ。

ステッフエン氏ハ一日三十四回、麥角末ノ $0.3-0.5$ ヲ内服セシメ、ノイマン氏ハ水製麥角越幾斯ヲ二時間毎ニ、一年迄ノ小兒ニハ二一三滴全量 $1.0$ 迄(二年迄ノ小兒ニハ三一

## 四滴(全量一五迄)ヲ用ヒタリ。

(四)呼吸興奮法 虚脱ニ對シテ應用セラル、方法ハ、亦呼吸興奮ニモ應用セラレ得ルナリ、然レドモ呼吸麻痺ガ主トシテ現ハレ、心臓機能比較的佳良ナルニ、呼吸休止ノアル場合ニハ酸素吸入法ヲ行フベシ、一分間ニ三「リーテル」ノ割合ニテ、一回ニ五一〇分間、一時間ニ二三回吸入セシメ、遂ニ呼吸麻痺恢復シ、呼吸正調トナリ。チアノーゼ去リテ血液ノ動脈性トナルヲ俟チテ止ムベシ。幼少ナル哺乳兒ニアリテハ、單純ノ鼻加答兒ニテ已ニ鼻呼吸ノ困難ヲ來スコトアリ、斯ノ如キ際ニハ器械的ニ鼻腔内ノ汚物ヲ除去シ、或ハ三千倍ニ稀釋セル「アドレナリン」溶液ヲ新鮮ナル綿「タンボン」ニ附ケテ挿入スルカ、或ハ千倍溶液ノ一滴ヲ鼻腔ニ點入スベシ。

喉頭ニ於ケル重篤ナル呼吸困難ニ就テハ「イントウバチオン」Intubation 或ハ氣管切開術 Tracheotomyヲ施スベシ。

(五)水分脱却ニ對スル療法 哺乳兒ヲ侵ス最モ危険ナル一症候、即チ水分脱却ニ際シテハ、猶豫スルコトナク適當ノ療法ヲ施スベシ、最モ屢々遭遇スルハ、夏期ニ於ケル急性「デスマブシ」(食餌性中毒症)ニシテ、水分脱却ノ太甚シキヲ見ルナリ。

最モ多ク用ヒラル、ハ〇・七一〇・八五%生理的食鹽水或ハリングル氏液ヲ皮下ニ注入スルニアリ、其裝置ハ種々アリ、普通用フルハサーリー氏注入器ナリ、已ムナクンバ「グラーフワツ」注射器ノ大ナルモノニテモ代用シ得、此法ヲ行ニハ消毒法ヲ嚴守スベシ。



(nach Pfaundler)

先づ生理的食鹽水ヲ體温ニ  
援メ、一回ニ一五〇—二〇〇  
瓦ヲ肩胛間部又ハ大腿外側  
ノ皮下ニ注入シ、注射針ヲ拔  
キ去リタル跡ニ二重ニ絆創膏ヲ貼リ「コロジウム」ヲ以テ  
封鎖スベシ、食鹽水注入ハ少  
クトモ一日二回行フベク、其  
際「デガレン」及「アドレナリ  
ン」ヲ適宜ニ混ジテ用フルモ  
可ナリ。

## 第二十吸素器圖

リンゲル氏溶液 Ringer'sche Lösung ノ處方

格魯兒「ナトリウム」

七・五

格魯兒加里

〇・四二

格魯兒「カルチウム」

〇・一四

蒸餾水

右滅菌シテ使用スベシ。

第六章 一般豫防法及ビ療法總則

## 第十七入器



直腸内點滴法 Rectal Instillation 食鹽水皮下注入ノ代用トシテ賞用セラル、モ、其奏效確實ナルコト彼レニ及バズ、其ノ法ネラトン「カテーテル」ノ適當ノ太サノモノヲ採リ、護謨管ニ依リテ度盛セル「イルリガートル」ニ連接セシメ、其中ニ生理的食鹽水或ハリンゲル氏液ノ體温ニ煖メタルモノヲ、一〇〇—二〇〇瓦入レクエチュハーンノ作用ヲ以テ一秒間ニ一滴ノ速度ニテ點滴セシムベシ、其速度調節ノ爲ニ圖ノ如キ硝子球ヲ中間ニ插入シ、以テ點滴ノ速度及ビ食鹽水吸收ノ具合ヲ檢視スルニ便ナラシム、食鹽水良ク點滴スルモ、腸内ノ吸收不充分ナルカ、或ハカーテルニ糞塊入りテ水ノ流出ヲ障フルトキハ、硝子球ノ水面ハ上昇シテ水ノ滴下ヲ許サハル裝置ナリ。

此際ニ用フル食鹽水及ビリンゲル氏液ハ、成ル可ク體温ニ保チ置クヲ必要トス、然ラザレバ反ツテ腸ノ蠕動ヲ促シテ、不快ニモ排便ヲ見ルニ到ルコトアリ。

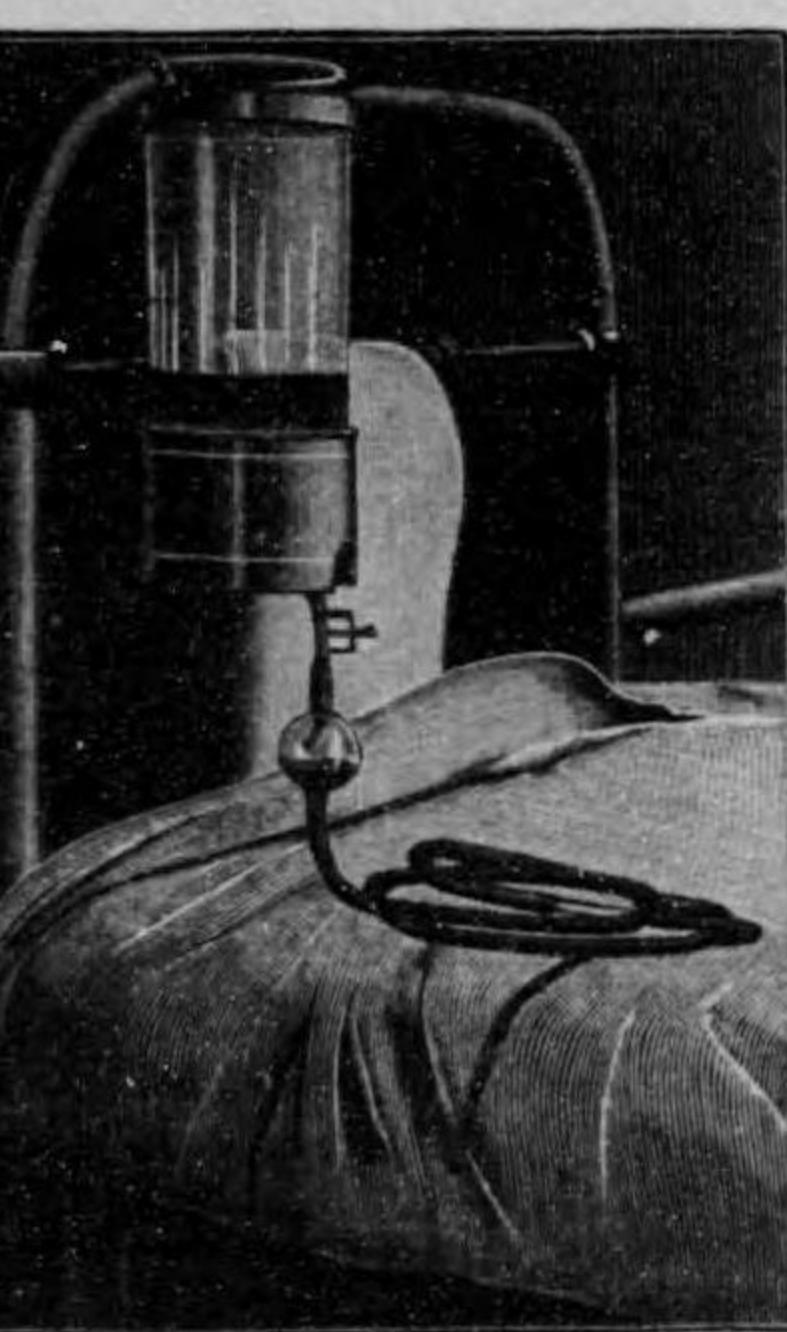
## (六) 排便法 腸洗滌 器械トシテハネラトン「カテーテル」及ビイルリガートル

ノニ物アレバ足ルヲ以テ容易ニ行ハル、患兒ヲ背位ニナシ、骨盤下ニ枕ヲ入レテ高クシカテ、一テルニ油ヲ塗リテ、一〇仙迷插入シ、イルリガートルヲ約一迷上位ニ在ラシメ、食鹽水ノ自然ニ流入スルニ任セ、五〇〇—一〇〇瓦ノ食鹽水ヲ入レカテ、一テルヲ抜キ去リテ後、暫時綿ヲ以テ肛門ヲ壓シ、水ノ流出スルヲ防ギ、二三分ヲ經テ漸ク流出ヲ許スベシ、赤痢及ビ疫痢ニテハ高位洗滌 Hole Irrigation ト稱シ、ネラトン「カテーテル」ヲ二〇—三〇仙迷位插入シテ洗滌セザレバ、奏效確實ナラズ、斯クノ如キ際ニハ食鹽水ニ混ズルニ收斂劑ヲ以テスルコトアリ。

灌腸 哺乳兒ニ就テハ秘結ノ際ニ下劑ヲ妄用スルヲ得ズ、主トシテ灌腸ニ依ルモノトス、普通ハ一二茶匙ノ「グリセリン」ト同量ノ水トヲ混ジ、灌腸器ニヨリテ腸内ニ入ル、モノナリ之ニ



第二 腸  
第九 滴 器



(nach Martin, Münchener Medizin Wochenschrift 1911 P. 951)

代フルニ「グリセリン坐薬ヲ用  
フルモ良シ、或ハ石鹼及ビ冷水  
灌腸ヲ以テスルコトアリ。  
下劑 Abführmittel 好ンデ小兒ニ  
用フルモノハ「リチネ油ナリ、一  
回五一一〇瓦ラ牛乳或ハ茶ニ  
加ヘテ飲マシム、哺乳兒ニ於テ、  
大人ハ如ク嫌惡スルコトナ  
ニ從ヒテ「乳劑」トナシテ用フベ  
シ。

「リチネ油」

七・五

「マンナ」舍利別

七・五(二年ノ  
小兒ノ)

使用ニ先チテ強ク振盪シ、三十分間ニ二三回ニ分チテ飲用セシムベシ。  
甘汞ハ哺乳兒ニテハ〇・〇一—〇・〇五、三年以下ニハ〇・〇五一〇、每一時間ニ奏效ス  
ル迄服用セシムベシ、甘汞ハ下劑トシテ古來ヨリ小兒ニ貰用セラレ、小兒病ト甘汞トハ

殆ンド相離ルベカラザル觀ヲ呈セリ、是レ甘汞ハ腸蠕動ヲ促スノ外、消毒力アルベキヲ  
信ゼシ結果ナリキ、然レドモ近年甘汞ハ消毒トシテ腸内ニ於テ何等ノ作用ナキノミナ  
ラズ、反ツテ刺載ヲ與フルコトアルヲ知リテヨリ、臨科醫問ニ從前ノ聲價ヲ失墜セムト  
スルノ傾向アルモ、之ニ雷同シテ全ク廢棄スペキモノニ非ザルコトヲ信ズ。  
三年以上ノ小兒ニアリテハ、鹽類下劑トシテ人工カル、ス泉鹽一茶匙(フランツ、ヨセ)  
フ泉鹽及ビ硫酸麻屈涅矢亞モ用ヒラル。

近時ホルモラールヲ用フ、奏效長時間連續スルヲ以テ、常習性便秘ノ小兒ニ用フルモ可  
ナラン、イスチンモ亦便秘ニ貰用セラル、但シ之ヲ用フルヤ尿ノ黃褐色若クハ赤色ヲ  
呈スルコトアルヲ忘ルベカラズ、此點ニ關シテ津金氏ノ報告アリ。

(七) 胃洗滌 Magenspülung 中毒及ビ嘔吐ノ際ニ應用シ、嘗テ消化不良等ニ採用セシモ、現  
今ハ然ラズ、其法タル小兒ヲ側位ニシ、一五〇—二〇〇瓦容積ノ漏斗ヲ取り、一迷ノ長サ  
ヲ有スル護謨管ニ連接シ、其管ヲ更ニ鉛筆位ノ大サヲ有スルネラト(カラーテルニ結  
ビ、以テ胃消息子ニ代用ス、而シテ胃中ニ「カテーテル」ヲ送入スルハ甚ダ容易ナリ、乃チ漏  
斗ヲ一迷位ノ高サニ支持シ、温湯或ハ生理的食鹽水ヲ注入スペシ、此際ニ液ノ流入ヲ容  
易ナラシムガ爲ニ「カテーテル」ヲ上下ニ動カシツ、水ヲ漏斗ニ注グベシ。

(八) 收斂劑 Adstringierende Mittel 最モ汎ク用ヒラル、ハタンニン製剤ナリ、直腸ヨリハ

〇・二五—〇・五%「タンニン」液ヲ用フ、内服トシテハ「タンニン」外、諸種ノ製剤アリ。

「タンニゲン」 Tannigen

(○・一一・〇・二) 一日三回

「タンナルビン」 Tamalbin

(同上)

「タンノフォルム」 Tamoform

(同上)

「タンニスムトート」 Tannismut (同上)

此等ハ亞刺比亞護謨末ト共ニ振盪水劑トシテ用フルヲ宜シトス。

「タンニゲン」 六〇

「アラビヤコム」 末

一二〇

「サカリン」 極少量

六〇〇

「蒸馏水」 六〇〇

右一日五回一茶

匙宛使用前ニ強

ク振盪スペシ(二

入出 滲 滲 滲 滲 滲 滲

I II I II I II I II



胃洗法  
(nach Füllwald)

フルトキハ大便ハ硫化蒼鉛ハ爲メニ黒色ヲ呈スルヲ以テ、豫メ母氏ニ注意スペシ。  
次硝酸(撒里矢爾酸)蒼鉛ハ約一年ノ小兒ニハ一回ニ〇・一、二年〇・二、三年—四年〇・三—〇・四ヲ用フベシ、又「タンナルビント」併用スルモ良シ。  
其他蒼鉛製剤トシテハ次ノ如キモノアリ。

「ビスマトーゼ」 Bismutose (硝蒼ト同量)

「ビスマン」 Bismen 哺乳兒ニハ一回ニ〇・二五—〇・五ヲ水劑トシテ用フベシ。

收斂劑ト同ジク分泌制止ノ作用アルハ白陶土Bolus albaニシテ、多量ニ五—一〇瓦ヲ一日數回水劑トシテ服用セシムベシ。

阿片劑ハ下痢ヲ制止スルト同時ニ痛痛ヲ緩解ス、而シテ小兒ニ於テハ殊ニ後ノ場合使

用セラル、コト多シ、然シ極メテ幼少ノ乳兒ニ用フレバ危險ナキヲ保セズ、通常阿片丁、幾ヲ用フ、其用量ハ年齢ノ數ニ等シキ滴ヲ二日量ニシ、鹽里母ノ中ニ入レテ服用セシム、

阿片丁幾

三滴

稀鹽酸

〇・三

單含利別

八・〇

水  
右二日量、一日三回分服(三年ノ小兒)。

痛痛鎮靜ニハ阿片劑ノ他ニ下腹部ニ乾燥セル綱帶ヲ施シ、或ハ温濕布ヲナシ、或ハ熱キ

第六章 一般豫防法及ビ療法總則

粥、灰、爐等ヲ以テ腹部ヲ煖ムルトキハ效アリ。

(九) 催眠劑 Narcotica 劇烈ナル咳嗽刺戟ヲ緩解シ、或ハ催眠藥トシテ用ヒラル、モ、幼少ナル小兒ニハ使用セザルヲ宜シトス。

然シ就中無害ナル「コデイン」ナリ、磷酸「コデイン」ハ哺乳兒ニハ一回ニ〇〇二一〇〇〇五、年長ノ小兒ニハ〇〇一一〇〇一二ヲ一日四回用フ。

鹽酸「モルヒネ」ハ稍年長ノ小兒ニ注意シテ用ヒ得、用量ハ「コデイン」ノ三分ノーフ用フベシ。

(十) 催眠藥 Schlafmittel 催眠藥ニハ種々アレドモ、單ニ神經性兒童ニシテ容易ニ就眠セズ、終夜啼泣シテ家人ヲ妨グルガ如キ者ニハ、臭素劑(臭素加里或ハ曹達)ヲ與フベシ、乳兒ニハ一回〇一—〇二、年長ノ兒ニハ〇五—一〇ヲ與フベシ。

抱水「クローラー」ハ腦膜炎、腦疾患或ハ痙攣等アリテ睡眠ヲ妨グルトキニ用ヒラレ、味ノ不快ナルヲ以テ、灌腸トシテ一回〇三—〇五—一〇ヲ用フ。

近時「ヴエロナール」Vernalハ乳兒ニモ用ヒラル、殊ニ胃腸患者ノ不安ナル睡眠ヲナス者ニハ賞用セラル、灌腸トシテ哺乳兒ニハ〇〇五三年以上ノ小兒ニハ〇一—〇三ヲ温湯ニ溶解シテ用フベシ。

(十一) 強壯劑 Tonica (Roborantia, Alterantia) 強壯ニ資セラルベキ藥劑及ビ方法ハ種々アリ、小兒ニハ大概之ヲ應用シ得、貧血ナル小兒、營養不良ナル小兒、頭痛、食慾不振、睡眠不足ニ溶解除シテ用フベシ。

ニシテ疲勞シ易キ小兒ニハ、強壯劑トシテ鐵劑、砒素劑、沃度劑、規那及ビ磷製劑用ヒラル、是等ハ單ニ藥劑ノ儘、或ハ種々ノ滋養品中ニ混ジテ販賣セラル。

小兒強壯劑トシテノ滋養品ハ「ヒギヤマ」、「サンナトーダン」、「ヘマトバン」、「ソマトーデ」等アレドモ、殊ニ稱揚スルニ足ルモノナシ。

滋養品ノ中、蛋白ヲ主成分トスル製劑ハ、羸瘦ノ小兒ニ對シテ脂肪沈著ヲ増加スト稱スレドモ、是レ何等ノ理由ナキ事ニシテ、何人モ知ル如ク蛋白ニ富ム物質ヲ供給スルトキハ、甚ダ衰弱セル重キ疾病恢復期ノ際ニハ、蛋白停滯ヲ來シ得ルモ、然ラザル場合ニ多量ノ含窒素ヲ供給スレバ、只窒素排泄ヲ增加セシムルニ止マリ、體重增加ニハ更ニ影響ナキモノトス、故ニ以上ノ目的ニ適フ理想的ノモノハ、脂肪及ビ含水炭素ニ富ムモノニシテ類化シ易キ物質ナラザルベカラズ、蓋シ此希望ヲ充タシ得ベキモノハ肝油ナリ。

肝油ノ脂肪ハ甚ダ消化セラレ易ク、其作用ノ卓越ナルヲ認メ得ベシ、但シ其臭氣不快ニシテ小兒ニ嫌ハル、コトアレバ、アラビヤ謹謨末ト共ニ乳劑トシテ用フルカ、或ハ高橋氏改良肝油「スコット」乳葉肝油「ドロップス」ヲ與フベシ。

「アルコホル」性強壯劑トシテハ、葡萄酒、藥劑ヲ混ジタル規那葡萄酒及ビ百弗聖葡萄酒等アリ。

食慾ヲ亢進セシムル作用アルハ複方規那丁幾、林檎鐵丁幾、苦味丁幾等ナリ。

「ペシン」及ビ「鹽酸」リモナードハ食慾不振ノ際、或ハ比較的無關係ナル藥劑ヲ使用セン

トスルニ當リ好ンデ用ヒラル哺乳兒疾患ノ如キ主ニ理學的療法ニ賴ルモノハ、ベブシ  
ン内用ヲ恒例トス。

ベブシンハ一二ヶ月ノ小兒ニハ一回〇・〇五、約一年ノ小兒ニハ〇・一ヲ同量ノ乳糖ト伍  
シテ與フベシ。

鹽酸リモナーデハ次ノ如キ量ヲ混ズレバ、最モ小兒ニ適スルナリ。

稀鹽酸 ○三

單舍 六〇〇 (三年ノ小兒)

水 八〇 右二日量一日三回分服

稀鹽酸 ○四

單舍 一〇〇 (七年ノ小兒)

水 一〇〇 右二日量一日三回分服

右二日量一日三回分服

光線及ビ新鮮ハ空氣ハ身體ヲ強健ニスルニハ必要缺クベカラズ、野外運動、森林生活、高  
地療法ノ如キ已ニ人口ニ膚炎シテ茲ニ嚙々スルノ要ナケム。

水浴ニ關シテハ數言ヲ費スノ要アルベシ、海水浴ハ冷キ海水ノ刺戟ニ依リテ皮膚及ビ  
神經ヲ強固ニスルノ効アレドモ、幼稚ナル小兒及ビ生來薄弱ナル者ニハ行ハシムベカ

ラズ、此代用ハ屋内海水温浴ヲ以テスベシ。

冷水摩擦ハ五六年ノ小兒ニ就テ採用スルヲ安全トス、幼稚ノ兒ニ勵行シテ反ツテ有害  
ナリトス。

海水温浴ハ天然ノ海水ヲ屋内ニ運搬シ來リテ、温浴トスルモノナリ、又人工的ニモ作爲  
シ得、即チ食鹽及ビ海水鹽ヲ以テ一・五—二・〇%ノ温湯ヲ作リ、哺乳兒ニハ攝氏三二—三  
三度稍年長ノ小兒ニハ三〇度ノ溫度トシ、一回十五分—二十十分間、毎日入浴セシムベシ。  
(三)藥劑ノ用量及ビ用法 小兒ノ藥劑ハ大人ノモノト異ニシテ、其用量ヲ知ルコト甚ダ  
必要ナリ、而シテ專ラ體重ニヨリテ規定セザル可ラズ、然レドモ藥劑ニ依リテハ、幼少ナ  
ル小兒ニ於テ比較的多量ヲ使用スルモノ害ヲ及ボサムモノアリ、臭素剤ノ如キ然リ、又  
小兒ニ於テ特ニ感受性ノ強キ藥劑アリテ、少量ヲ用フルモ不測ノ危険ヲ招クモノ莫キ  
ニシモアラズ、即チ阿片、石炭酸、クロハフルム、注意スペキ藥劑ナリトス。

亞片ノ如キハ少量ヲ用ヒタルニ拘ハラズ死ヲ來セシ例アリ、石炭酸モ亦哺乳兒ニハ成ル  
ベク使用セザルヲ好シトス。

效能著シキ藥劑ト雖モ不快ナル味ヲ有スルモノ、食慾ヲ害スルモノハ幼少ナル小兒ニ  
使用スルヲ得ズ、苦味ヲ有スルモノヲ用フルトキハ甘味剤ヲ伍スベシ。

用量。

	一年末満	大人用量
一年以上		
二年以上		
三年以上		
四年以上		
七年以上		
十四年以上		
散劑	通常小兒ニハ全量約〇・五トシ牛乳「スープ」、粘滑汁等ニ混ジテ用フ、哺乳兒ニハ散藥ヲ適當トシ、年長ノ小兒ニハ水劑ヲ適當トス。	$\frac{1}{2}$ $\frac{1}{4}$ $\frac{1}{4}$ $\frac{1}{6}$ $\frac{1}{8}$ $\frac{1}{10}$ $\frac{1}{15}$ $\frac{1}{12}$
オブ	ラートニ入レテ藥劑ヲ飲マシムルハ、五年以上ナラザレバ不可能ナリ。	
錠劑及ビ丸藥	幼少ナル小兒ハ之ヲ嚼ミ潰シ、反ツテ不快感ヲ起シ、或ハ誤ツテ氣道ニ嚥下スルコトアレバ、之ヲ用フルニハ注意スベシ。	
滴劑	少量ノ糖水ニ入レテ飲マシムベシ。	
合劑水劑	小兒ノ年齢ニ應ジテ其量ヲ定ムベシ。	
幼少ナル乳兒	二日量	
一一年	八〇〇	四〇〇瓦
一一年	一〇〇〇	六〇〇
一一年	一二〇〇	七〇〇
普通概算ニテ使用スル量ハ大略次ノ如シ		
一食匙	一五〇	
一小兒匙	七五	
一茶匙	四〇一五〇	
一刀尖	一〇一二〇	
含嗽劑	四年以上ノ小兒ニアラザレバ用ヒ難ク、幼兒ニ用フルノ必要アルトキハ、布片及ビ毛筆ヲ以テ口腔ヲ拭拂或ハ塗布シ、若クハ吸入劑トシテ與フベシ。	
吸込法	小兒療法ニ於ケル一大利器ニシテ必要缺クベカラザルモノナリ、疾患ノ輕重ニ應ジテ一回二〇〇〇乃至六〇〇〇瓦ノ溶液ヲ吸入セシム、溶液ハ普通一%ノ重曹水ヲ以テス、時間ハ概ネ一〇一二〇分間トシ、回數ハ輕重ニヨリ一日二三回ヨリ十數回ニ及ベク、吸入器ト小兒顔面トノ距離ハ一尺内外ナルベシ。	
灌腸劑	腸洗滌ノ目的トシテ哺乳兒ニハ液量一〇〇〇一二〇〇〇瓦迄、稍年長ノ小兒ニハ一〇〇〇〇瓦迄ヲ用フ、排便ノ目的ニハ「グリセリン」ヲ水ト等分ニシテ一回二〇五一〇〇瓦位ヲ用フ。	

皮下注射法 Subkutane Injektionen 大人ト同ジキモ、其部位ハ四肢ヨリモ胸ニ於テ大胸筋ノ部位ヲ擇ブベシ。

筋肉内注射法 Intramuskuläre Injektionen 大腿或ハ臀筋ヲ擇ブベシ。

靜脈内注射法 Intravenöse Infusionen 年長ナル小兒ニハ行ヒ得ベカラザルニアラザルモ、哺乳兒及ビ幼稚ノ小兒ニ於テハ靜脈ヲ透見スルヲ得ザルト、靜脈管腔狹クシテ「カニユ」レヲ入ル、ニ適セザルトニ因リ行フコトヲ得ズ。

## 各論

### 第一編 初生兒疾患 Krankheiten der Neugeborenen

#### 第一 早產兒 Frühgeburt

早產兒ナル者ハ未熟ノ有機體ヲ以テ子宮外ニ於ケル生活ノ大任ヲ果サルベカラズ、即チ食餌ヲ消化シ、同化シ、更ニ外界ヨリ供給セラレタル勢力ヲ變換シテ以テ有機體ヲ維持スル爲メ、呼吸作用ト自家體温及ビ滲透張力ノ保持トヲ務メザルベカラズ、斯ノ如キ使命ハ完熟セル初生兒ト雖モ重大ナル責務ナリ、況シヤ生活力薄弱ナル早產兒ニアリテハ實ニ至難ノ事ニ屬ス、其理由ハ次ノ如シ。

I. 體表面積ハ完熟シタル初生兒ニ比スレバ比較的尙ホ大ナリ、從ツテ體温放散ハ一層強ク、又注意スベキハ皮下脂肪組織ノ發達缺乏スルコトナリ。

II. 未熟ノ初生兒ニアリテハ調節作用不充分ニシテ、體表面ヨリノ體温奪取甚シキコト。

III. 消化作用裝置ノ發育不充分ニシテ、強度ノ勢力<sup>スコル</sup>損失ヲ補フ能ハザルコト等ナリ。

更ニ吾人ノ注意スベキハ肺、臓器、官能不全ナリトス、早產兒ニアリテハ胸廓及ビ横隔膜

ノ運動薄弱ニシテ其範囲モ少ナク、從ツテ呼吸ハ淺表ニシテ不充分ナリ、健全ナル初生兒ニ見ルガ如キ叫喚ナク、唯僅ニ呻吟スルノミ、輕度ノチアノ一ゼ現ハレ、冷却スルトキハ益顯著トナル、早產兒ハ屢々蒼白ニシテ冷却シ、辛ウジテ呼吸スルモノヲ見ルコト多シ、肺臟ニ於テハ運動缺乏セル部分ニ膨脹不全竈アリテ、脊柱ノ附近ニ沿フテ左右ニ存ス、此部ハ換氣不良ニシテ血液循環ニモ乏シキガ故ニ肺炎ヲ起シ易シ、之ヲ脊柱周圍肺炎Paravertebral Pneumoniteト稱ス、早產兒ハ僅微ノ事ニテモ呼吸困難ヲ來シ、氣管枝加答兒アレバ忽チ進行シテ肺炎トナル、尙ホ危險ナルハ化膿性傳染ニ罹リ易キコトナリ、風邪ニ罹レバ廣汎ナル氣管枝加答兒トナリ、直チニ中耳炎ヲ合併ス、此ノ如ク化膿性疾患ヲ生ズルトキハ忽チ死シ、死セザルモ甚シキ體重損失ヲ來スナリ。

豫後單ニ體重ヲ標準トスルノ外ナシ、體量一五〇〇—二〇〇〇瓦以上ノ胎兒ハ生育シ易ク、一〇〇〇—一五〇〇瓦ノ者ハ生育甚ダ困難ニシテ、一〇〇〇瓦以下ハ者ニアリテハ満足ナル結果ヲ得ルコト稀ナリ、但妊娠六ヶ月ニシテ七五〇瓦ノ體重三五仙迷ノ身長ヲ以テ生下シ、而シテ發育ヲ遂ゲシ除外例アリトス。

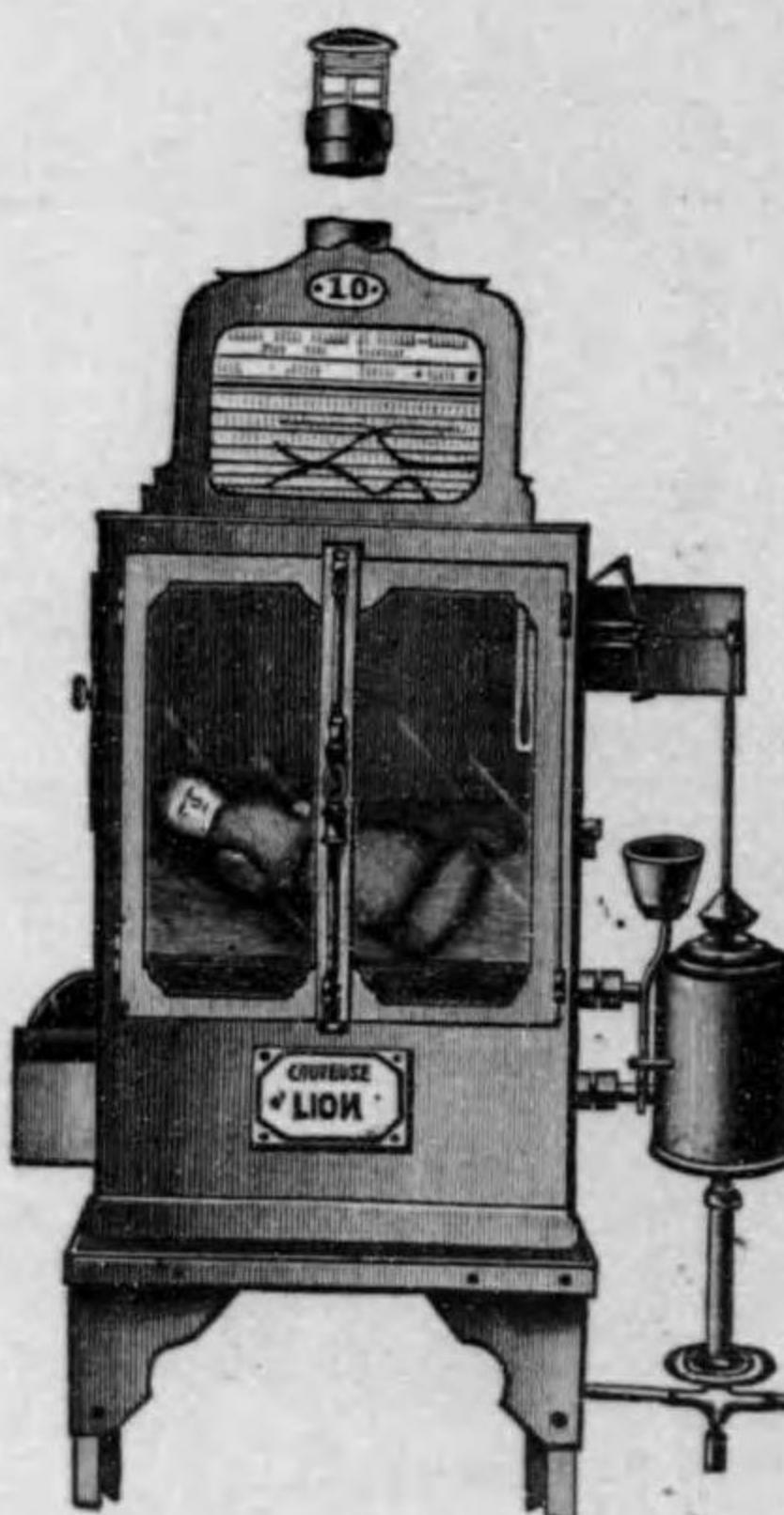
豫後ハ體温保持ガ正當ニ行ハル、ヤ人乳ヲ得ラルベキヤ、充分ナル看護ヲ以テ傳染ニ對シテ注意セラルベキヤ否ヤニ關スルコト大ナリ。

## 療法

一、保溫裝置 保溫裝置中、特ニ早產兒ノ養護ニ向ヒテ案出セラレタルモノヲ保溫器タ

「ヴェース」Courveuseトス、此裝置ハ孵卵器ノ原理ヲ應用シタルモノニシテ、通常火焔ヲ以テ熱氣ヲ送リテ箱内ノ空氣ヲ温メ、調節器ニ依リテ常ニ三十度位ノ溫度ヲ保タシム、箱内ノ空氣ヲ乾燥セシメザラムガ爲メ、濕潤シタル海綿ヲ換氣裝置ノ入口ニ插置シ、換氣ト同時ニ濕潤シタル空氣ヲ送入スル仕掛ナリ。

第三十  
一  
圖  
ス  
エ  
ク  
シ  
オ  
リ  
第  
三  
十  
一  
圖



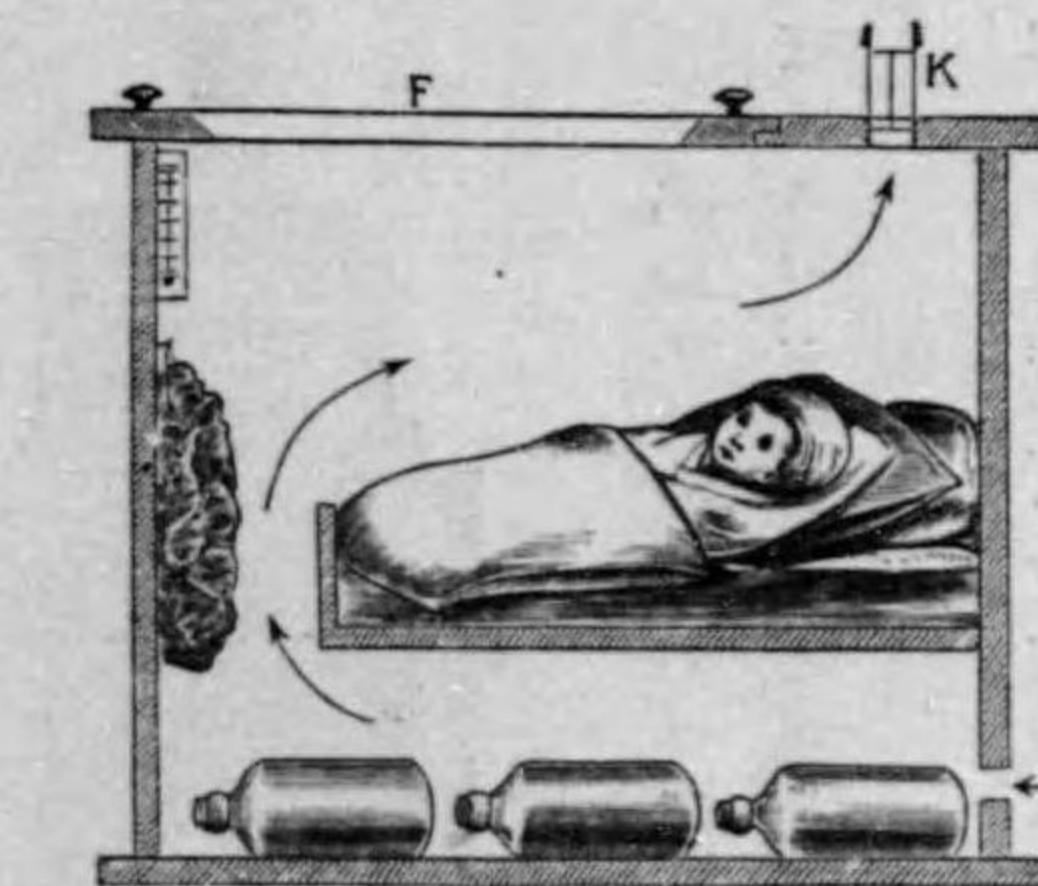
「ヴェース」ニ諸種  
アリ、插圖ヲ參照ス  
ベシ。

保溫器ノ代リニテ  
ルモハオール Ter-  
mophore或ハ湯婆ヨシブ  
用フ、湯婆ハ我邦ニ  
テ屢用フル陶器或

ハ金屬製ノモノニ熱湯ヲ入レ、左右ニ二個ヅツ蒲團ノ中ニ插入シ、一時間毎ニ一個ヅツ交在中ノ湯ヲ交換スベシ、又麥酒ノ空キ壺ヲ應用シ、或ハ護謨製舶來湯婆ヲ用フルモ可ナリ。

早產兒ヲ保溫器中ニ何時頃マデ留置スペキヤニ就テハ、議論ノ岐カル、所ニシテ、大體二説アリ。

第三十二圖

スーエヴク氏ルーニルタ  
(nach Fröhwald)

硝子蓋(F)ヲ有ス  
木製ノ輕便ナル  
モノニシテ空氣ハ  
調節裝置ヲ具フル  
氣孔(△)ヨリ入り  
湯瓶上ヲ經由シテ  
溫潤セル海綿及ビ  
驗溫器ニ沿フテ進  
行シ而シテ排氣孔  
(K)ヨリ出ツ

一說ハ乳兒ノ體溫ガ一定  
シテ日々左シタル動搖ナ  
ク、常ニ三十六度八分乃至  
三十七度ノ間ヲ往來スル  
ニ至リ、即チ單調熱型ヲ示  
スニ至ラバ保溫器ヨリ出  
スペント云ヒ、他說ハ體溫  
ヲ標準トセズシテ、體重ノ  
增加ガ一樣ニ整フニ至ラ  
バ保溫器ヲ要セズト云フ  
ナリ。

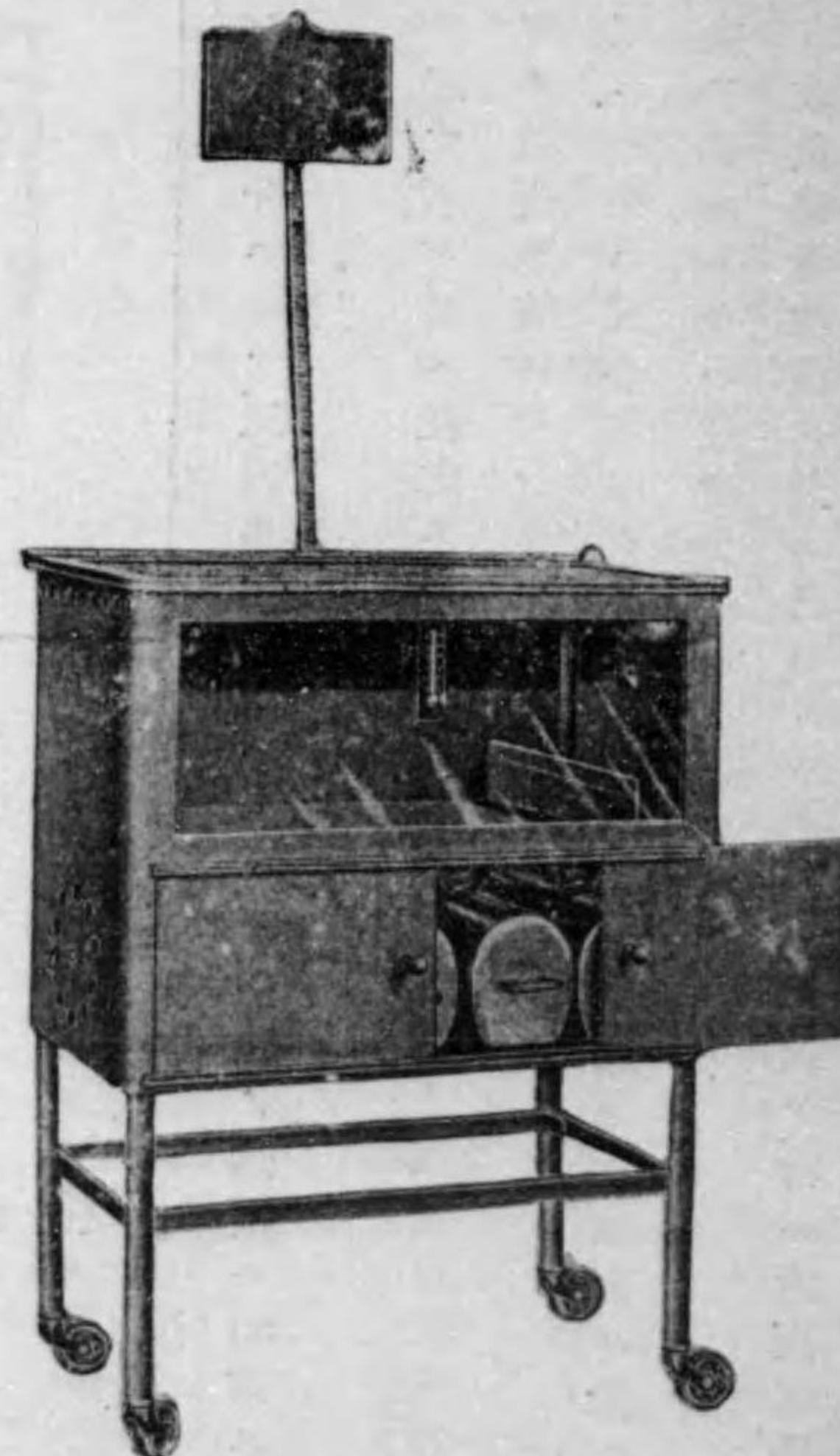
ザルグー Salgo 氏ハ後者ニ賛シテ體溫ヲ標準トスルノ不可ナルヲ唱フ、然レドモ吾人ハ  
其折衷說ヲ採リ、體重ノ增加一定シ、體溫モ亦「モノテルミー」トナルヲ待チテ保溫器ヨリ  
取り出スノ安全ナルニ如カザルヲ信ズ。  
勿論保溫器ヨリ取り出シ、急劇ニ常温ニ持チ來ルハ甚ダ危險ニシテ、徐々ニ溫度ヲ低メ、  
終ニ室温ニ於テ保護シ得ルニ至ラシムベシ。

## 二、栄養法

早產兒ハ殊ニ母乳ヲ必要トシ、己ムヲ得ズンバ乳母ヲ採用スペシ、早產兒ニ

第三十三圖

スーエヴク氏ツンレ

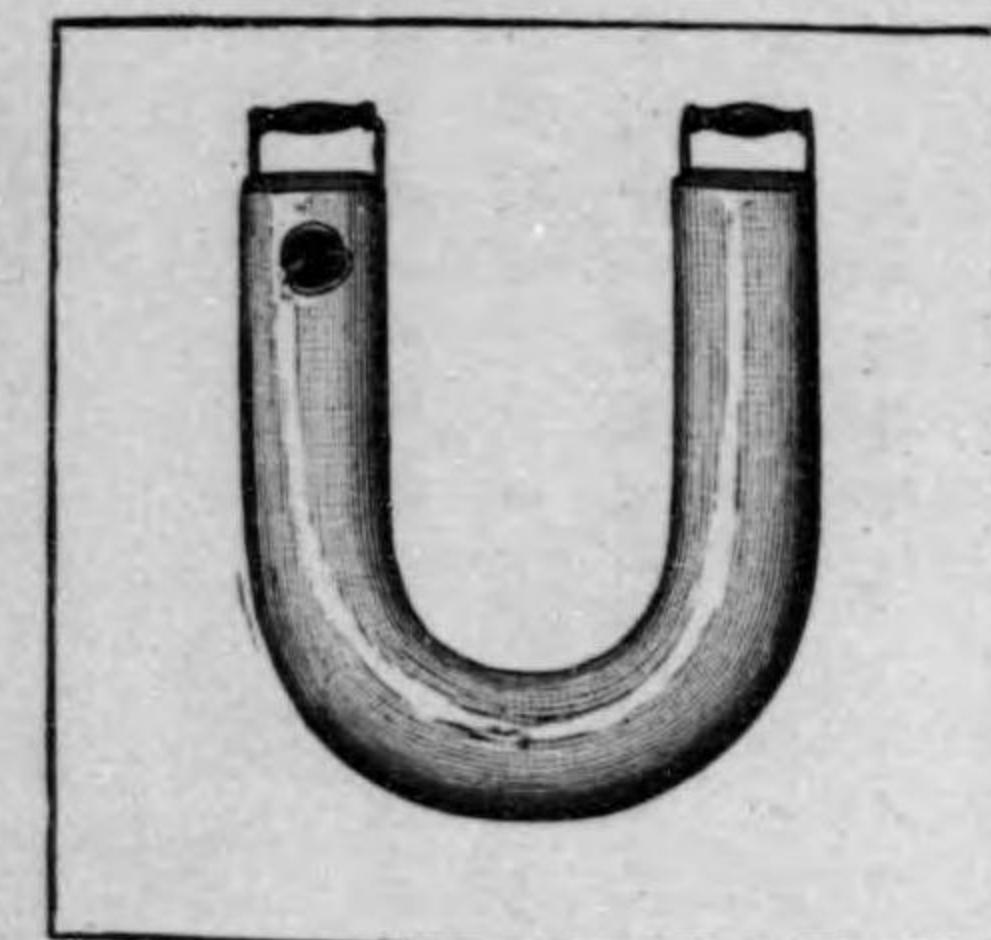


(nach Bendix)

人工栄養法ヲ施スハ稍成成長セル後ニスベシ、初期ニ於テハ效果ヲ擧ゲ得ルコト稀ナリ、  
最初母乳ハ搾取シタルモノヲ「ビベット」或ハ茶匙ヲ以テ少量づ、灌入スペシ、早產兒ノ弱  
キ者ハ到底充分ニ哺乳スル力ナキヲ以テ、傍ラ乳汁分泌絶止スルヲ防グ爲メ、哺乳力強  
キ健全ナル乳兒ヲシテ乳房ヲ吸ハシメ、然ル後ニ乳ヲ壓搾スペシ、斯クシテ得タル乳汁  
ハ脂肪ニ富ミ、最モ滋養價多キモノナリ。

乳汁ノ量ニ就テハ、早產兒ハ比較的大ナル體表面ヲ有スルヲ以テ、體重一基瓦ニ就テ一

第三十四圖 婦湯形字U



(nach Pfaundler)

三〇一一五〇燃價ヲ要ス、故ニ理論上ヨリ  
スレバ、一一〇〇瓦ノ體重ヲ有スルモノハ  
 $140 \times 1.2 = 168$ 燃價ニシテ、母乳二四〇立方  
仙迷ニ相當シ、一五〇〇瓦ノ體重ヲ有スル  
モノハ約  $130 \times 1.5 = 195$  燃價ニシテ、母乳  
乳ヲ供給スレバ充分ニシテ、三四週間ヲ經テ、初メテ上述ノ燃價ニ相當スル乳汁ヲ與フ  
ベシ。

三、其他肺炎ヲ起サザル様ニ注意スルコト肝要ナリ、僅微ノ氣道炎症モ等閑ニ附セズシ  
テ、直チニ適宜ノ治療ヲ施スベシ。  
四、化膿性炎症ニハ特ニ戒心スベシ、生活力薄弱ナル早產兒ハ細菌ニ對シテ抵抗力弱ク  
一タビ其感染ヲ被ルトキハ危險ナリ。  
臍帶ハ容易ニ敗血膿毒性症ヲ起ス門口トナリ得ルヲ以テ、常ニ清潔保持ニ注意スベシ。  
中耳炎モ亦屢々起易シトス。

猥リニ拙劣ナル口腔内洗滌ヲ行ヒテ粘膜ヲ損フコト勿ルベシ。

五、腹水腫ハ早產兒ノ養護中ニ偶發スル疾病ナレドモ、吾人ノ治療ヲ施ス餘地ナキヲ憾  
トス。

六、忽布滿氏液ノ如キ興奮劑ヲ用ヒ、先天微毒ノ症候アレバ其處置ヲナスベシ。

## 第二 假死 Asphyxie

初生兒ノ呼吸極メテ微弱トナリ、若クハ休止シ、酸素ノ供給殆ンド絶エタルカ或ハ全ク  
絶エタル時、乃チ又炭酸瓦斯放散ノ障礙セラレタル狀態ヲ名ケテ假死トナス、斯ル場合  
之ヲ放置スレバ、自ラ窒息死ニ導クナリ、假死ヲ先天性假死ト後天性假死トニ區別ス。  
(一)先天性假死 Angeborene Asphyxie

猶ホ母體内ニ在ル胎兒、其出產ニ先チテ兩者ノ間ニ血液ノ循行障礙ヲ受ケ、酸素ノ供給  
不充分ナル時ニ見ルモノニシテ、其原因ハ母體ノ側ニアリテハ早期胎盤剥離陣痛微弱  
ノ爲メ臍血管ニ血行障礙ヲ起シタル場合、尙ホ諸種母體疾病ノ際起ル、酸素ノ缺乏ハ胎  
兒ノ呼吸中樞ニ一種ノ刺戟ヲ與ヘ、胎兒ハ早期呼吸ヲ營ミ、羊水ハ口腔ヨリ氣道ニ進入  
シ、而シテ之ヲ閉塞シ、胎内ヲ去リテ空氣中ニ來ルモ呼吸作用ヲ營ムコト能ハズ、之レ則  
チ假死ナリ、此狀態ハ兒科醫ヨリモ寧ロ產科醫ノ屢々遭遇スル所ナリ。

病理解剖

窒息死ト均シク血液ハ暗黒色且流動性ニシテ、右心及ビ之ニ續ク靜脈ハ充

假死

初生兒疾患

一二四

盈シ、内臓諸器ニハ充血及ビ小出血竈アリ、肺臓ハ無氣ニシテ其質緻密、灰白赤色ヲ呈ス。

症候 第一度、即チ輕症假死 Blasser Scheintodニ於テハ、顔面ニ「チアノーゼ」アリ、眼瞼結膜鬱血シ、心音及ビ臍脈搏動ハ明ラカニ認メ得ルト雖モ緩徐、皮膚ノ知覺、筋肉ノ緊張力亦存シ、呼吸ハ淺表性ニシテ聽診上偶々水泡音ヲ聽ク、指頭ヲ口中ニ插入スルカ、或ハ皮膚ニ刺戟ヲ加フルトキハ、尙ホ反應アルヲ認ムベシ。

第二度、即チ重症假死 Weisser Scheintodハ一見屍體ノ如ク、皮膚蒼白ニシテ反射興奮性及ビ筋肉ノ緊張力消滅シ、心臓力ハ微弱トナリ、呼吸運動ハ全ク絶止ス。

豫後 概シテ輕度ハ佳良ナルモ、強度ハ頗ル疑ハシトス。

療法 豫防方法トシテハ出産期ニ於ケル諸種ノ障礙ヲ除去シ、速ニ分娩ヲ終ラシムルニアリ、既ニ假死狀ニ在ル初生兒ニ對シテハ、直チニ口腔、咽喉ニ附著セル粘液ヲ指頭ヲ以テ拭除スベシ、輕度ノモノハ單ニ之ニ依リ、又同時ニ皮膚刺戟ヲ與フルニ依リテ呼吸運動ヲ催促シ能フ、然シ多クノ場合ニハ間断ナク強キ刺戟ヲ皮膚ニ加フルヲ要ス、或ハ温浴ニ入レ、或ハ温浴ト冷浴トヲ交互ニ取ラシメ、時ニハ温浴中ニ於テ其胸部ニ冷水ヲ灌漑スル如キノ方法奏效スルコト少ナカラズ、斯クシテ死兒ノ如ク見エシ者ハ高聲ニ涕泣シ、深呼吸ヲ營ムニ到レバ、其目的ヲ達シ得タルナリ。

强度ノ者ニ對シテハ、ネラトン氏「カーテル」ヲ以テ上氣道ニ蓄積セル粘液等ヲ吸出シ、次デシユルツエ氏人工呼吸法ヲ行フベシ、其法タル第一動トシテハ、術者ハ自己ノ脚ヲ



第三十五圖  
法吸呼工人氏エツルユン

(nach Filatow)

展開シテ立チ、示指ヲ兒ノ後方ヨリ腋下ニ入レ、拇指ハ肩ヲ越エテ前方鎖骨ニ及ブ、爾餘ノ三指ハ之ヲ捕ヘテ兒ノ背面ニ斜ニ當テ、決シテ側方ヨリ壓ヲ加フルコト無キ様ニシ、術者ト同シク前方ニ向ケテ懸垂ノ位置ニ

兒ヲ支持ス、第二動ハ人工的呼氣ヲ目的トシテ、兒體ヲ懸垂ノ位置ヨリ高ク頭上ニ舉揚スレバ、兒ハ脚ヲ上ニシテ其頭ハ術者ノ頭ト相對ス、第三動ハ人工的吸氣ヲ目的トス、再ビ兒體ヲ急ニ下降シテ舊位置ニ復セシム、茲ニ於テ少憩シ、此方法ヲ反復スルコト七八回、次デ兒ヲ温浴中ニ蘸シ、更ニ振動法ヲ始メ、斯クシテ遂ニ假死兒ハ號叫シ、皮膚發赤シ、斷續的ノ呼吸ヨリ正型ノ呼吸運動ヲ營爲スルマデ持続スベシ、注意ヲ要スベキコトハ、其仕方粗暴ナレバ時ニ鎖骨骨折ヲ起シ、又内臓ニ出血ヲ來スコトアリ、呼吸正整ニナリシ後ノ手當トシテハ、患兒ノ臥床ヲ溫暖ニ保チ、絶エズ呼吸ノ狀況ヲ注視シ、偶々温浴ヲ取ラシムルニアリ。

(二)後天性假死 Erworrene Asphyxie 肺萎縮 Atelktase

原因 出產後ニ於テ假死狀態ヲ起ス原因トシテハ、中樞神經系循環器系及ビ呼吸器系ノ疾患ノ爲メ酸素ノ供給不充分ナルトキ、尙ホ甲狀腺、胸腺肥大等ノ爲ニ上氣道壓迫ヲ假死

受タルトキ、其他畸形、出産時ノ外傷ヲ擧グベシ。

此種ノ假死ハ概々出産後間モ無ク起ル、偶々約一週日ヲ經テ起ル、早產兒或ハ高度ノ栄養障礙ヲ起セル者ニテハ、發作性ニ假死狀態ヲ起スコトアリ。

症候 原因ノ如何ニヨリテ多少ノ差アリ、分娩後一旦呼吸ヲ營ミシ初生兒ガ數時間乃至數日ノ後ニ呼吸淺表トナリ、皮膚蒼白、輕度ノチアノーベ起リ、顔貌無慾狀ヲ呈シ、脈搏微弱トナリ、體温ハ常温以下ニ位シ、大聲ヲ放チテ叫ブコトナク、只呻吟スルノミ、嗜眠状ニシテ刺戟ニ對シ反應弱ク、哺乳惡シ。

豫後 不良殆ンド總テノ場合ハ短時間ノ後ニ死ス。

療法 呼吸器及ビ循環器ニ就テ先天性畸形ヲ認メザルモノニ向ヒテハ、極力呼吸運動ヲ衝動スペシ、温浴ト冷浴トノ併用、若クハ温浴内ノ冷水灌漑ヲ持續スペシ。

### 第三 初生兒「メレーナ」*Melaena neonatorum*

稀有ナル疾病ニシテ約千人中一人ノ割合ニ見ル從來初生兒「メレーナ」ト稱フルモノハ、消化管ニ多量ノ出血アリテ、暗黒色ノ血便ヲ排出スルヲ以テ特徴トシ、且屢々吐血ヲ伴フ、元來本病ハ一症候的疾患ニ過ギズシテ、本態ニ於テ獨立シタル病ニ非ザルナリ。

原因 兹ニ注意スペキハ、真ニ胃腸部ニ出血アルニ非ズシテ、初生兒ハ其口腔又鼻腔ノ出血ヲ嘔下シ、然ラザレバ母體乳腺ノ出血ヲ嘔下シテ血便或ハ吐血トシテ出スコトアリ。

リ之等ハ假性「メレーナ」*Melaena spuria* ト稱シ、真性「メレーナ」*Melaena vera* ト區別スペキモノトス。

真性「メレーナ」ト稱スペキ者ニ在リテモ亦其原因一樣ナラズ、從來病理解剖上、出血ノ主ナル原因ト目セラル、ハ、胃又十二指腸部時ニハ食道ニ於ケル潰瘍ナリトス、一步進んで此潰瘍ノ成生ハ血栓ニ因ルト云フ說アリト雖モ、尙ホ全ク不明ノ中ニ在リ、出血ヲ促進スル、直接ノ動機トシテハ、臍帶壓迫假死、心臟異常ニ因ル血行障礙、門脈系統ニ於ケル充血、肝臟微毒、其他微毒性及ビ敗血性ノ血管疾患等ナリ、即チ血管ニ於テ既ニ或ル病的變化ヲ起シタルモノニ對シ、血行障礙ノ現ハレ來ルトキハ調節ヲ營ムコト能ハズ、其結果トシテ出血ヲ惹起スル如シ。

病理解剖 常ニ一致ノ所見ヲ呈スルト限ラズ、最モ重キヲ措カル、モハハ胃、十二指腸部ニ見ル潰瘍ナリ、粘膜ノ表皮剥離ニ止マルコトアリ、點狀ノ出血竈ヲ見ルコトアリ、單ニ充血ニ止マルコトアリ。

症候 通常生後二日乃至四日ニ現ハル時ニハ第一日、稀ニハ尙ホ遲レテ來ル、屢々健康ノ外觀ヲ有スル者ニ突然起ル、其症候初メ不分明ノコトアレドモ、早晚黒變セル血便ヲ排出ス當初多量ノ暗黒色ナル吐血ヲ來スコトアリ、而シテ吐血ハ一回ニシテ止マルコトアリ、引續キ數回ニ見ルコトアリ、一回ノ吐血ダモ見ザルコトアリ、母氏襪襪ヲ交換スルニ際シ、血便排出ヲ認メテ愕クフ恒例トス、兒ハ不安ノ狀ヲ呈シ、偶々體温上昇ス、其ノ血液

損失ノ程度ニ從ヒ、貧血又衰弱アリ、皮膚ハ蒼白トナリテ冷却シ、脈搏殆ンド觸レザルニ至リ、體温ハ下降シ、呼吸淺表トナリ、虛脱状態ニ陷リ、一兩日ニシテ斃ル、時トシテ其他ノ部位殊ニ皮膚及ビ臍部ニ出血尙ホ黃疸チアノーゼヲ伴フコトアリ。

診斷 初生兒ニ血便、吐血アルヤ、其ノ出血部ハ果シテ胃腸部ニ存スル乎、假性「メレーナ」ニ於ケル如ク他原因ニ由來スル乎ヲ確メザルベカラズ、先づ初生兒ノ鼻腔、口腔、咽頭ヲ検査シ、是等ノ部位ニ血液附着ノ有無ヲ確メ、母或ハ乳母ノ乳腺ヲ検査スルヲ要ス、又稀有ノ初生兒腔出血ニモ注意ヲ及ボスベキコトアリ。

豫後 假性「メレーナ」ハ一般ニ一時性ノモノニシテ、後害ヲ貽スコト少ナシ、然シナガラ偶々衄血ニ種々ノ處置ヲ施スニモ拘ハラズ、止血セズシテ逐ニ致死セルノ例アリ、真性「メレーナ」ハ其豫後殆ンド總テノ場合ニ不良ナリトス。

療法 假性「メレーナ」ニ對シテハ、出血ノ源ヲ除去スルニ勉ムベシ、真性ノモノニ對シテハ、先づ體温ノ下降ヲ防ギ、常温ニ保持セシムベシ、且安靜ニシ、胃部ニ水囊ヲ貼ス、而シテ他方ニハ止血ニ向ヒ努ムベシ、此目的ヲ達スルニハ「グラチン」ヲ最良トス、メルク製ノ滅菌「グラチン」ヲ二乃至五%ニシ、一二時間毎ニ十瓦ヲ口ヨリ、或ハ二十乃至四十瓦ヲ數回灌腸トシテ用フ、出血強キトキハ皮下注射ヲ行フベシ、即チ2%ノ液十五乃至二十五瓦ヲ上腿ノ皮下ニ注入スペシ、注入ニ由リテ「テタヌス」様ノ症狀ヲ繼發セル報告アレバ、殊ニ膠液ノ精良ト其消毒トニ豫メ留心セザル可カラズ、其他内用トシテハ一%ノ過格魯

兒鐵液、1%ノ「エルゴチン」溶液又〇・〇一ヲ一回量トシ、皮下注射ニ使用ス、其他食鹽水ノ腸洗滌及ビ皮下注入賞用セラル、栄養トシテハ搾リタル母乳ヲ匙ヲ以テ少量宛與フルヲ可トス。

(附言) 吾人ハ東京醫科大學小兒科教室ニ於テ剖檢診斷ハ輸膽管閉塞ニシテ、生前メレーナ症候ノ下ニ經過セル一乳兒ヲ見タリ。

#### 第四 初生兒黃疸 Icterus neonatorum

初生兒ノ多數(凡ソ八〇%)ハ出產後第一日、或ハ第二日ニ於テ皮膚一般ニ黃色ヲ呈シ、數日乃至一二週ヲ經過シテ自然ニ消退スルヲ恒トス、此際脈搏、體温ニ變化無ク、尿及ビ糞便モ亦多クハ尋常ナリ、故ニ初生兒黃疸ヲ生理的現象ト認ムルナリ。

原因 確乎タル成立ノ原因ハ猶ホ不明ナリ、以前ハ血色素或ハ破壊セル血球ノ吸收ニ由リテ起ルト解釋セシモ (Hämatogene Theorie)、尿及ビ組織ニ於ケル所見ヨリシテハ、其ノ原因膽汁ノ吸收ニ由ルガ如シ、最近クネツベルマッヘル Knöpfelmacher 氏ノ説ニ據レバ、肝臟ニ於ケル分泌異常ニ因リ、生後ニ多量ノ膽汁分泌ヲナシテ惹起スト云フ (Hepatogene Theorie)。

症候 皮膚ノ黃染ヲ主徵トス、其度合ハ場合ニ應ジテ強弱アリ、輕度ノモノニアリテハ單ニ胸部及ビ顔面ノ皮膚ニ限ラレ、且指壓ヲ以テ其部ノ血行ヲ防止スルニアラザレバ

第三十六圖  
初生兒黃疸之尿沈渣 (nach Finkelstein)



發見セラル。

上記生理的ニ見ルモノ、外、先天的ニ肝臓、輸膽管等ニ於ケル異常、即チ狭窄、閉塞或ハ肝臓ノ微毒性疾患、敗血性傳染ニヨリ症候的ニ起ル黃疸アリ、之等ハ悪性ニシテ豫後ハ概ネ不良ナリトス。

**療法** 生理的ノモノハ特殊ノ治療法ヲ施サズシテ自然ニ消滅スレドモ、症候的ニ來ルモノハ其原因ヲ究メ、之ニ對スル處置ヲ施サムルベカラズ。

### 第五 初生兒紅斑 Erythema neonatorum

初生兒ニハ分娩直後ニ生理的トシテ皮膚充血アルヲ恒トスレドモ、其高度ナルモノハ紅斑ヲナシテ分娩直後、或ハ數日ノ後ニ發現ス。

**原因** 胎兒ハ分娩ニ依リ子宮内ヨリ外ニ出デ、零圍氣ノ烈シキ變化ニ遭ヒ、乃チ溫度ノ激變ニ刺戟セラレテ之ヲ起スモノ、如シ、皮膚ノ強キ發赤ハ皮膚血管ノ充血ニ由來シ、通常全身ニ瓦リ一樣ニ起ル、粘膜モ亦一般ニ發赤ス。

經過 一兩日ヲ經レバ自然ニ消去スルヲ例トス、發赤ノ跡ハ皮膚糠狀ニ剝離シ、或ハ小部落のニ上皮剥脫ヲ見ルコトアリ、剥脫ハ殊ニ頭部ニ於テ強シ。

**療法** 亞鉛華、ワゼノール粉末 (Vaselineopuder) ヲ撒布ス、上皮ノ剝離セル處ニハ油劑ヲ塗布シ、頭部ニハ必要ニ應ジ硼酸(ワゼリン)ヲ貼布スベシ。

### 第六 初生兒鞏硬病 Sklerema neonatorum

初生兒鞏硬病ハ稀有ナリ、皮膚或ハ皮下結締組織一樣ニ硬變腫張シテ、高度ノ場合ニハ恰モ凍結セルガ如シ、著シキ體温ノ下降ヲ伴ヒ、概シテ死ノ轉歸ヲ取ル、而シテ初生兒浮腫 Oedema neonatorum トハ全ク區別スベシ。

**原因** 全ク不明、每常生活力ノ虛弱ナル者、殊ニ假死状態ニアル早產兒ニ之ヲ見ルナリ。  
**症候** 體力虛弱又ハ心臓力微弱ノ初生兒ハ體温常ニ頗ル低ク、活力ニ乏シク、溫度ノ調節不充分ニシテ、栄養モ亦著シク障礙ヲ受クル者ナリ、而シテ此ノ如キ早產兒ハ其四肢ノ皮膚ハ皺襞多キヲ常トスレドモ、本症ニアリテハ反ツテ強ク緊張シ、平滑ニシテ、指頭ヲ以テ摘舉スルコト困難ナリ、此變化ハ最初下肢ニ現ハル、ヲ例トス、足背、腓腸部、大腿ノ皮膚先づ變化ヲ呈シ、進ンデ臀部、腰部ニ及ビ、尙ホ超エテ上方ノ皮膚ニ達シ、遂ニ全身ニ瓦ルコトアリ、患部ノ皮膚硬度ハ益加ハリ來リ、恰モ木石ニ觸ル、ノ感覺ヲ起スニ至ル、皮膚ハ汚穢、黃色ヲ呈シ、四肢末端ニ「チアノーゼ」現ハル、コトアリ、稀ニ硬變ハ頰、口唇ニ發シ、牙關緊急ノ狀ヲ生ジ、哺乳不可能ニ陷ル。

**病理解剖** 皮膚殊ニマルビーギ氏層ハ硬變シ、細胞ハ殆ンド見ル可カラズ、皮下脂肪組織間ニハ多數ノ密生セル結織組織アリ、脂肪ハ著シク減少シ、其顆粒小ニシテ且萎縮ス、皮下血管ハ管腔甚ダ縮小ス、約言スレバ皮膚ニ乾燥及ビ肥厚アルト共ニ、脂肪組織ニハ萎縮アリ。

**鑑別** 初生兒浮腫ハ先天性心臓瓣膜病、腎臓炎及ビ惡液質ニ之ヲ見ル、軟ニシテ鞏硬病ト觸覺ノ趣ヲ異ニス、温ヲ加フルモ消退スルコトナシ、又浮腫ハ陰莖、陰囊ニ著シク現ハル、モノナレドモ、鞏硬病ニアリテハ此ノ如キコトナシ。

豫後 殆ンド總テノ場合ニ不良ナリ。

**療法** 栄養狀態ヲ注意スベシ、本症疑似ノ場合ニ温熱供給ニ賴リテ快方ニ向フコトアリ、故ニ先づ本症ニ試ムベキハ諸種ノ保溫法ナリ、心臓ノ衰弱、肺萎縮等ニ對シテハ適應ノ處置ヲ施ス。

#### 處方例

甘硝石精

硝砂加亞涅斯精 各五〇

右每一時數滴、宛糖水ニ混和シ與フ。

栄養物ハ「ゾンデー」ニテ送入スルヲ良シトス。

### 第七 分娩時外傷 Geburtstraumen

胎兒ハ其分娩ニ際シ母體ノ產道ヲ通過スルトキ諸般ノ障礙ニ遭遇ス、而シテ外傷ヲ受クルコト決シテ少ナカラズ、殊ニ難產ニシテ產婆或ハ醫師ニ賴リテ處置セラレ、以テ漸ク分娩シ得タル者ニ多シ、其外傷ハ上皮剥離ノ如キ輕度ノモノヨリ生命ニ關スルホド重大ナル損傷等ナリ。

#### (一) 壓迫印象 Druckmarke

主トシテ初生兒頭蓋部ニ見ル、胎兒ノ頭部分娩ニ際シ薦骨岬 Promontorium ノ壓迫ニ因リテ生ズ、壓迫ヲ受クル時間長クシテ其部ノ皮膚栄養害セラル、トキハ遂ニ壞死ニ陷ル

分娩時外傷

コトアリ。

概シテ放置セバ自然治癒ニ赴ク。

(二) 骨外傷 Knochenverletzung

胎兒ノ分娩時ニ受クル骨損傷中、最モ多ク見ルハ鎖骨々折 Fraktur der Clavicula ナリ。爾餘ノ長管骨ニモ骨折ノ起ルコトアレドモ、鎖骨ニ比スレバ遙ニ少ナシ。原因ハ手術時ノ外傷ヲ常トスレドモ、偶自然分娩ヲ經由セシ者ニ同骨折ノ來ルコトアリ。

又屢諸關節ニ脱臼 Luxation ヲ見ル。

頭蓋骨部ニ於ケル外傷ハ殊ニ重要ナリ、其他頭蓋骨轉移、頭部形態ノ異常等アレドモ、產科醫ノ參與スルモノナレバ、茲ニハ之ヲ略ス。

(三) 產瘤 Caput succedaneum, Geburtsgeschwulst

分娩ニ當リテ胎兒ノ前行部位ハ最モ強ク抵抗ヲ受クルモノナリ、其前行部位頭部ナルトキハ屢々壓迫ノ爲ニ柔軟ナル腫瘍ヲ生ズ、頭瘤 Kopfgeschwulst 之ナリ、即チ頭部ト骨盤トノ大サノ關係ニ不調和ノアル時、若クハ分娩ニ長時間ヲ要セシ時ニ於テ生ズ。

產瘤ノ本態ハ頭蓋骨膜ト腱膜 Galea トノ間ニ於ケル血性漿液質ノ浸潤ナリ從ツテ其範圍廣大ニシテ骨縫合ニ關スルコトナシ、屢々同時ニ骨膜、腦膜ニ充血或ハ小出血ヲ見ル、腫瘍ノ坐位ハ顎頂骨ノ後部、若クハ後頭部上方ナルコト多シ。

鑑別 尤モ注意スペキモノハ頭血腫 Cephalhaematom ナリ、腫瘍ガ骨縫合ニ關セズシテ之ヲ超エテ擴ガリ居ル歟、或ハ然ラズシテ骨縫合部ニ於テ限劃セラル歟ニ因リテ區別ス。

骨盤端位 Beckenendlage ノ場合ニハ產瘤ガ陰囊、陰莖、陰唇及ビ坐骨部(尾骶瘤 Sacrigeschwulst)ニ現ハル、コトアリ、又產瘤ハ稀ニ顏面、四肢ニモ在ルコトアリ。

療法 特別ノ治療法ヲ施サズトモ、自然ニ速ク消失ス。

(四) 頭血腫 Cephalhaematom externum

通常初生兒ノ生後二日乃至四日ニ現ハルレドモ、已ニ分娩期ニ生ズルモノアリ、稀ニハ第二週ノ初ニ於テ現ハルルコトアリ。

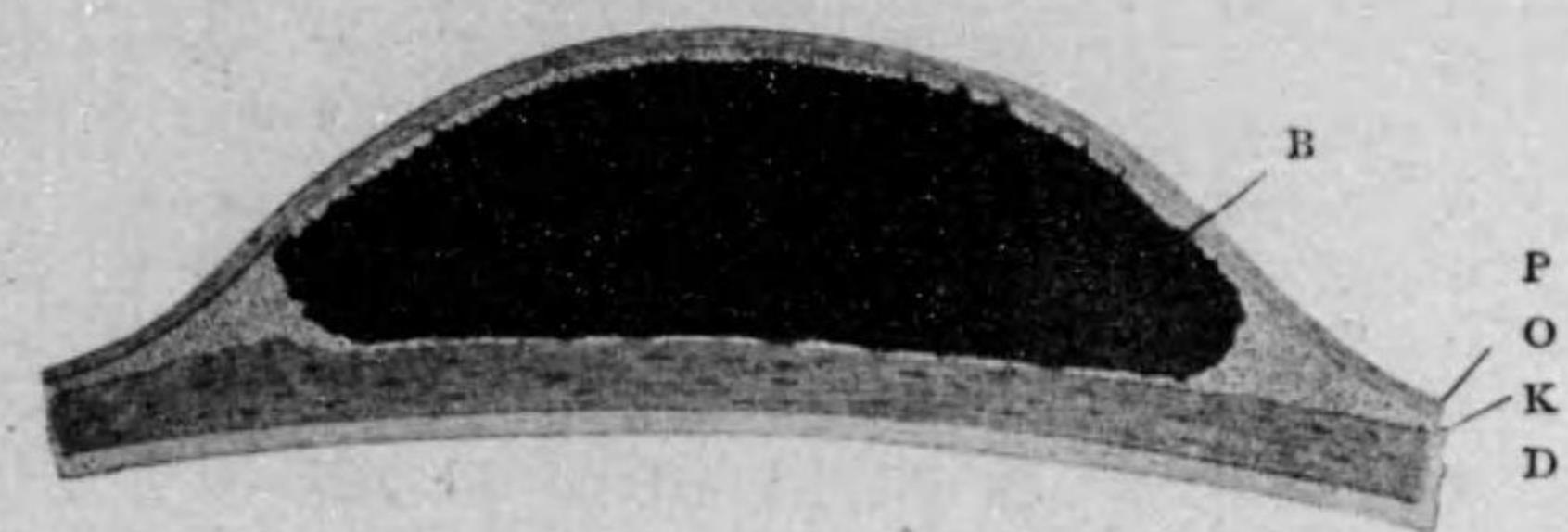
症狀 頭蓋骨ト骨膜トノ間ノ出血ニシテ、多數ノモノハ右側顎頂骨ニ來ル、時トシテハ兩側ノ顎頂骨ニ來ルコトアリ、稀ニ爾他ノ頭骨部ニ來ル、一個單獨ニ現ハル、ヲ常トスレドモ、偶々多數ノモノ同時ニ來ル。

大サハ胡桃大乃至鷄卵大ニシテ、其レ以上大ナルハ寧ロ例外ニ屬ス、其形ハ半球形ヲ呈シ、或ハ稍扁平ナリ、其表面皮膚ハ腫瘍ト密著セズ、且外觀變狀ナキコト普通ナレドモ、浮腫、出血、壓迫ノ印跡ヲ見ルコトアリ、皮膚ハ初メ緊張スレドモ、次デ腫瘍ニ波動ヲ觸知スルニ到ル。

頭血腫ニ特有ナル點ハ、其擴大ニ限リアリテ、大ナリトモ、其腫瘍基底ハ決シテ骨縫合ヲ、

## 第三十七圖 頭血腫切面

(nach Pfaundler)



越、エ、テ、隣接セル、他骨、上マ、デ、及ブ、コトナシ、腫瘍ノ周縁ハ指頭ヲ以テ觸ル。堤防狀ノ隆起ヲ以テ取り巻カレ、明ラカニ其境ヲ割シ得之レ新生セル骨組織ナリ、時日ヲ經過スルニ從ヒ、腫瘍ノ形ハ扁平ニ近ヅクト共ニ、此骨組織ハ漸次増殖シ、且擴大ス之ニ觸ルレバ羊皮紙様捻髮音 Pergamentknitter ノ感ズベシ、此ノ如キハ腫瘍中溢出液ノ吸收徐々ニ行ハル、際ニ見ルナリ、腫瘍ノ消退速ニシテ骨組織新生ヲ見ルニ到ラザルコトアリ。

経過及ビ轉變 概シテ全身症狀ノ侵サル、コトナク、體溫等ニモ變化ナク、第二週頃ヨリ漸次吸收初マリ、二三ヶ月ヨリ六ヶ月ヲ經レバ治癒ニ赴クヲ例トス。

時ニ此頭血腫ニ化膿菌ノ傳染ヲ見ル、其ノ多數ハ外傷ニ因ルモノナレドモ、化膿徑路ノ不明ナルコトアリ、尙ホ進ンデ膿瘍トナリ、而シテ延イテハ骨膜炎、脳膜炎或ハ敗血症ヲ起ス。

原因 殆ンド八十%ハ初產兒ナリ、殊ニ稍年長ナル初產婦ノ分娩セル場合ニ多ク見ル、男子ハ女兒ニ於ケルヨリ約二倍ノ割ニ多シ、元來初產兒ニ在リテハ頭蓋骨ト骨膜トノ結合、成人ノ如クニ強固ナラズ、分娩ニ際シテ頭皮ハ產道壁ト密著シ、而シテ移動スル爲メ纖弱ナル骨膜血管ハ破レテ骨膜下ニ出血ヲ來ス、而カモ骨縫合部ニ於テハ骨膜剥離シ難キヲ以テ、出血ハ此處ニ於テ必ラズ妨止セラレ、他ニ及ブコトナシ。

診斷及ビ鑑別 診斷ハ容易ナリ、堤防狀ノ骨隆起ヲ觸ル、ガ爲メ頭蓋骨缺損部ヨリノ脳膜脫出 Meningocele ト誤ルコト莫キニシモ非ズ、然シ脳膜脫出ニアリテハ骨縫合部、若クハ顎門ニ來リ、之ヲ歸納シ得ベク、又小兒ノ叫泣ニヨリ著シク發露スル等ニ依リテ區別シ得、產瘤トノ區別ハ其條下ニ説ケリ。

豫後 佳良、但シ化膿スルトキハ危險ナリ。

療法 特殊ノ方法ヲ施サズトモ、自然ニ漸次吸收スルモノナレバ、凡テノ外傷ヲ避クル様ニ保護スルコト大切ナリ、吸收餘リニ遲キ時ハ穿刺ヲ行ヒ、化膿ノ徵候ヲ示ストキハ直チニ外科的手術ヲ受ケシムベシ。

頭内血腫 Cephalhaematom internum 稀ニ出血ハ頭蓋骨ト硬腦膜トノ間ニ起リ、頭蓋

内腔ニ向ヒテ血腫ヲ形成ス、屢、骨折ニ伴ヒテ生ズルモノナレドモ、偶々等ノ損傷ナク骨縫合部ヨリ生ズルコトアリ、此際脳ノ壓迫症狀起ル。

脳出血トノ區別ハ、脊髓液ヲ取りテ検セバ、血液ノ混入ナキヲ以テ判ジ得。

(五) 腦出血 Hirnblutung  
分娩難澁ニシテ產科手術ニ依リ辛ウジテ出産ヲ遂ゲタル時、稀ニハ自然分娩ニテモ脳出血ヲ見ル。

原因 出血ノ原因トナルベキ外傷ハ必ズシモ著大ナルヲ要セズ、屢々外部ニ何等異狀ノ認ムベキモノナクシテ内部ニ出血ヲ見ル、且分娩ノ經過輕キニ拘ハラズ起ルコトアリ、概々骨移動ノ爲メ血管ニ損傷ヲ來シテ出血スル如シ。

症狀 脳内壓亢進ノ狀アリ、即チ昏睡、脈搏緩徐、呼吸不正ニシテ大顎門ハ緊張ス、斜視アリ、麻痺ノ來ルアリ、屢々痙攣ヲ起ス。

脳出血ハ一見殆んど假死ノ狀態ヲ呈スレドモ、假死ニ對スル療法ヲ行フトキハ、症狀益々増悪スルヲ以テ疑フ除キ得ベシ、幸ニシテ一兩日ノ中ニ危險徵候ハ去リ、續イテ順境ニ向フコトアレドモ、多數ノ場合ハ早晚癲癇様發作ヲ起シ、又麻痺ヲ遺ス。

病理解剖 脳穹窿部ニ於ケル硬腦膜下或ハ蜘蛛網膜下ニ出血アリ、小腦ニ來ルコトハ稀有ニ屬ス、腦基底部、腦室内ノ出血モ亦少ナク、實質内ノモノ尙ホ稀有ナリトス。

診斷 外部損傷ヲ認メ得ザルトキハ、腦部畸形トノ區別困難ナリトス、疑ハシキ場合ニ

ハ脊髓腔穿刺ニ依リテ確メザルベカラズ。

豫後 不良ナリ、數日ノ経過ヲ取リテ痕跡ナク治癒スルコトアリト雖モ、概々後ニ麻痺ヲ貽スカ、又白痴癲癇ヲ患フルニ到ル。

(六) 胸鎖乳頭筋血腫 Haematom des Sternocleidomastoideus  
胸鎖乳頭筋、時ニハ僧帽筋、斜角筋等ノ筋織維破レテ筋膜内ニ出血ヲ起ス、原因ハ人工的

分娩ニ際シ殊ニ頭部ヲ強ク廻轉スルトキニ生ズ。

症候 分娩直後ニ頭部ニ於テ鳩卵大、若クハ其レ以上ノ硬キ無痛性ノ腫瘍ヲ見ル、外表ニハ異狀ナシ、而シテ小兒ハ斜頸ヲ呈ス、又血腫吸收後ニ貽リシ硬結ガ斜頸ノ原因トナルコトアリ。

療法 此筋血腫ハ通常數週内ニ自然消退スルモノナレバ、療法トシテハ軽ク按摩スルカ、多少ノ被動的筋肉運動ヲ爲サシムレバ足ル。

(七) 神經麻痺 Nervenlähmungen  
(イ) 上膊神經叢麻痺 Lähmung des Plexus brachialis 其原因ハ分娩時ノ外傷ナルヲ以テ、人爲的分娩ノ際ニ來ルコト多キハ固ヨリ言ヲ俟タズ、然レドモ亦自然的分娩ニテモ見ルコトアリ。

上膊神經叢ヨリ出ヅル神經ハ肩胛部、上膊及ビ前膊ノ諸筋ニ分布ス、而シテ外傷ヲ最モ

受ケ易キ處ハ鎖骨上方ニ乃至三仙迷ニアリ(エルブ氏點 Erbscher Punkt)、麻痺ヲ起ス筋ハ三角筋、二頭筋、脛筋、腓後筋、腓橈骨筋、棘下筋等ナリ、然シナガラ感覺障礙ハ伴ハザルモノトス。

**症候** 分娩後、上肢ハ動カズシテ内方ニ廻轉シ、手掌ハ後外方ニ向ヒ、弛緩性ノ麻痺ヲ呈ス、患兒ノ上體ヲ提舉シテ見レバ、其狀景尙ホ著シク現ハル、以上ハ主トシテ上膊ノ侵サル、モノニシテ普通見ル所ナリ、稀ニ前膊、手指諸管ノ多ク侵サル、アリ、前者ハ上膊型後者ヲ前膊型ト稱ス、後者ノ場合ニ於テハ屢々知覺障礙ヲ伴フ、尙ホ瞳孔縮小、眼裂細小、眼球後退等ノ來ルコトアリ(クルムブケ氏麻痺 Klumpkesche Lähmung)、之等麻痺ニシテ長時間持續スレバ遂ニ變性反應ヲ呈シ、萎縮、動搖關節、摃縮等ヲ惹キ起スニ到ル。

**診斷** 脐内ニ於テ骨折脱臼等ヲ起シタル者ハ類似ノ運動障礙ヲ以テ生ル、殊ニ上膊骨骨端軟骨部剝離トノ鑑別困難ナルコトアリ、是等ハレントゲン透寫ニ依リテ區別シ得ベク、假性麻痺バロット氏麻痺トハ全身ノ症候及ビワツセルマン氏反應ノ存在等ニ依リ判定シ得ベシ。

**豫後** 上膊型ハ一般ニ佳良ニシテ、輕症ハ一二週ノ經過ニテ、全治ス、前膊型ハ完全麻痺ナルトキハ不良ナリ、生後四ヶ月ニ至リテ猶ホ治癒ニ赴カザルモノハ望ナキガ如シ。

**療法** 麻痺中ニ萎縮強直ノ起ルヲ豫防スベク、則チ輕ク摩擦法又被動的運動ヲ施シ、後ニハ一週二三回、平流或ハ感傳電氣ヲ通ズベシ、而カモ麻痺ヲ貽セルモノハ整形的外科

手術ニ依リ其障礙ヲ幾分ナリトモ輕減スルヲ謀ルベシ。

(ロ) **顔面神經麻痺 Facialislämmung** 錘子分娩ヲ行ヒタルトキ屢々、顔面神經ノ末幹ハ壓迫ヲ受ケテ麻痺ヲ起ス、其他骨盤狹隘ノ者ニアリテハ其隆起部ノ壓迫ニ依リテ起ルコトアリ。症候 片側麻痺ナルヲ普通トス、小兒涕泣スレバ口角ハ低下シ、口ハ傾斜シテ健側ニ牽引セラレ、又口唇閉鎖ハ患側ニ消失シ、鼻唇溝ハ健側ニ比シ不分明、眼瞼閉鎖モ亦不能トナル(兎眼)、若シ麻痺ニシテ兩側ニ來レバ、其原因末梢性ノモノニ非ズシテ中樞性ノモノニ屬スル歟ノ判別ヲ要ス。

豫後 佳良、多クハ數日内或ハ六週以内ニ消失スルヲ例トス、若シ永ク存在シテ治癒ニ赴カザル時ハ他ノ原因ニヨル症候ト推察スベシ。

**療法** 其恢復遲々タルトキハ感傳電氣ヲ用フ、其強度ハ摃縮ヲ起ス程度ニ止メ、一日一回、二分乃至三分間行フ。

## 第八 脣部疾患 Nabelerkrankungen

胎兒ニアリテ臍帶ハ母體ト胎盤ニ依リ總テノ連絡ヲ爲スモノニシテ、羊膜ヲ以テ蔽ハレ、二條ノ動脈、一條ノ靜脈及ビワルトン氏膠様質ヨリ成リ、尙ホ胚胎殘遺物ナル尿膜及ビ卵黃管ヲ有ス、羊膜ハ一方ハ直接ニ腹壁表皮ニ移行シ、他方ハ胎盤ノ胎兒面ニ續ク。

胎兒分娩シテ最初ノ呼吸ヲ營ムニ到レバ、是等臍帶脈管ノ循環ハ休止シ、次デ管壁摃縮

シ、生後四日ニテ乾燥シ、五六日ニ至リ、臍帶遺物全ク脱落ス、而シテ其ノ跡ハ腹壁ニ於テ稍深キ漏斗状ヲナシテ存シ、該創面全ク治癒スルニハ凡ソ三週日ヲ要ス、臍帶血管ノ初生兒腹腔内ニ在ル部分ハ漸次血栓ヲ形成シ、遂ニ結締織ヲ生ズ。

#### (一) 先天異常 *Angeborene Anomalien*

(イ) **皮膚** *Hautnabel* 腹壁表皮ハ廣ク臍帶上ニ續キ、臍帶脱落ノ後、腹壁ニ著シキ漏斗形ノ陥凹ヲ呈ス、之レ即チ皮膚ナリ、多クハ漸次自ラ常態ニ復歸スレドモ、偶々永ク其儘ニ存在スルコトアリ。

(ロ) **羊膜臍** *Aminionabel* 前者ノ反対ノモノニシテ、羊膜ハ臍帶ノ基部ニ於テ休止セズシテ尙ホ壁上皮ニ迄モ擴ガリミイラ、變性ニヨリテ臍帶脱落スルトキ羊膜臍ヲ生ズ。

此皮膚缺損部ハ漸次肉芽組織發生シテ治癒ニ趣ク、常トス。

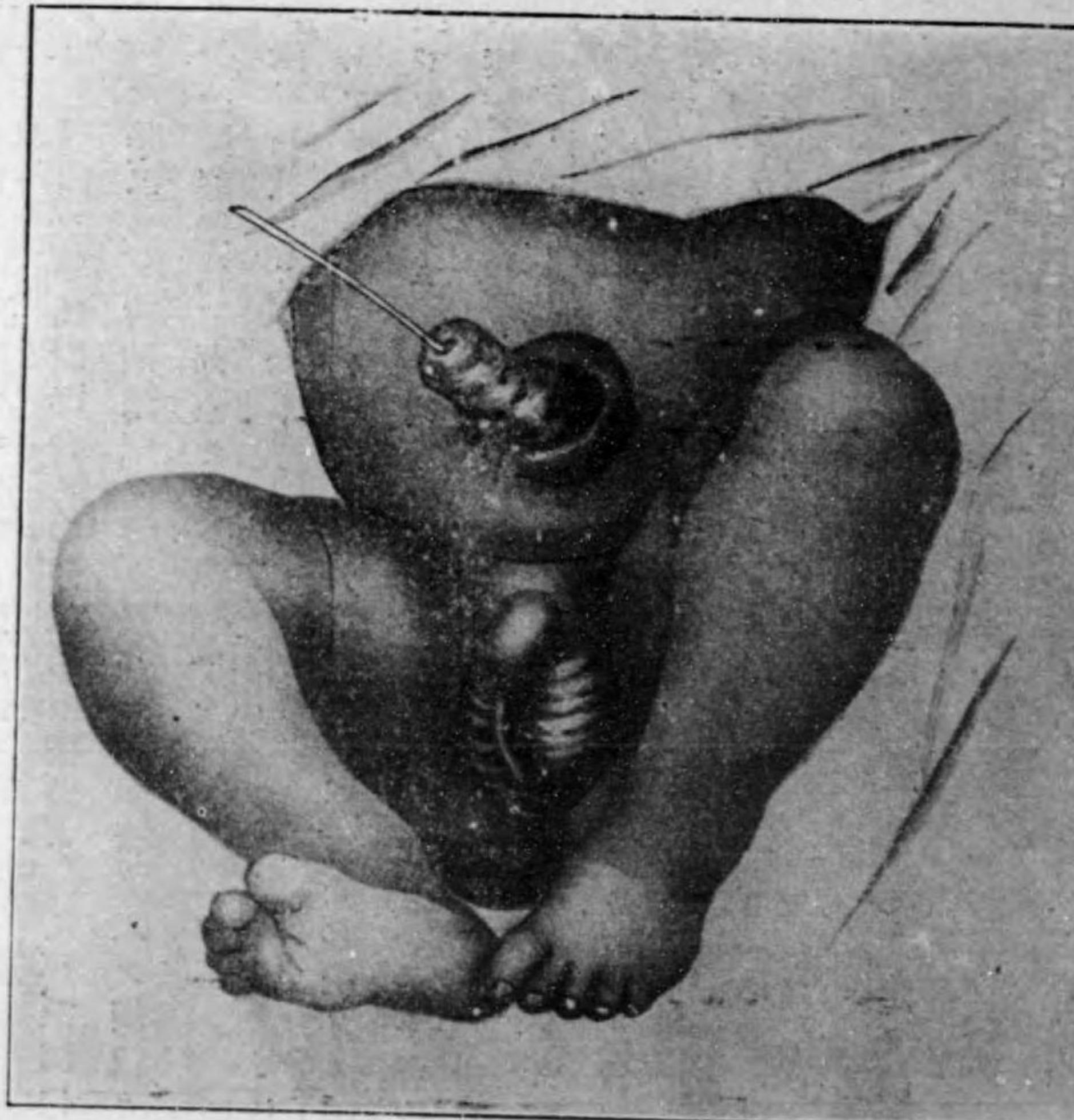
(ハ) **臍帶ヘルニア** *Hernia funiculi umbilicalis* 臍帶ノ遺物ハ囊状ニ擴大シ、中ニ腸管又肝臓ノ一部若クハ全部ヲ容ル、尙ホ胃、脾臓、腎臓等之ガ内容物タルコトアリ。

大サハ通常胡桃大、稀ニ小兒頭大ニ達ス、半球状或ハ囊状ノ形態ヲ呈シ、初期ニアリテハ囊皮透明或ハ半透明ノ綠白色ヲ示シ、腸管及ビ其運動ヲ透見シ得テ、一目診断ヲ下シ能フコトアリ、臍帶ハ該腫瘍ノ下半部ニ接續ス、羊膜部ハ臍帶ノ壞死作用ニ參與シテ脱落スルトキハ其跡ニ肉芽組織發生シ、瘢痕ヲ形成シテ縮小ス。

豫後一般ニ不良ナリ、臍帶ヘルニアハ屢々體質虛弱ノ者ニ來リ、腹膜炎敗血症ヲ惹起ス。

#### 第三十八圖 存遺ノ管膜管臍

(nach Pfaundler)



**療法** 根本的ニ外科的手術ヲ要スルコトアリ、姑息的療法トシテ織弱ナル腹壁ハ硼酸華攝林、綿塊等ヲ以テ保護シ、羊膜脱落後ノ肉芽組織ハ硼酸「チモール」過満俺酸加里、鎢土水ヲ以テ洗滌シタル後「 $1\%$ 」ノ硝酸銀液ヲ塗リ、最後ニ絆創膏ヲ以テ横位ニ固定ス。其他虛弱者ニハ全身栄養狀態ヲ昂ムルコト必要ナリ。

(二) 脾腸管膜管ノ遺存 Persistenz des Ductus omphalomesentericus 脾腸管膜管遺留シテ廻腸ト脾トヲ連絡スルコトアリ、即チメッケル氏憩室ノ開口ナリ、臍帶脫落後ソノ治癒ニ障礙ヲ受ケタル爲メ生ジタルモノニシテ、瘻管ヲ通ジテ腸内容物出ヅ、一般ニ稀有ナリ。

(ホ) 胎生尿管瘻 Urachusfistel 元來胎兒尿管ノ遺物ハ變ジテ中膀胱韧帶ト成ルモノナレドモ、此者稀ニ閉塞セズシテ殘留シ、以テ膀胱ト膀胱トノ連絡ヲナス、而シテ膀胱内ノ尿ハ上行シテ臍部ノ瘻孔ヨリ滴出ス。

**原因** 尿ノ排泄道ニ何等カノ障礙例之包皮若クハ瓣膜ノ存在スル爲メ尿管ノ閉塞妨げラル、ニ因ル。

**療法** 尿排泄ノ道ヲ作ルト共ニ、瘻管ハ外科的ニ新鮮創面ヲ作リ、之ヲ縫合或ハ焼灼スベシ。

## (二) 脍部傳染性疾患 Wundinfektionen des Nabels

臍帶ノ遺物永ク脱落スルコト無ク、該創面ノ治癒遲滯スレバ茲ニ化膿性傳染ノ成立ヲ

見ルベク、又一度臍帶脱落アリシ處ニ炎症ヲ起シ、熱候ヲ伴ヘバ、均シク傳染アルヲ知ルベシ。

臍傳染ヲ催起スペキ主要ナル病原菌ハ葡萄狀菌連鎖球菌等種々ノ化膿性細菌ナリ、病源菌ノ傳染ハ或ハ單ニ局部ニ止マルアリ、或ハ深ク進入シテ動靜脈又ソノ周圍ニ及ブアリ。

然シナガラ近代消毒法ノ進歩ニ從ヒ此傳染性疾患ノ實見ハ減少セリ、臍帶ノ残遺ハ無コトハ是等疾患ノ豫防トシテ先づ行フベキ方法ナリトス。

(イ) 脍帶壞死 Gangrän des Strangrestes, Sphacelus 脍帶ノ遺物ハ汚穢色ヲ呈シ、濕潤シ、且惡臭ヲ放チ、發熱アリ、斯カル場合早ク燒灼電氣ニテ除キ去ルコト必要ニシテ、放置スレバ敗血症ヲ惹起スルコトアリ。

(ロ) 脍壞疽 Nabigangrän 前者ヨリ延イテ臍壞疽ニ到ルコトアリ、生來衰弱セル者ニ起ル、汚穢色ヲ呈シ、惡臭アル、壞死ハ腹部ノ皮膚ニ及ブ、又屢々腹膜炎ヲ續發シ、熱候アリテ虛脱ニ陥リ、一般症狀劇シク侵サレ、死ノ轉歸ヲ取ルコトアリ。

局所ニ於ケル治療ノ外、一般ノ栄養狀態ヲ昂メ抵抗力ヲ増加スルコト緊要ナリ、其目的ヲ達スルニハ人乳最モ可ナリ、局所療法トシテハ清淨ニシ、硝酸銀棒、一半「クロール」鐵液ヲ用ヒ、或ハ醋酸鎢土水ヲ以テ濕性綑帶ヲナス、痂皮ノ剥離始マレバ防腐劑ヲ撒布ス、又

タ初メ「バクレン」ヲ以テ焼灼シタル後ニ撒布薬ヲ用フ。

(ハ) 脘臍漏 *Bleorrhoea umbilia* 脘帶脫落後ニ其部ヨリ漿液性膿或ハ純膿ノ分泌著シキ場合ヲ指シテ臍臍漏ト云フ、其創面ニハ肉芽組織發生シ、粘液性膿性ノ義膜ヲ附著ス、分泌液ノ排泄不充分ナレバ炎症ハ内部ニ向ヒ、接近セル動脈又血栓ニ及ブ、然ル時ハ瘻管ヲ生ジ以テ膿排泄ノ道ヲ作成スルナリ。

診斷 脘部創面ヨリ絶エズ膿ノ分泌アルニ依リテ知リ得ベシ、單ニ局部ニ化膿アルノミナラズ熱候ノ之ニ伴フアリ、且一般症狀ヲ呈シ來ラバ敗血症ヲ起シタリト推知セラル。

豫後 概シテ良ナリ、稀ニ傳染セル血栓ノ剝離シテ下腹動脈ニ及ビ、傳染ノ媒介ヲナスコトアリ。

療法 膿ノ排泄ヲ充分ナラシムルコト專一ナリ、瘻管アルモノハ日々數回之ヨリ膿ノ排泄ヲ行フベシ、而カモ尙ホ不充分ナルトキハ瘻管ヲ切リ擴ゲテ膿ノ漏溜ヲ避ケ、常ニ清潔ニ保チ、洗滌ニハ五布仙ノ硼酸水、二乃至三布仙醋酸礬土水、三布仙過酸化水素液等ヲ用フ、消毒剤ノ撒布ハ肉芽組織ノ發生ヲ催進スル效アリ、其周圍ハ軟膏ヲ貼付シテ保護スベシ。

(ニ) 脘部潰瘍 *Ulcus umbilici* 或ハ原發性、或ハ臍臍漏ニ續イテ發生ス。

潰瘍ノ形ハ圓形若クハ不規則ニシテ、其周緣峻削ノ浸潤ヲ以テ取り囲マレ潰瘍ノ基底

ハ膿汁或ハ脈脂様ノ義膜ヲ以テ覆ハル。

偶々微毒性ノ原發潰瘍ヲ見ルコトアリ。

豫後 一般ニ良。

療法 主トシテ清淨ニスベシ、過酸化水素ノ塗布、消毒剤ノ撒布、水銀剤ヲ軟膏トシテ用ヒ、又甘汞ヲ撒布ス。

實扶的里性潰瘍ハ同様ニ淺キ潰瘍ヲ形成シ、格魯布性義膜ヲ見ル、潰瘍ノ周圍ニハ固キ炎症性ノ浸潤アリ、此場合ニハ局部ノ處置ヲ上述ノ如ク行フト共ニ、早ク血清ヲ注射スベシ。

(ホ) 脘息肉 *Fungus umbilici*, *Granuloma umbilici* 脘部創面ニ膿、其他ノ分泌物多量ニシテ、治癒障礙セラル、トキハ肉芽組織異常に發生シ、赤色ノ豌豆大或ハ胡桃大ノ腫瘍トシテ現ハル、其ノモノ深ク隠レ、周圍ノ皮膚ヲ披キ初メテ露出スルコトアリ。

稀有ナレドモ臍ニ腸畸形腫 *Enterotetomia*、腺腫 *Adenom* 來ル、臍腸管脈管ヨリ發生シ、何レモ其表面平滑ニシテ凸凹ノ表面ヲ有スル臍息肉トハ容易ニ區別シ得ベシ、又臍腸管ノ遺物ガ息肉狀ヲ呈スルコトアリ。

療法 息肉ノ小ナルモノハ硝酸銀棒ヲ以テ縮小スベシ、其大ナルモノハ基底部ヲ結紮シテ刀ヲ以テ除キ去ルカ、焼灼白金線ヲ以テ焼キ取ルベシ。

(ヘ) 脘血管炎 *Arteritis u. Phlebitis umbilici* 脘帶遺物及ビ臍帶脫落部ニ於ケル傳染ガ延イテ

臍血管ニ炎症ヲ起スコト稀ナラズ、其ノ侵入ハ淺クシテ臍基底ニ動脈血栓炎ヲ呈スルアラバ、臍ヨリ下方ニ當リ腹部皮膚ニ發赤腫脹ヲ認ムベク、上方臍部ニ向ヒテ壓迫スレバ、臍ノ出ヅルヲ見ム、此ノ場合臍ニシテ常ニ瀦溜スル無クンバ、一般症狀ハ害セラレズ。炎症ハ血管ニ沿フテ深ク進メバ、血管周圍ノ淋巴腔ヲ侵シテ先ヅ淋巴管炎ヲ起シ、之ニ伴ヒテ血管自ラモ亦炎症ヲ起スナリ、然シナガラ又進ンデ動脈血栓炎、稀ニ靜脈血栓炎ヲ來タス、傳染セル血栓ガ破壊流動シテ血流中ニ入ルトキハ、敗血症及ビ臍毒症ヲ起ス、或ハ血管周圍ノ炎症ヨリ腹膜炎ヲ起シ、或ハ臍ガ腹膜前腔ヲ下行シ、鼠蹊管ヨリ外ニ出デ精系、睾丸ノ炎症ヲ起スコトアリ。

病理解剖 動脈ハ堅固ナル褐色ノ索状ヲナシテ浮腫セル組織ヨリ周擁セラレ、血管内腔ハ赤色ノ血栓ヲ有スルカ、粗雑ナル乾酪様物質或ハ臍球ヲ以テ充タサル、管壁ハ潤渦シ、圓形細胞ノ浸潤アリ、尙ホ浸潤ハ細胞周圍ノ組織内ニマデ及ブ、其他屢々肺炎、肋膜炎、腹膜炎脾又肝臟ノ腫大、關節炎等ヲ見ル。

此ノ如キ重症ノ場合モ初メハ極メテ輕微ナルヲ常トス、臍部ニ疑フ抱クベキ變狀ヲ呈セザルアリ、或ハ已ニ臍ヲ分泌セルアリ、已ニ發見セルモ其一般症候輕クシテ熱候、痙攣、虛脱ノ如キ烈シキ症狀ハ最後ニ現ハレ來ル、動脈炎ニ於ケル臍ヨリ下向スル索狀ノ抵抗物、又靜脈炎ニ見ルベキ臍ヨリ上部ニ存スル膨滿、疼痛モ之ヲ證シ得ルコト多カラズ、靜脈炎ニテハ黃疸、腹膜炎ノ著明ニ存在スルコトアリ。

#### 豫後 常ニ危險ナリ。

療法 豫防トシテ臍帶ノ處置ハ消毒ヲ嚴ニスベシ、炎症臍底ノ血栓ニ止マレバ、瘻管ヲ開キテ臍ノ排泄ヲ盡クシ、其後ニ無毒ノ綢帶ヲ施セバ肉芽組織發生シテ治ス敗血症ノ徵候現ハレタルトキハ、先ツ人乳榮養ヲ以テ體力ヲ維持シ、強心劑又食鹽水ノ皮下注射ヲ處スベシ。

#### (ト)初生兒<sub>1</sub>テタヌス(破傷風) *Tetanus neonatorium*

原因 「テタヌス」菌ノ感染ニ因リ起ル一種ノ創面傳染病ニシテ、初生兒ニ在リテハ殆んど凡テノ場合ニ於テ臍部創面ヨリ傳染ス、之レ成人ニ於ケル「テタヌス」ト趣フ異ニスル點ナリ、而シテ傳染媒介ハ周圍ノ看護者ノ手ヨリスルコト多ク、殊ニ庭園ノ土壤ニ汚レタル場合不潔ナル綢帶ニ由ルコトアリ。

「テタヌス」菌ハ初メテニコライエル氏ニヨリ發見セラレ、北里氏ニ依リテ純培養ヲ得タル一種ノ桿菌ニシテ、一端ニ圓形ノ芽胞ヲ有シ、其形ノ特有ナルヲ以テ名アリ、抵抗力強キ細菌ニシテ主ニ庭園ノ土壤中ニ生息ス。

病理解剖 單ニ脳及ビ脊髓ニ充血、溢血アルノミニシテ稀ニ出血ヲ見ル、「テタヌス」菌ハ其傳染ノ局部ニ於テ繁殖シ、細菌自ラ全身ニ擴ガルコトナク、只生成セラレシ毒素ガ中枢神經系ニ働クモノナリ、然シナガラ該菌ヲ臍ノ創面ニ見出スコトハ毎常必ラズ成功スルト限ラズ。

潜伏期ハ屢々甚ダ短カシ、生後第一日或ハ第二日ニ於テ已ニ病症ノ現ハル、アリ、多クハ一週ノ終ニ於テス。

症候 前驅症トシテ別ニ認ムベキ變狀起ラズ、只病症ノ發セントスルニ先チ不安、號泣強キコトアリ、第一ノ症候ハ咀嚼筋ノ痙攣ナリトス、即チ牙關緊急、Trismusヲ以テ始ム、然シ之ヲ家族ノ者ハ屢々單ニ飲乳拒絶ノ意味ト解シ、口輪匠筋、咀嚼筋ノ痙攣ノ爲ニ起レル哺乳不可能ヲ觀過スルコトアリ、此痙攣ハ最初間歇性ニ起ルヲ例トスレドモ、亦間斷ナク現ハル、アリ、次デ痙攣ハ爾他ノ顔面諸筋ニ及ビ、鼻唇溝ハ深ク、前額ニ皺襞多ク現ハレ、口唇稍突出シテ堅ク閉ヂ、顔貌恰モ笑フニ似タルヲ以テ痘、笑(*Rhus sardonicus*)ト稱ス、次デ發作性衝動的ニ頸筋、脊筋ニ擊縮起リ、所謂角弓反張ノ狀ヲ呈シ、尙ホ腹筋ニ及ベハ腹部ハ陷没シテ板ノ如ク堅シ、四肢ノ諸筋又之ニ加ハリ、上膊ハ内轉シ、前膊ハ半バ屈曲シ、手指悉ク内屈シ、下肢ハ半バ屈曲ノ位置ヲ取ル、重症ナル場合ニハ呼吸器諸筋モ亦侵サレ、呼吸ハ淺薄不規則トナリ、チアノーベ現ハル、反射機能頗ル興奮セル爲メ、筋肉ノ擊縮ハ緩解スルモ亦直チニ反復シ、殊ニ其身體ニ觸ル、コトニヨリ又床ヲ少シク動カスニヨリ、甚シキハ高聲或ハ風ノ流通ニヨリテスラ全身ニ於ケル筋肉ノ擊縮ヲ惹起ス。其他脈搏頻數トナリ、體温上昇ス、最終ノ場合ニハ四十二度ヨリ四十三度ニ昇ル、尿中蛋白ヲ生ゼズ、激烈ナルモノハ二十四時間内ニ死ノ轉歸ヲ取ルコトアレドモ概ネ數日ノ經過ヲ持シ、衰耗ヲ以テ死ニ到ル。

豫後 不良ナリ、治スルモノ約七%ナリ、潜伏期長ク、發作數少ク、呼吸器筋ノ犯サレザル高熱ナキ場合ハ望アリトス。

診斷 診定ニ就キ發病ノ模様牙關緊急等價値アルモノナリ、尙ホ漸次痙攣ノ全身ニ及ブコト、痙攣ハ間代性ニ非ザルコト等注目スベシ、細菌ノ證明ハ困難ナリ、臍部創面ヲ搔取シ鼠ニ移植シテ同様ハ痙攣發作ヲ起シ得ハバ確實ナリ。

鑑別ヲ要スベキモノハ分娩時ニ於ケル外傷例之腦出血ニ伴フ痙攣狀態及ビ大腦疾患ナリトス、*「テタヌス」*ニテハ眼筋常ニ犯サレザルヲ以テ區別ノ資トスベシ。

療法豫防法トシテ臍部ノ清淨ハ勿論必要ナリ、且初生兒ノ看護者ハ塵埃、土壤等ニ觸レザル様充分ニ注意スベシ、使用スル綑帶、綿布、浴湯等ハ不潔物トノ接觸ヲ避ケザルベカラズ。

療法トシテハ早ク「*テタヌス*」免疫血清ハ、注射ヲ行フナリ、症候現ハレ、テヨリ二十四時間以内ニ行ハザレバ奏效ハ期シ難シ、何トナレバ已ニ毒素ガ中樞神經系ニ於テ結合ヲ了セル後ニアリテハ、血清ハ其效力無キモノナレバナリ、其注射ハ二百五十單位ヲ二分シ、其一半ヲ臍附近ノ皮下ニ、他ノ一半ヲ腰椎穿刺ニヨリテ硬膜下ニ送入スベシ(フェール)、其他痙攣ヲ緩解スル方法ヲ講ズベク、則チ絕對ニ安靜ヲ取ラシメ、音響其他ノ刺戟ヲ避ケ、藥劑トシテハ抱水<sup>クロラール</sup>ヲ一回量〇・五一日三瓦迄、又臭素加里一日一乃至二瓦、「ベロナール」<sup>Ceronal</sup>、一回〇・〇七五、ヲ同時ニ併用シテ可ナリ。

栄養ハ牙關緊急ノ爲メ哺乳困難ナルガ故ニ、搾取シタル母乳或ハ牛乳ヲ匙ヲ以テ口内ニ注入ス、攝取不充分ナレバ鼻孔ヨリ灌入スペシ、一定ノ栄養状態ヲ支持センニハ、頻回反復シテ給與セザルベカラズ、然ルトキハ却ツテ痙攣發作ノ刺戟トナリ不快多キヲ以テ、護謾管ヲ用ヒ一日數回(三)四回ニ與フルヲ可ナリトス。

(三) 脘出血 *Nabelblutung, Omphalorrhagie*

臍部ヨリノ出血ハ諸種アリ、臍帶ノ動脈又臍帶殘遺ノ脱落部ヨリシ、或ハ臍部ノ實質ヨリス。

臍帶血管ヨリノ出血ハ外傷或ハ不充分ナル結紮等其ノ主原因ヲナス、尙ホ肺萎縮假死及ビ心臟疾患ニモ出血ヲ見ルナリ。

臍帶脱落後ニ來ル出血ハ或障礙ノ爲メ血栓形成ヨリ其組織化行ハレズシテ起ル、臍實質ヨリノ出血ハ一般ニ血液凝固力ハ不足ナルガ爲ニ起ルモノニシテ敗血症ハ、一現象ナルコト多シ、又微毒或ハ局處疾患、動脈炎、壞疽ニ由リテ來ルモノアリ、出血ハ臍帶脱落後ニ現ハレ、定期的ニ或ハ絶エズ臍部創面ヨリ滲出シ、患兒ノ皮膚蒼白トナリ、出血止マザレバ數日ヲ出デズシテ死ス。

療法 臍帶遺存スルトキハ之ヲ護謾管ヲ以テ堅ク結紮スベク、一方呼吸ノ正整ニ注意スベシ、臍帶脱落後ノ出血ニ對シテハ一千倍溶液ノ「アドレナリン」ヲ塗布シ、又鹽化鐵液ニ湿润セシ綿塊ヲ以テ壓迫綑帶ヲ施シ、或ハ燒灼電氣ニテ止血ス、實質性ノ出血ニハ是

等ノ方法ハ何レモ效ナカルベク、十乃至二十仙迷ノ「グラチン」溶液(メルク會社製ノ無毒ニシタルモノ)ノ皮下注射ヲ行フベシ、近來血清ノ應用ヲ稱フル人アリ、患兒ハ安靜ニ保チ栄養トシテハ母乳ヲ用フベク、強心劑ヲ處シ、虛脫ニ陥ルトキハ食鹽水ノ皮下注入ヲナスベシ。

## 第九 初生兒敗血症 *Septische Infektion der Neugeborenen*

原因 病原細菌ハ一種ニ止マラズ、其最モ多キハ化膿菌、即チ葡萄球菌、連鎖球菌、肺炎菌等ナレドモ、尙ホ大腸菌、ブリードレンデル氏菌、綠膿菌、淋毒菌(インフルエンザ菌等)感染ニ因リテ敗血症ヲ起スコトアリ、而シテ其ノ傳染ハ已ニ母體子宮内ニ於テ胎盤ヲ媒介トシテ罹患セル母體ヨリ行ハレ、或ハ胎兒分娩ニ臨ンデ感染スルコトアリ、然シナガラ是等ハ寧ロ稀有ニ屬シ、多數ノ者ハ分娩後、新タニ感染スルモノトス、生後一ヶ月迄ノ初生兒ハ何レモ此危険ニ遭遇スル機會多ク、殊ニ早產兒ニ於テ然リ又人工栄養兒ニシテ栄養狀態ニ障礙ヲ有スル者ハ其傾向多シト知ルベシ。

上記病源菌ガ生後初生兒ニ傳染スルニ當リテ良好ナル部位ハ臍部ナリ、臍部創面ハ未ダ全ク癒エザルヲ以テ、此處ヨリ感染スルコト最モ多シ、其他生後第一日ニ於テハ皮膚ノ諸處ニ上皮剥脱、裂創アリテ、是等ノ處ニ最初局處的ニ疔、膿瘍、蜂窩織炎ヲ起セルモノ進ンデ敗血症ヲ將來ス、皮膚上皮ノミナラズ、粘膜上皮、殊ニ口腔内粘膜ノ炎症、阿布答ガ

侵入門トナリ、稀ニ咽頭、鼻粘膜、眼瞼粘膜、扁桃腺、耳、腸ノ疾患等ガ第一病竈ヲナス、偶、肺臓、尿道ヨリ敗血症ヲ起スコトアリ、而シテ傳染ノ媒介ヲ爲スモノハ不潔ナル手、惡露、衣服等ナリトス。

**病理解剖** 敗血症ハ其臨床上所見ノ多様ナルガ如ク、剖見上ノ變化亦種々ニシテ一定セズ、急激ニ經過スルモノニアリテハ唯臟器實質ニ於ケル退行性變性ヲ見ル而已、反之經過永ク續キタルモノニ於テハ諸種ノ器官ニ強キ變狀ヲ起スニ到ル、就中多ク見ルモノハ漿液膜ニ於ケル出血ナリトス、尙ホ轉移性、漿液性、出血性或ハ化膿性ノ炎症竈ヲ諸處ニ見ルベク、之ニ加フルニ屢、肺炎、腸胃加答兒ヲ合併ス。

**症候** 已ニ胎内ニ於テ感染セルトキハ死產兒トシテ現ハレ、皮膚外表ハ毀損セラレ、身體内腔ハ出血性漿液ヲ以テ充タサル、其他ノ場合ハ發病原因及ビ原發竈ノ如何ニヨリテ等差アリ、然シナガラ全般ヲ通ジテ相一致スル點ナキニアラズ、殊ニ發病ノ早キ者ニアリテハ中毒症狀主ニ現ハル、即チ熱候アリ、或ハ無慾狀態或ハ苦悶不安交互ニ來リ、虛脫ニ陥リ易ク、意識又障礙セラレ、偶、痙攣、震戦ヲ伴フ、或ル場合ニハ主トシテ腸胃障礙ノ來ルアリ、即チ下痢烈シク、嘔吐アリ、體重急速ニ減退シ、虛脫ニ陥リ易シ、此場合單純ナル消化器障礙ト誤ルコト莫キニ非ズ。

熱候一般ニ高クシテ不正型ヲ呈ス、且虚脱ニ伴フテ著シキ體溫降下ヲ來スコト少ナカラズ、然シナガラ成人ニ於テ見ルガ如キ、惡寒、戰慄、ハ常ニ之ヲ缺ク。

每當尿中ニ蛋白ヲ證スベハ、鏡檢上圓柱アリ、上皮細胞アリ、是等ハ腎臟ニ於ケル中毒作用ト見做スベシ、時ニ出血性腎臟炎、腎盂炎、膀胱炎等來ル、脾及ビ肝臓ハ屢々腫大ス。

皮膚ニハ中毒ノ際ニ見ルガ如キ發疹現ハル、紅斑、猩紅熱、若クハ麻疹ニ似タル發疹及ビ丘疹、水疱等現ハル、診斷上特ニ價値ヲ置クベキモノハ點狀或ハ斑狀ノ皮下出血ナリトス、皮膚ノ色彩惡シク、或ハ黃疸アリ。

臍毒症ノ來ルコトハ初生兒ニ於テ稀有ニ屬ス、斯ル場合ニハ皮膚ニ轉移性臍瘍アリ、内臟諸器ニハ血栓ニヨリテ臍瘍生ズ、關節又骨髓ニ化膿性炎症ヲ起ス。

**初生兒敗血性疾患ニ属スペキモノニシテ、其經過稍特殊ナルモノアリ。**

**ウインケル氏病** Winckel'sche Krankheit 腸胃障礙アリテ血色素尿ヲ排泄シ、黃疸<sup>チアノ</sup>一ゼ現ハレ、速ニ虛脱ニ陥ルモノナリ。

**ブル氏病** Buhl'sche Krankheit 心臓、肝臓、腎臓等ニ脂肪變性アリ、臟器及ビ皮膚ニ出血ヲ來シ、且黃疸及ビ浮腫ヲ伴フモノトス。

如上迅速ニ經過スルモノ、外ニ病症徐々ニ進行シ、萎縮又衰弱ヲ來シ、著シキ貧血、惡液質ヲ起スモノアリ、尙ホ不正ノ熱型ヲ有シ、肋膜、腹膜、心囊、腦膜ニ化膿性炎ヲ作リ、肺炎ヲ起シ、骨關節ニ於ケル化膿ニ次デ蜂窩織炎、壞疽ヲ起スコトアリ。

**診斷** 急速ニ經過スル場合ハ屢々困難ナリ、病原菌侵入ノ箇所明ラカナルコト、又上記症候中、皮下出血、黃疸等ハ診斷上價値アルモノトス。

豫後 多クハ不良、其症狀劇シキモノ程治療ノ望少ナシ、反之經過徐々ニシテ病症ノ發展遲々タルモノハ治スルコトナキニ非ズ。

豫防法 是等細菌ノ傳染門戸ヲ注意スルコト肝要ナリ、即チ初生兒ノ皮膚、臍帶ノ處置、消毒ヲ充分ニシ、又口中等ヲ清淨ニ保持スルコト勿論ナレドモ、過ギタル爲メ反ツテ小損傷等ヲ來シ傳染ニ好機ヲ與フルコトナキヲ保セズ、注意セザルベカラズ、殊ニ最モ多ク感染ノ機會トナルハ、母體產褥中ニ於テナリ、常態ノ惡露中ニモ病源菌ハ存在スルモノナレバ、分娩ニ際シテハ最モ心ヲ消毒ニ注グヲ要ス。

療法 第一ノ目的ハ身體栄養ヲ充分ニスルコトナリ、適當ナル栄養ニ依リテ抵抗力ヲ育成セザルベカラズ、其レニハ人乳最モ可ナリ、人工的栄養法ニ依ル場合ニアリテハ周到ノ注意ヲ要ス。

キハ他人ノ乳ニ頼ルモ可ナリ、人工的栄養法ニ依ル場合ニアリテハ周到ノ注意ヲ要ス、殊ニ腸胃ノ主トシテ障礙ヲ受ケタルトキハ、其障礙ヲ增長セシメザルト共ニ、出來得ルダケノ栄養價ヲ給セザルベカラズ、消化不良症ニ於ケル中毒症ノ場合ニ、對スルト同様ノ方針ニ依ラザルベカラズ。

化膿竈ハ外科的ニ處置スペク、但シ石炭酸沃度防腐謨ノ如キ強消毒剤ハ避クベキモノトス。

絶エズ心力ノ維持ニ注意シ、樟腦油「カフェイン」、「アドレナリン」ノ内用或ハ皮下注射ヲ怠ルベカラズ(OI: camphor, mehrmals täglich eine halbe Spritze subcutan, Coffein, citric, oder natrio-salicylicum

0,5:100, 4-5mal täglich 5gr, Solut. Adrenal. hydrochlor. (1:1000)½-1 Spritze)、虛脱ニ陥ル傾向アレバ温湯ヲ施シコラールガル Kollargol ロ灌腸シ、或ハ軟膏トシ貼付ス、近來連鎖球菌血清ノ注射ヲ稱揚スル人アレドモ其效力猶ホ充分ニ認メラレズ。

## 第十 初生兒丹毒 Erysipelas neonatorum

健康ナル初生兒ニ於テ生後一週、或ハ二週ニ起リ、或ハ敗血症ノ一症候トシテ來ルコトアリ、成人ハ、場合ト異ナル點ハ、早ク傳播轉移スル傾向アリテ、惡性ナリトス、其侵入門ハ多ク臍部ナリ、皮膚粘膜ノ小損傷、生殖器、肛門邊ニ發スルコト往々アリ。

症候 原發疾患部ノ發赤、浮腫様腫脹ヲ以テ始マル、其傳播頗ル速ニシテ全身ニ及ブコトアリ、高熱不安狀態、意識溷濁アリテ直チニ虛脱ニ陥ル、皮膚ノ變化ハ浮腫發赤ニ止マラズ、屢々水泡ヲ形成シ、陰囊若クハ骨表在部ノ皮膚ニハ壞死起り、稀ニハ蜂窩織炎ヲ生ズ、余ハ蜂窩織炎ヲ生ゼルモノ三例ヲ實見セリ。

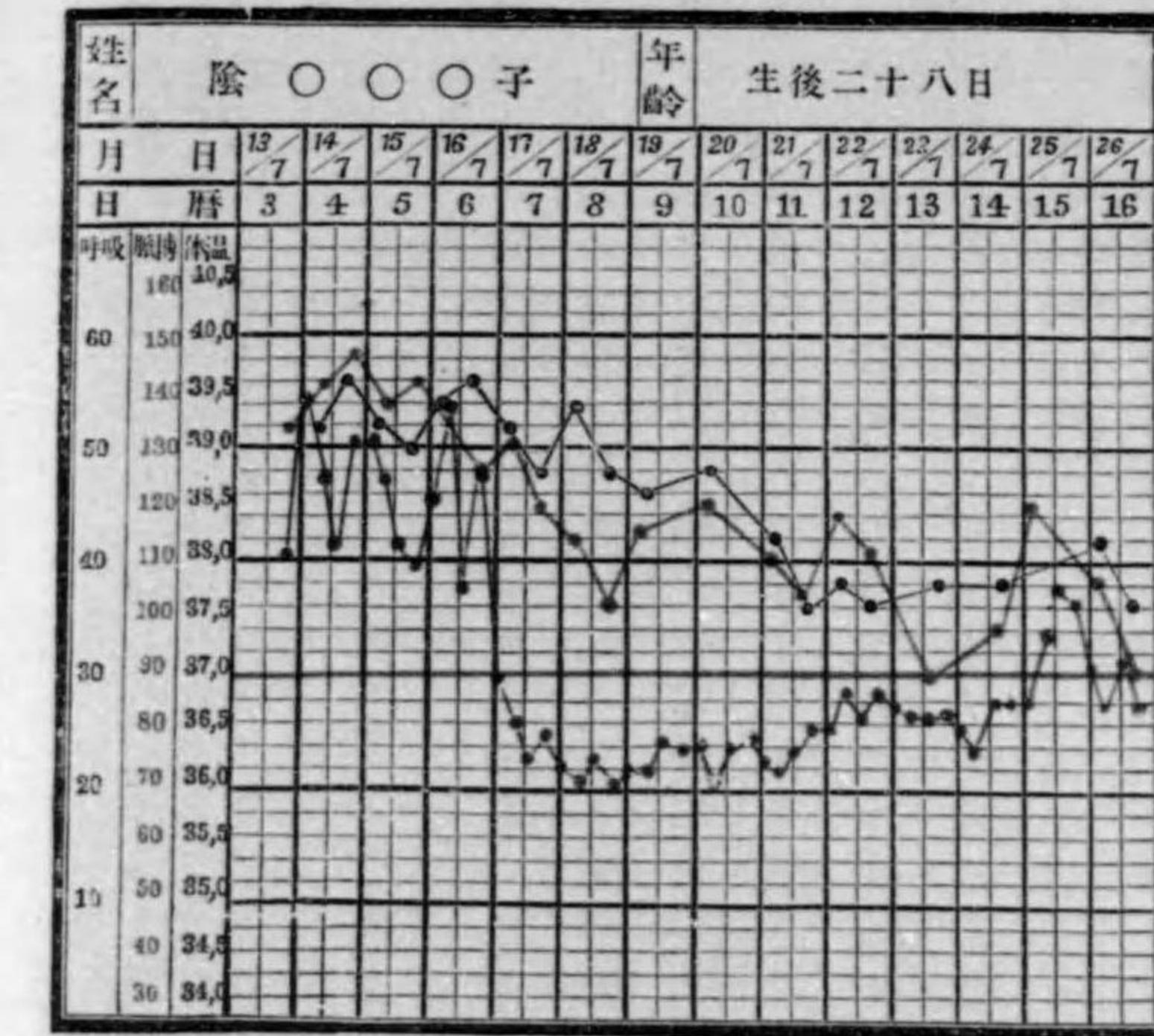
診斷 蜂窩織炎ト鑑別ヲ要スベキコトアリ。

豫後 一般ニ不良ナリ。

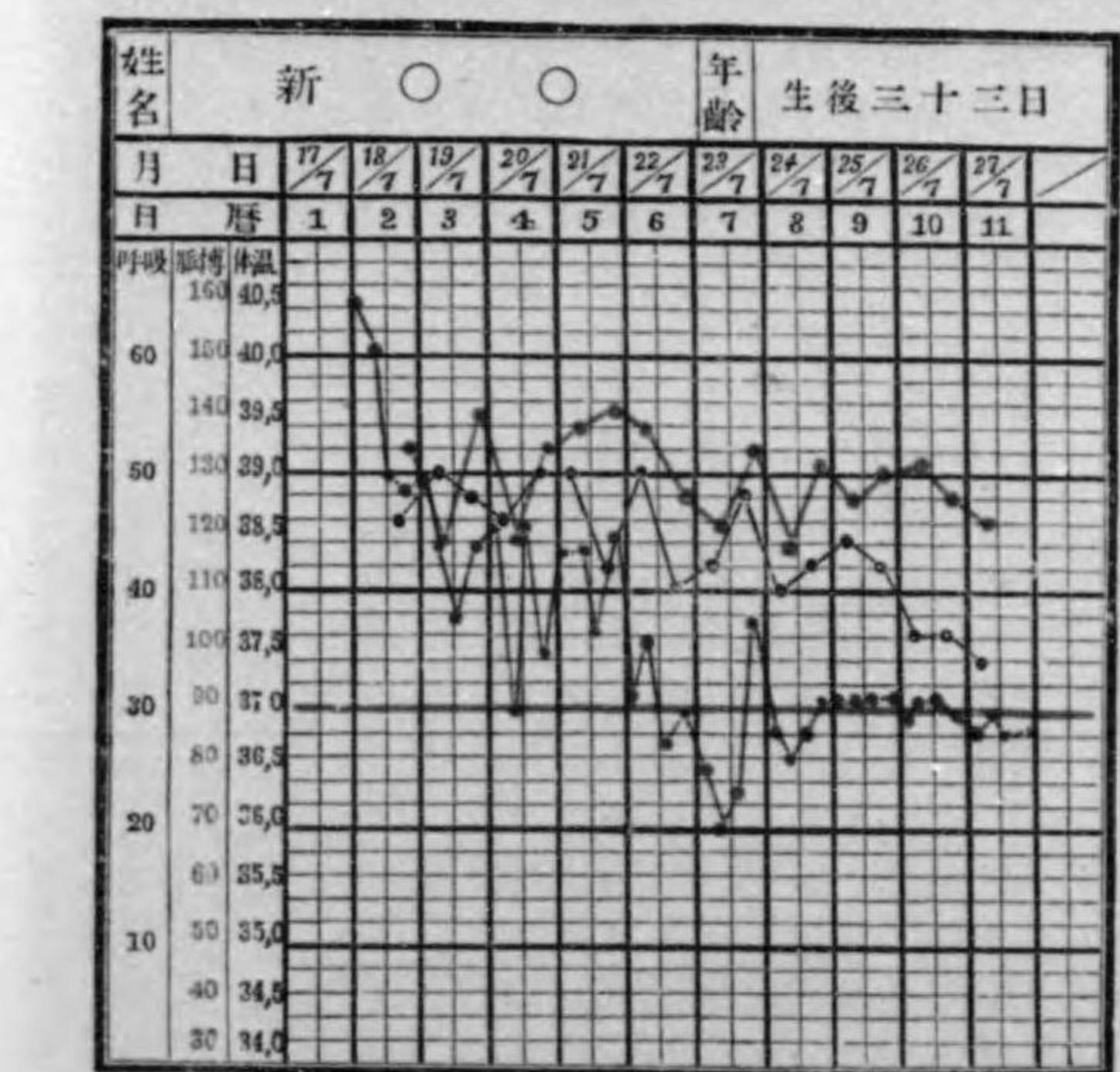
療法 「ハイチオール」軟膏ノ塗布「アルコホル」ヲ以テ湿布綃帶ヲ施ス、或ハ一%昇汞水又ハ醋酸鉛土水ノ濕布ヲ局部ニ行ヒ、栄養、ハ人乳ヲ用ヒ、強心劑ヲ與フベシ。

大正三年七月我延壽堂病院ニ二名ノ本症ヲ收容シ、其經過ヲ觀察セリ、甲ハ病ノ第三日、乙ハ其ノ第二日ヨリ實見シタルモノニシテ、甲乙共ニ治癒ヲ僥倖シ得タリキ、イセチオール療法偉功ヲ奏シタリ、左ニ甲乙ノ熱型ヲ掲ゲム

第三十九圖



第四十圖



### 第十一 初生兒急性膿漏眼 Conjunctivitis blennorrhoeica

acute neonatorum

屢々見ル所ノモノナリ、分娩ニ際シ胎兒ハ炎症アル產道ヲ通行スルトキ、殊ニ化膿性腔炎アリシ場合ニ感染ス、生後日ヲ經タル者ニ起ルコト稀ナリトス。

病源菌ハ多ク淋菌ナリ、其他肺炎菌、コッホ・ウヰーク氏菌 Koch-Weekscher Bacillus ニ因ル場合アリ。

**症候** 淋菌ニ原因スル膿漏眼ハ概ニ重症ニシテ、生後第二日乃至第三日ニ於テ眼瞼發赤強ク、腫脹緊満シ、細キ臉裂ヨリハ漿液血性分泌物ノ流出スルヲ見ル、開眼スルコト困難ナリ、屢々眼瞼ノ緊張強クシテ其部ハ壞死ニ陥ルベキ危惧ヲ抱カシム又結膜ニ格魯布性義膜ノ生ズルコトアリ、一兩日ヲ經過スレバ緊張度ノ減ズルト共ニ、多量ノ膿分泌ヲ來ス。

**経過** 合併症ナケレバ六乃至八週ノ經過ヲ取ル、其經過中最モ危險ナルハ炎症ノ角膜ニ及ブコトナリ、然ルトキハ角膜穿孔ヲ起ス、獨逸ニ於ケル盲目ハ殆んど三分ハ一ハ此膿漏眼ニ由來スルヲ見テモ其危險知ルベキナリ。

**合併症** 淋菌性關節炎、皮膚膿瘍、發疹等ナリ。

**療法** 豫防法トシテハ分娩後、直チニ一布仙ノ硝酸銀溶液或ハ五布仙ノ「ソフオール」液

(5% Sopholösung) ヲ 點眼ス。

療法トシテハ腫脹強盛ナルトキニ消炎療法ヲ施ス、乃チ氷嚢ノ貼付ハ稱揚スベキモノナレドモ、緊張餘リニ強キトキハ反ツテ害アリ、同時ニ硼酸水或ハ五千倍昇汞水ヲ用ヒテ頻回洗滌ヲ行フ、強ク化膿セル後ハ一乃至二布仙ノ銀液ヲ最初一日一回、後ニハ時々塗布シ、次デ生理的食鹽水ニテ洗フ、或ハ十布仙ノ「プロタルゴール」十布仙ノ「アルギロル」溶液(10% Argyrolösung)ヲ日ニ一二滴點眼ス、尙ホ治療中ハ常ニ角膜ヘノ傳染ヲ注意スベシ、若シ一眼ノミ侵サレシ場合ニハ、他側健眼ハ一日一回〇・五布仙ノ硝酸銀液ヲ點滴シ、絶エズ保護綱帶ヲ施シ置クベシ、已ニ角膜ニ炎症ヲ起セシ者ハ専門家ニ託スベシ。

## 第十二 初生兒ノ乳腺腫脹及ビ乳腺炎

Brustdrüsenschwellung der Neugeborenen und

Mastitis neonatorum

初生兒ハ其性ノ男タルト女タルトヲ問ハズ、生後三乃至四日ニ乳腺ノ腫脹アリ、而シテ二週ノ中頃ヨリ漸次縮小ス、之ヲ壓迫スルトキハ產婦ノ初乳ニ等シキモノヲ分泌ス。其原因ニ就テ近來ノ說ニ據レバ、元來產婦ニ初乳ノ分泌ヲ見ルハ卵巣及ビ子宮ニ於テ一種ノ物質形成セラレ、此刺載ニ因リテ乳汁ノ分泌起ルニ到ル、而シテ此物質ハ胎盤ヲ介シテ胎兒ニ移行シ、初生兒ニ初乳ニ似タル分泌ヲ見ルナリトス。

斯ノ如キハ寧ロ生理的ノ現象ナレドモ、或ハ初生兒ノ乳腺ニ炎性腫脹ヲ見ルコトアリ、其原因ハ上記、生理的腫脹ヲ強暴ニ壓迫シテ初乳ヲ排出シ、或ハ已ニ胎内ニ於テ壓傷シタル乳腺ニ化膿菌ノ傳染シテ起ルナリ。

症候 多クノ場合ニハ片側ノミ發赤シ、腫脹シ、壓痛アリ、適當ノ治療ヲ施サマレバ進ンデ膿瘍ヲ形成ス、然ルトキハ明ラカニ波動ヲ觸知スベク、尙ホ發熱アリテ不安狀ヲ呈ス、膿瘍ノ周圍ニ皮下蜂窩織炎ヲ起スコトアリ、稀ニ之ヨリ敗血症ヲ起ス。

療法 豫防トシテハ壓迫シテ初乳ヲ排出スルコトヲ避クベシ、生理的、腫脹ニハ綿塊ヲ充テ綱帶シ、保護スペシ、又硼酸軟膏ヲ附ス、炎症アルモノニハ硼酸水、醋酸礬土水、鉛糖水等ノ温湿綱帶ヲ施シ、膿瘍ヲ形成シタルモノハ切開シテ排膿スペシ、但シ放線狀切開法、Radiäre Incisionen ヲ行フ。

## 第十三 初生兒蛋白尿 Albuminurie der Neugeborenen

初生兒ニ蛋白尿ノ現ハル、コトハ一部ハ學者ヨリハ多數ノ場合ニアリト認メラレ、且之ヲ以テ生理的現象トサヘ信ゼラルハニ拘ハラズ、他ハ一部ハ人々ヨリハ寧ロ稀有ニ屬スト、ハル、其尿中ノ蛋白量ハ一般ニ少量ニシテ生後三日乃至六日頃ヨリ現ハレ、尿ノ沈渣スルトキハ尿道上皮細胞、白血球及ビ尿酸鹽ノ結晶等アリ。

初生兒ニ蛋白尿ノ現出スル原因トシテ種々ノ說アリ、胎生兒ト分娩後トニ於テ新陳代

謝ノ著シキ變化ニ伴ヒ、血液ノ循環旺盛トナル結果ト云ヒ、或ハ腎臟ニ先天的弱點ノ存スル際、殊ニ母氏子瘤ヲ患ヒタル場合ニ見ルト云フ。

#### 第十四 初生兒尿酸梗塞 Harnsäureinfarkt der Neugeborenen

尿酸梗塞ハ初生兒ニ見ルコト多ク、其腎臟ニ於ケル病理的變化トシテハ、乳頭ヨリ髓質中ヲ皮質ニ向ヒ黃赤色ノ放線像ヲ呈ス、之ヲ顯微鏡下ニ檢スルニ尿酸鹽ヨリ成ル。初生兒ニ尿酸排泄ノ增加アルコトハ疑ナキ事實ニシテ、之レ「スクレイン」ヲ有スル細胞ノ破壊ニ由來スルナリ。

梗塞ハ生後二週ノ間ニ漸次排泄セラル、故ニ初生兒ノ尿中ニ特異ナル黃赤色細粒ノ沈渣多量ニ現ハレ、極裸赤染シ、母氏ヲシテ一驚セシムコトアリ、此際之ヲ取リテ鏡検スル時ハ尿酸間柱、尿酸結晶及ビ上皮細胞ヲ見ル。

#### 第十五 初生兒大水疱疹 Pemphigus neonatorum

本病ノ原因ハ不明ナリ、觸接傳染性ニシテ小流行ヲ來スコトアリ、生後二乃至十四日ノ者ニ發シ、豌豆大ヨリ鳩卵大ノ水疱ハ四肢、軀幹ニ現ハレ、紅暈微弱ナルカ、或ハ全然之ヲ缺キ、發熱又タ全身症狀ヲ認メズ。

鑑別ヲ要スベキモノハ、微毒性大水疱疹ニシテ、之ニハ慢性大水疱疹ノ別名アリ(單純良)

性ノモノニ對シ、主トシテ手掌足蹠ニ發生シ水疱ハ豌豆乃至大豆大ニシテ弛緩シ濁リテ膿性或ハ僅ニ血色ヲ帶ビ、褐赤色ノ紅暈ヲ有ス、ワッセルマン氏反應陽性ナル等ヲ以テ、單純良性ノ本病ト差違アルモノトナス。

本病ノ經過ハ八乃至十四日ニシテ治シ、豫後佳良ナリ。

療法 亞鉛華撒布ヲ行フ、擴汎性ナルトキハ醋酸礬土水ノ罨法ヲナシ、又タ單寧浴ヲ施ス。

#### 第十六 剥脫性皮膚炎 Dermatitis exfoliativa

原因不明ナル罕有ノ疾患ニシテ、特ニ孱弱ノ兒及ビ早產兒ニ之ヲ見ル。

病理解剖的ニハ皮膚ノ角層 Hornschicht ハ乳嘴體ヨリ稍剥離ス。

症候 身體中、隨意ノ箇處ニ軟壓ヲ加ヘ、皮膚ヲ動カシテ乳嘴體ヲ露出セシメ、以テ體表ノ大部ヲ損傷セシメ得ルナリ。

豫後 良ク發達セル榮養ノ宜キ初生兒ニ就テハ不明、弱キ兒、人工榮養ノ者、若クハ二次的傳染ヲ起セル者ニ就テハ不良。

療法 本病ヲ治スルニハ人乳榮養ヲ採ルコト必要ナリ、初生兒大水疱疹ト同様ノ處置ヲナス、又タ三%硝酸銀液ヲ以テ日ニ一回損傷部位ニ塗布スペシ、尙ホ皮膚傳染ヲ避クルコトニ努ムベシ。